

夜航詩話卷之一

伊勢津阪孝綽君裕著

男 達 有 功 校

詩之於學者也、特其剩技耳、行有餘力、乃以學之、君子不必譏也、近時學風輕薄、舍本而趨末、以詩爲性命、六經群史、一切束之高閣、唯屹屹於五字七字之中、抽黃對白、翫惕時日、雖曰詩有別才、非關書也、然腹笥空虛、無所根據、如商家乏資本、不能致奇貨、嘔出心肝、寧死不休、焉能得驚人佳句邪、老杜自道讀書破萬卷、下筆如有神、此其所以妙絕千古也、東坡云、孟襄陽詩非不佳、可惜作料少、言學殖不足也、萬

詩の學者に於けるや、特に其剩技のみ、行、餘力あらば乃ち以て之を學ぶ、君子必しも譏らざるなり、近時學風輕薄、本を舍て、末に趨き、詩を以て性命と爲し、六經群史一切之を高閣に束ね、唯だ五字七字の中に屹々し、黃を抽き白を對し、時日を翫惕す、詩に別才あり書に關するに非ずと曰ふと雖、然も腹笥空虛にして根據する所なし、商家の資本に乏しくして、奇貨を致す能はざるが如し、心肝を嘔出し、寧、死するも休まず、焉ぞ、能く、人を驚すの佳句を得んや、老杜自ら道ふ「書を讀み萬卷を破らば、筆を下す神有るが如し」と、此れ其千古に妙絶なる所以なり、東坡云ふ、孟襄陽の詩は佳ならざるに非ず、惜むべし作料少し、學殖の足らざるを言ふなり、萬常之も亦云ふ、僧祖可の詩は清

常之亦云、僧祖可詩清新可喜、然讀書不多、故變態少、觀其體格、不過烟雲草樹山川鷗鳥而已、夫無學殖者、其弊皆如此、浮豔淺弱、徒以尖新取悅、雖剪裁極巧、而根柢蔑如矣、傳曰、皮之不存、毛將安傅、惜夫虛費工夫也。

夫禮義自賢者出、而賢者亂之、則後進末輩將奚以爲矩乎、稱呼禮之大節、名正言順、聖人所重、尤可謹也、辭藻可觀、稱呼苟濫、則非文章矣、況於僭竊妄作、亂君臣之義者乎、雨芳洲橘牒茶話曰、余弱冠時、在關東、學者知讀滄溟唐詩選、惟要詞語宏麗、不顧名分所在、競用丹鳳城蒼龍關等語、以爲東臺事、若在俗人、猶或可恕、乃以

新にして喜ぶべし、然れども讀書多からず、故に變態少し、其體格を觀るに烟雲草樹山川鷗鳥に過ぎざるのみぞ、夫れ學殖なき者は、其弊皆此の如し、浮豔淺弱、徒だ尖新を以て悅を取る、剪裁極めて巧なり、雖、而も根柢蔑如たり、傳に曰、皮の存せざる、毛將た安くにか傅かんぞ、惜いかな工夫を虚費するなり。

夫れ禮義は賢者より出づ、而して賢者之を亂さば、則ち後進末輩將た奚を以て矩と爲さんや、稱呼は禮の大節にして、名正しく言順へるは聖人の重する所、尤も謹むべきなり、辭藻觀るべきも、稱呼苟も濫なれば、則ち文章に非ず、況や僭竊妄作して君臣の義を亂だすに於ておや、雨芳洲の橘牒茶話に曰く、余弱冠の時、關東に在り、學者、滄溟の唐詩選を讀むを知り、惟だ詞語の宏麗を要し、名分の在る所を顧みず、競ふて丹鳳城蒼龍關等の語を用ひ、以て東臺の事と爲す、若し俗人にあらば、猶ほ或は恕すべし、乃ち達掖の君子を以て、春秋の義を犯すを知らず、罪を犯

逢接君子不知犯春秋之義得罪於名教大矣此蓋慨木門僧濫藤社狂妄也滄浪詩話曰劉公幹贈五官中郎將昔我從元后整駕至南鄉過彼豐沛都與君共翱翔元后蓋指曹操也至南鄉謂伐劉表之時豐沛都喩操護郡也王仲宣從軍詩籌策運帷幄一由我聖君聖君亦指操也是時漢帝尙存而二子之言如此正與荀彧比曹操爲高光同科春秋誅心之法二子其何逃四溟詩話曰謝瞻從宋公戲馬臺送孔令曰聖心眷佳節揚鑿辰行宮謝靈運曰良辰感聖心雲旗興暮節是時晉帝尙存二公世臣媚裕若此何也此皆端似爲今日道

教に得る大なりと、此れ蓋、木門の僧濫、藤社の狂妄を慨するなり、滄浪詩話に曰、劉公幹、五官中郎將に贈る、「昔我、元后に従ひ、駕を整へて南郷に至る、彼の豐沛の都を過ぎ、君と共に翱翔す、元后とは、蓋、曹操を指すなり、南郷に至るは、劉表を伐つ時を謂ふ、豐沛の都は操の護郡に喩ふるなり、王仲宣の從軍詩に「籌策、帷幄に運らす、一に我聖君に由る」と、聖君も亦操を指すなり、是の時漢帝尙ほ存し、而して二子の言此の如し、正に荀彧が曹操を比して高光を爲す科を同じくす、春秋誅心の法、二子其れ何ぞ逃れん、四溟詩話に曰、謝瞻、宋公に従ひ、戲馬臺に孔令を送るに曰く、「聖心、佳節を眷し、鑿を揚けて行宮に戻る」謝靈運曰、「良辰は聖心に感じ、雲旗は暮節に興る」と、是の時、晉帝尙ほ存す、二公は世臣、裕に媚ぶる此の若きは、何ぞや、此皆端に今日の爲めに道ふに似たり。

我邦凡百稱呼多不雅馴而地名特甚也。先輩病其難入詩往往私修改之蓋詩者爲諷詠之物妙在化俗爲雅故其不勝野朴者不得不莊飾就雅馴耳然徂徠南郭輩如改諏訪湖爲鷺湖岡崎城爲豐沛目黑山爲驪山白山爲高山胡亂牽彊是誠何義也自來好奇之徒雖其不必陋者亦強欲擬漢土卽輒擅自換易使人不能辨其爲何地楊萬里詩云里名只道新名好不道新名誤後人可見此弊宋人作俑至明李王輩謂燕京爲長安以便其聲調遂波及此方致紊興志名實俱亡不唯風雅之罪人也。

謂武藏爲武昌武昌最爾一僻邑擬非其

我邦凡百の稱呼多くは雅馴ならず、而して地名は特に甚しきなり、先輩其の詩に入り難きを病み、往々私に之を修改す、蓋詩は諷詠の物たり、妙は俗を化し雅爲すに在り、故に其野朴に勝へざる者は、莊飾して雅馴に就かざるを得ざるのみ、然も徂徠・南郭輩、諏訪湖を改めて鷺湖爲し、岡崎城を豐沛爲し、目黒山を驪山爲し、白山を高山爲すが如きは、胡亂牽彊、是誠に何の義ぞや、自來奇を好むの徒は、其必しも陋ならざる者も雖、亦強ひて漢土に擬せんを欲し、即ち輒ち擅自ら換易し、人をして其何地たるを辨する能はざらしむ、楊萬里の詩に云「里名只道ふ新名好^ち、道はず新名後人を誤る」に、見るべし此弊は宋人俑を作るを、明の李王輩に至りて、燕京を謂つて長安爲し、以て其聲調に便にし、遂に此方に波及し、興志を紊し名實俱に亡ぶるを致す、唯に風雅の罪人たるのみならざるなり。

武藏を謂つて武昌爲す、武昌は最爾たる一僻邑なり、擬する

倫然徂徠南郭輩爲用武昌魚武昌柳故事借以稱之尙有可譏者後人遂不必用其事而相沿稱之甚亡謂也其餘如筑紫爲紫陽安房爲房陵石見爲碓石伊豫爲豫章加賀爲賀蘭和泉爲酒泉若狹爲若耶皆唯因一字假用不復顧其當否不亦妄乎至如美濃爲襄陽伊賀爲潯陽播磨爲都陽相模爲湘中名護屋爲吳門富士川爲巫峽妄之又妄近於兒戲矣。

稱江戸爲東都山本信有非之是矣然其徒以方音相通借用在土字遂稱爲在城不考之過也在弱也豈可以稱霸主金城乎蓋得之風土記殘本喜以術奇不遑省其爲不祥耳夫苟有所本可以復古稱則

其倫に非ず然ども徂徠南郭の輩武昌魚武昌柳の故事を用ひんが爲に借りて以て之を稱す尙は譏す可き者あり後人遂に必しも其事を用ひず而して相沿ふて之を稱す甚だ謂れなきなり其餘筑紫を紫陽爲し安房を房陵爲し石見を碓石爲し伊豫を豫章爲し加賀を賀蘭爲し和泉を酒泉爲し若狹を若耶爲すが如き皆唯だ一字に因りて假用し復た其當否を顧みず亦妄ならずや美濃を襄陽爲し伊賀を潯陽爲し播磨を都陽爲し相模を湘中爲し名護屋を吳門爲し富士川を巫峽爲すが如きに至つては妄の又妄兒戲に近し。

江戸を稱して東都爲すは山本信有之を非さず是なり然れども其徒は方音の相通するを以て在土の字を借用し遂に稱して在城爲すは考へざるの過なり在は弱なり豈以て霸王の金城を稱すべけんや蓋之を風土記の殘本に得喜びて以て奇を術ひ其の不祥たるを省みるに遑あらざるのみ夫れ苟も本づく所有り以て古稱を復すべくば則ち紀の若山舊弱の字

紀之若山舊用弱字、今復稱弱城可乎、徠詩題、染井作蘇迷、秋子帥詩、日光山作二荒山、亦皆有來處、然其爲不祥尤甚、不可不諱避也。

隅陀川稱墨水、亦從徠、始本諸真字勢語云、然惡名污穢、如虜地之水、詩詞中漫用之、多不與事相稱、亦不考之過也。

國雅用地名、自然闕湊、不假安排、於詩則殊不稱焉、若使西人學國雅、亦猶是也、故詩用地名、不可牽強、必待自然入詩而後可也、不然其語生硬氣、胛不通、如本株接竹耳、初學好用之、可戒也。

作詩使事、必用六朝已上爲古、其說尙矣、藤老遂堅禁用後世典故、不讀唐以後書、

を用ふ、今復た弱城を稱して、可ならんか、徠の詩題に、染井を蘇迷に作る、秋子帥の詩に、日光山を二荒山に作る、亦皆來處有り、然れども其不詳たる尤も甚し、諱避せざる可からざるなり。

隅陀川、墨水を稱す、亦徠より始まる、諸を真字勢語に本く云ふ、然れども惡名汚穢にして、虜地の水の如し、詩詞中漫に之を用ふれば、多く事と相稱はず、亦考へざるの過なり。

國雅に地名を用ふる、自然に闕湊し安排を假らず、詩に於ては則ち殊に稱はず、若し西人をして國雅を學ばしむるも、亦猶は是のごとし、故に詩に地名を用ふる、牽強す可からず、必ず自然に詩に入るを待つて而る後可なり、然らずんば其語生硬にして氣脈通ぜず、木株に竹を接ぐが如きのみ、初學好みて之を用ふ、戒むべきなり。

詩を作り事を使ふに、必ず六朝已上用ふるを古と爲す、其說尙し、藤老は遂に堅く後世の典故を用ふるを禁じ、唐以後の書

大聲所囂、一時奉爲三尺、不亦固乎、大抵天地間事、何物不爲詩料、故東坡云、街談市語皆可入詩、但要人鑄化耳、卽唐以後事、須選擇用之、不失古雅、乃可、若夫狐穴詩人、夸博炫奇、好用僻典、非自注出處、則人不能解者、亦不可以不戒也。

王弼州云、詩妙在有意無意、可解不可解之間、此言誤人太甚、慕尙嘉隆僞體者、相率沈迷雲霧中、故作不可解之語、以爲深奧高古、讀者必再三詰問、纔得達其意也、或見平澹易解者、輒斥爲元輕白俗、雖工不道好矣、夫作詩不可解、將焉用之、不若無作也、雖然詩貴含蓄、不可直情徑行、鄭善夫云、詩之妙處、正在不必說到盡、不必

を讀まず、大聲の囂する所、一時奉じて三尺を爲す、亦固ならずや、大抵天地間の事、何物か詩料たらざらん、故に東坡云ふ、街談市語皆詩に入るべし、但だ人の鑄化するを要するのみ、卽ち唐以後の事は須らく選擇して之を用ふべし、古雅を失はずんば乃ち可なり、若し夫れ狐穴詩人博を夸り奇を炫し、好んで僻典を用ふ、自ら出處を注するに非んば、則ち人解する能はざる者、亦以て戒めざるからざるなり。

王弼州云ふ、詩の妙は有意無意解すべく解す可からざるの間に在り、此言、人を誤るこゝ太甚し、嘉隆の僞體を慕尙する者は、相率ゝて雲霧の中に沈迷し、故らに、解す可からざるの語を作し、以て深奧高古を爲す、讀む者必ず再三詰問して纔に其意を達するを得るなり、或は平澹にして解し易き者を見れば、輒ち斥けて元輕白俗を爲し、工も雖、好も道はず、夫れ詩を作つて解す可からずんば、將た焉んぞ之を用ひん、作る無きに若かざるなり、然り雖、詩は含蓄を貴ぶ、直情徑行なる可からず、鄭善夫云、詩の妙處は正に必ず説て盡くるに到らず、必ず寫して

寫到眞而其欲說欲寫者自宛然可想雖
可想而又不可道斯得風人之義今人往
往要到眞處盡處所以失之也此訣詩家
金針可以繙出鴛鴦矣李東陽云作詩必
使老嫗解聽固不可然必使士大夫讀而
不能解亦何故耶是持平之論正得詩之
中庸矣。

余生平閉目搖手不道古樂府那波魯堂
曰韓使覽吾邦詩集其有擬古樂府者輒
儉卷度紙清人在長崎者亦不屑觀之惡
其腐爛令人欲吐也孔子之家祭肉不出
三日出三日則不食之矣後人作古樂府
其無爲三日後之祭肉乎。

擬風雅體者亦直兒戲耳其作之尤易不

眞に到らざるに在り、而も其説かんに欲し、寫さん欲する者
は、自ら宛然として想ふべし、想ふ可しと雖、而も又道ふ可から
ず、斯れ風人の義を得たり、今人は往々にして眞處盡處に到る
を要す、之を失ふ所以なり、此の訣詩家の金針なり、以て鴛鴦を
繙出すべし、李東陽云ふ、詩を作り必ず老嫗をして聽を解せし
むるは尚より不可なり、然れども必ず士大夫をして以んで解す
る能はざらしむるも亦何の故ぞや、是れ持平の論にして、正
に詩の中庸を得たり。

余生平目を閉ぢ手を揺かし古樂府を道はず、那波魯堂曰く、韓
使、吾邦の詩集を覽て、其擬古樂府有る者は、輒ち卷を儉み紙を
度るに、清人の長崎に在る者亦之を觀るを屑しとせず、其の腐
爛、人をして吐かん欲せしむるを惡むなり、孔子の家、祭肉、
三日を出ださず、三日を出づれば則ち之を食はず、後人の古樂
府を作る、其れ三日後の祭肉たるなからんか。

風雅體に擬する者も、亦直に兒戲のみ、其の之を作る、尤も易

過翻摘故紙數章可立成矣故陳腐餽釘
味若嚼蠟絕無風趣徒以其體之古欺重
蒙之耳目亦狡獪伎倆欲愚人祇以自愚耳

宋初朝士競尙西崑體多竊取李義山詩
句管內宴優人有爲義山者衣衫襤褸旁
有人問君何爲爾答曰吾爲諸館職搏撿
至此聞者大笑滄溟詩文爲該社蠶食亦
似此戲良可笑爾

謝茂秦云凡作詩誦之行雲流水聽之金
聲玉振觀之明霞散綺講之獨繭抽絲此
詩家四關使一關未透則非佳句矣洵知
言哉

詩家或擬徐夜叉袁波旬予嘗譬之猶上
國人捉鼻捲舌效東奧語吳吳囁晰醜態

し故紙を翻摘するに過ぎず數章立どころに成す可し故に陳腐餽釘にして味蠟を嚼むが若く絶えて風趣無し徒らに其體の古を以て童蒙の耳目を欺く亦狡獪の伎倆なり人を愚にせんを欲して祇に以て自ら愚にするのみ

宋初に朝士競ふて西崑體を尙び多く李義山の詩句を竊取す嘗て内宴に優人に義山を爲す者あり衣衫襤褸旁に人有り問ふ君何すれを爾るに答て曰吾諸館職に搏撿せられて此に至るに聞者大に笑ふ滄溟の詩文蠶社に蠶食せらる亦此の戲に似たり良に笑ふ可きのみ

謝茂秦云凡そ詩を作る之を誦すれば行雲流水之を聴けば金聲玉振之を觀れば明霞散綺之を講すれば獨繭抽絲を抽く此れ詩家の四關一關未だ透らざらしめば則ち佳句に非ず洵に知言なるかな

詩家或は徐夜叉袁波旬に擬す予嘗て之を譬ふ猶ほ上國人の鼻を捉り舌を捲き東奧の語に效ふがごとし吳吳囁晰醜態而

溢于面貌而聽者不能解徒供笑資耳不
如無爲也唯赤石梁峽巖殊近自然真優
孟之孫叔敖也。

王敬美曰太史公蔓辭累句班孟堅洗削
殆盡非謂班勝於司馬顧在班分量宜爾
予謂後進學杜詩亦宜具此識膽斯善學
柳下惠者也。

沈休文八病蔽法不足據先輩辯之確矣
獨鶴膝一病律詩宜少避之王右丞溫泉
寓目新豐樹裏行人度小苑城邊獵騎回
聞說甘泉能獻賦懸知獨有子雲才謝茂
秦云度賦同韻非詩家正法蓋二字共屬
遇韻不啻同聲是鶴膝之尤甚者雖不妨
白璧能無少損連城故茂秦惜之也此方

貌に溢る、而して聽く者解する能はず、徒に笑資に供するのみ、
爲す無きに如かざるなり、唯だ赤石の梁峽巖殊に自然に近し、
眞に優孟の孫叔敖なり。

王敬美曰く、太史公は蔓辭累句、班孟堅は洗削殆んど盡く、班は
司馬に勝るを謂ふに非ず、顧ふに班の分量に在つて、宜しきのみ、
予謂ふ後進の杜詩を學ぶ、亦宜しく此の識膽を具ふべし、
斯れ善く柳下惠を學ぶ者なり。

沈休文八病蔽法據るに足らず、先輩之を辯ず、確なり、獨、鶴膝
一病、律詩宜く少しく之を避くべし、王右丞溫泉寓目に「新豐樹
裏行人度り、小苑城邊に獵騎回る、説くを聞く甘泉能く賦を獻
かす、懸に知る獨り子雲の才有り、謝茂秦云、度賦同韻、詩家の
正法に非ず、蓋し二字共に遇韻に屬す、昔に同聲なるのみな
らず、是れ鶴膝の尤も甚しき者、白璧を妨げず、雖、能く少しく
連城を損するなからんや、故に茂秦之を惜むなり、此方の人の
聲韻に於けるや、平入二聲は相ほ甄別す、雖、上聲と去聲との

之人於聲韻也、平入二聲雖粗甄別、若上聲與去聲、則渾然混其響、尤易犯此病、故詩家少留意、第三五七句脚、遇其響相似者、輒必檢韻書以正之、是可耳。

凡諸學技藝者、正熟而奇出、常極而變生、蓋不期然而然爾、芥子園畫傳所謂、有法之極歸於無法、不唯繪事也、若未習之常而欲試其變、變未可得而先失其常、猶壽陵餘子學步於邯鄲、未得國能而又失其故步、直匍匐而歸耳、況夫藝文之業、尤宜守其正也、山谷云、好作奇語、自是文章一病、東坡云、凡人文字、當務使平和、至足之餘、溢爲怪奇、蓋出於不得已也、此藝苑要訣、藥石於時弊、學者纔習操觚、未知常法、

若きは、則ち渾然其響を混ず、尤も此病を犯し易し、故に詩家少しく意を留め、第三五七の句脚、其響相似たる者に遇はば、輒ち必ず韻書を檢し、以て之を正さば、是れ可ならんのみ。

凡そ諸の技藝を學ぶ者、正熟して而して奇出で、常極つて而して變生ず、蓋然るを期せずして然るのみ、芥子園畫傳に謂はゆる、有法の極は無法に歸す、唯、繪事のみならずなり、若し未だ之が常を習はずして、其變を試みんご欲せば、變未だ得可からずして、先づ其常を失ふ、猶ほ壽陵餘子の歩を邯鄲に學ぶがごとし、未だ國能を得ずして、又其故歩を失ふ、直に匍匐して歸らんのみ、況んや夫の藝文の業は、尤も宜しく其正を守るべきなり、山谷云、好んで奇語を作すは、自らはれ文章の一病、東坡云、凡そ人の文字は、當に務めて平和ならしむべし、至足の餘、溢れて怪奇を爲る、蓋、已むを得ざるに出づるなり、此れ藝苑の要訣にして、時弊に藥石せり、學者纔に觚を操るを習へば、未だ常法を知らずして輒ち奇法を用ひ、未だ正路を

輒用奇法、未問正路、輒走邪路、務安僻字、肆驚險語、使人難誦而難解、亦將何用哉、徒貽笑於大方耳。

錢虞山云、詩到真處必平平、到極處即奇善哉、其言之也、蓋至其上達、正熟而奇出、常極而變生、換骨脫胎、從心所適、亦莫之退禦也。

書法備於真書、溢而爲行草、故學書必先楷法、漸而至于行草、焉有不善楷法而能作縱體者哉、今人多尙行草、未始學真、而徑習草、猶未能莊語而輒放言耳、東坡之言曰、真如立、行如行、草如走、未有未能立而能行、未能行而能走者也、余嘗謂學詩必從絕句入、亦猶是也、故每論初學、不許

問はずして、輒ち邪路に走り、務めて僻字を安やすき、肆ままに險語を驚おどせ、人をして誦し難く解し難からしむ、亦將た何ぞ用ひんや、徒らに笑を大方に貽たまさんのみ。

錢虞山云、詩は真に到る處必平々、極に到る處即ち奇あま、善いかな其之を言ふや、蓋し其上達に至らば、正熟して奇出で、常極つて變生じ、換骨脱胎、心の適く所に從ひ、亦之を湯禦する莫きなり。

書法は真書に備はり、溢れて行草ぎ爲る、故に書を學ぶは、必ず楷法を先にして、漸にして行草に至る、焉んぞ楷法を善せずして、能く縱體を作す者あらんや、今人多くは行草を尙ひ、未だ始より真を學ばずして徑に草を習ふ、猶ほ未だ莊語を能くせずして、輒ち放言するが、ここまきのみ、東坡の言に曰、真は立つが如く、行は行くが如く、草は走るが如し、未だ、未だ立つ能はずして能く行き、未だ行く能はずして能く走る者有らざるなりと、余嘗て謂ふ、詩を學ぶには必ず絶句より入るこ、亦猶ほ是の如し、故に毎に初學に勸して、蓋に律詩を作るを許さず、客あり誇

濫作律詩有客誇稱某氏門下無人無詩無詩不七律余哂曰實如所言恐無詩矣其人_レ不達擲會稿來示果無一首可觀信乎未有未能立行而能走者也。

寫字好作異體或用替代字如時作肯和作穌法作灑拜作擗察作營殺作煞村學究常態非大雅所尙或有自用之姓名者如鹵郵蕙穉埜蠢之類是當今之世敢用古衣冠其爲非禮可謂風雅罪人矣明李文正云古字不可不知其音義但不可著意用之於文字中清顧寧人云舍近今恆用之字而借古字之通用以相誇者此文人之所以自文其陋也凡用古語之外一切無用耳。

稱す某氏の門下は、人として詩せざるは無く、詩として七律ならざるはなしと、余哂つて曰、實に言ふ所の如くば、恐くば、詩無らん、其人達せず、會稿を擲へて來り示す、果して一首の觀る可きもの無し、信たるかな、未だ、未だ立行する能はずして、能く走る者ありざるなりと。

字を寫すに好んで異體を作し、或は替代の字を用ふ、時を肯に作り、和を穌に作り、法を灑に作り、拜を擗に作り、察を營に作り、殺を煞に作るが如き、村學究の常態にして、大雅の尙ぶ所に非ず、或は自ら之を姓名に用ふる者有り、鹵郵蕙、穉埜蠢の類の如き、是れ今の世に當り、敢て古の衣冠を用ふ、其非禮たる、風雅の罪人と謂ふべし、明の李文正云ふ、古字は其音義を知らざる可からず、但意を著けて之を文字の中に用ふ可からず、清の顧寧人云ふ、近今恆用の字を舍て、而して古字の通用を借り、以て相誇る者は、此れ文人の自ら其陋を文る所以なり、凡そ古語を用ふるの外は、一切用ふる無きのみ。

古詩之妙、其工可及也、其拙不可及也、若通篇皆拙、固無取已、使其皆工、則恐終無古氣、安在其爲古詩哉、蓋寄大音於沈寥之表、存至味於淡泊之中、此乃所以爲難也。

七言古詩押平韻者、落韻句脚避平音字、押上聲則避上聲、押去入則避去入、且無用通韻、況叶音乎、蓋換韻第一句不妨用通韻也。

五言律詩仄起爲正格、平起爲偏格、七言正與此相反、絕句亦然、沈存中筆談曰、唐名賢輩詩多用正格、如老杜律詩用偏格者十無一二、此間詩人率不之知、卻多用偏格、故拈出之。

古詩の妙、其工は及ぶべきなり、其拙は及ぶ可からざるなり、若し通篇皆拙なれば固より取る無きのみ、其をして皆工ならしめば、則ち恐らくは終に古氣無からん、安んぞ其古詩たるに在らんや、蓋大音を沈寥の表に寄せ、至味を淡泊の中に存す、此れ乃ち難しき爲す所以なり。

七言の古詩に平韻を押す者は、落韻の句脚に平音字を避く、上聲を押せば、則ち上聲を避け、去入を押せば、則ち去入を避く、且通韻を用ふるなし、況んや叶音をや、蓋換韻の第一句は、通韻を用ふるを妨げざるなり。

五言の律詩、仄起を正格と爲し、平起を偏格と爲す、七言は、正に此と相反す、絶句も亦然り、沈存中の筆談に曰、唐の名賢輩の詩は、多く正格を用ふ、老杜の律詩の如き、偏格を用ふる者十に一二無し、此間の詩人率ね之を知らず、却て多く偏格を用ふ、故に之を拈出す。

古人論七言律詩對句易工、結句難工、起句尤難工、蓋七律首句宜突然而起、勢不可遏、所以難工也、然此猶可能、第二句好尤難得也、蓋是句領全首詩神、句句皆從此生、一篇爭勝在此、畫龍點睛要處、而其所用力在使人不覺、所以尤難也、余見近人之作、多病是句欠鍊、斤兩太輕、其能與全體稱者鮮矣、皆坐視爲等閑、率爾填詞耳、是七律第一要訣、其可以忽乎哉。

唐賢律詩有用雙字於數處者、氣魄薄弱、不足多效、後學或蹈此病、詰之則歷舉唐詩、藉爲口實、乃醜婦做顰耳。

五言絕句、本古詩遺體、宜間用側韻、若篇篇平韻、亦固陋之習、西人不然也、邵子湘

古人七言律詩を論ず、對句は工なり易く、結句は工なり難く、起句は尤も工なり難しき、蓋、七律の首句は宜しく突然として起り、勢、遏む可からざるべし、工なり難き所以なり、然れども此れ猶能くす可し、第二句の好は、尤も得難し、蓋是の句は全首の詩神を領し、句々皆此れ從り生ず、一篇勝を爭ふ此に在り、畫龍點睛の要處にして、其力を用ふる所、人をして覺らざらしむるに在り、尤も難き所以なり、余近人の作を見るに、多くは是句鍊を欠ぎ、斤兩ただ輕きを病む、其能く全體を稱ふ者は鮮し、皆視て等閑を爲し、率爾に詞を填むるに坐するのみ、是れ七律第一の要訣なり、其れ以て忽にす可けんや。

唐賢の律詩に、雙字を數處に用ふる者あり、氣魄薄弱なり、多く效ふに足らず、後學或は此病を蹈む、之を詰れば、則ち唐詩を歴舉し藉りて口實を爲す、乃ち醜婦の顰に倣ふのみ。

五言絶句は、本古詩の遺體なり、宜しく間々側韻を用ふべし、若し篇々平韻なるは亦固陋の習、西人は然らざるなり、邵子湘

古今韻畧云、平韻供律詩之用、仄韻供古詩之用、然則五絕用仄韻、其本色也、凡用平韻者、宜釋順聲律、慎無失黏、或謂短笛無腔、不妨信口、妄矣、若側體全用古詩格、必拘繩墨、反是固陋、王弼州云、仄韻絕句、不妨拗體、如長孫佐輔、獨訪山家歇還涉、茅屋斜連隔松葉、主人聞語未開門、繞籬野菜飛黃蝶、句中第二六字皆不黏也、七言猶然、況五言乎。

明戴文進以畫顯名、畫秋江獨釣圖、一人朱衣把竿、宣宗嘆其工、欲召見之、或從旁奏曰、此畫恨失大體、朱衣朝祭之服、可用之漁獵乎、遂寢其命、作詩亦復如是、凡一句一字須著意點檢、若等閑放過、不用精

の古今韻畧に云、平韻は律詩の用に供し、仄韻は古詩の用に供す、然らば則ち五絶に仄韻を用ふるは、其の本色なり、凡そ平韻を用ふる者は、宜しく聲律を謹順にし、慎んで失黏無かるべし、或は短笛に腔無し、口に信ずまを妨けずと謂ふは、妄なり、若し側體は全く古詩の格を用ふ、必ず繩墨に拘るは、反つて是れ固陋なり、王弼州云、仄韻の絶句は、拗體を妨げず、長孫佐輔の「獨り山家を訪ひ歇み還た渉る、茅屋斜に連りて松葉を隔つ、主人語を聞きて未だ門を開かず、籬を繞る野菜に黃蝶飛ぶ」の如き、句中第二六字は皆黏せざるなり、七言猶然り、況んや五言をや。

明の戴文進、畫を以て名を顯はす、秋江獨釣の圖を畫き、一人朱衣竿を把る、宣宗其工なるを嘆し、召して之を見んむ欲す、或ひ之旁より奏して曰、此畫恨むらくは大體を失す、朱衣は朝祭の服なり、之を漁獵に用ふべけんや、遂に其命を寢む、詩を作るも亦復た是の如し、凡そ一句一字、須らく著意點檢すべし、若し等閑に放過し、精細の工天を用ひずんば、往々にして體を失

細工夫往往不免失體貽笑也。

王元美題畫云白雲不肯住、曩作出山狀、
中有朱衣人、可是山中相、山中朱衣亦是
畫手破綻、乃將陶貞白事、湊巧而回護之、
可謂有濟物之才矣。

作詩不可大著題、咏物尤忌黏皮骨、東坡
云、善畫者畫意不盡、形善詩者道意不道
名、故其詩云、論畫以形似、見與兒童鄰、作
詩必此詩、定知非詩人、此戒皮相詩學要
訣、咏物必此物、終非咏物手、徒是泥塑美
人、有何風趣、如崔珣鴛鴦、雍陶白鷺、可謂
著題、然區區寫體帖、徒蹈剪裁爲花之
弊、故識者譏爲村學中體、必也空中構樓
閣、說得有波瀾、不涉理路、不落言詮、妙在

ひ笑を貽すを免れざるなり。

王元美、畫に題して云、「白雲肯て住らず、曩こして山を出づる
狀を作す、中に朱衣の人有り、是れ山中の相なる可し」と、山中
の朱衣も亦是れ畫手の破綻なり、乃ち陶貞白の事を將つて湊巧
して之を回護す、濟物の才有りと言ふべし。

詩を作るに、大に題に著く可からず、咏物は尤も皮骨に黏する
を忌む、東坡云、畫を善くする者は、意を盡きて形を畫かず、詩
を善くする者は、意を道ひて名を道はずと、故に其詩に云、「畫
を論ずるに形似を以てするは、見、兒童に鄰す、詩を作り此詩を
必とせば、定めて知る詩人に非ず」と、此れ皮相を戒むるなり、
詩學の要訣なり、物を咏じて、此の物を必とせば、終に物を咏す
る手に非ず、徒に是れ泥塑の美人なり、何の風趣有らん、崔珣の
鴛鴦、雍陶の白鷺の如き、著題と謂ふ可し、然るに區々寫體帖
し、徒らに剪裁して花を爲るの弊を蹈む、故に識者譏りて村學
中體と爲す、必ずや空中に樓閣を構へ、説き得て波瀾有り、理路

有意無意不卽不離間、然後始得出入化境而免僮父面目矣。

陳眉公評袁宏詩云、凡題圖中美人詞、須當在意上生出景來、又當收拾景在意上去、方能得其姿態、若所謂楊柳腰秋波眼、則便入惡道矣、此言不但美人、凡題畫詩皆宜如是。

清人王翦林云、爲蘭亭圖者、不難於崇山峻嶺茂林脩竹、獨能傳出天朗氣清、惠風和暢之意、乃佳、詩家賦事咏物、亦須參此機也、如杜詩咏雨、野徑雲俱黑、江船火獨明、咏雪、暗度南樓月、寒深北渚雲、不摹雨雪之狀、而寫雨雪之神、此化工之筆。

呂氏童蒙訓云、咏物詩不待分明說盡、只

に涉らず、言聲に落ちず、妙は有意無意不卽不離の間に在り、然る後ら始めて化境に出入するを得、而して僮父の面目を免れん。

陳眉公、袁宏の詩を評して云、凡そ圖中の美人に題する詞は、須らく當に意上に在りて景を生出し來るべし、又當に景を收拾し意上に在りて去るべし、方に能く其姿態を得ん、若しくは謂はゆる楊柳の腰秋波の眼は、則ち便ち惡道に入らん、此言但に美人のみならず、凡そ題畫の詩は皆宜しく是の如くなるべし。

清人王翦林云、蘭亭圖を爲すには、崇山峻嶺茂林脩竹を離し、せず、獨り能く天朗氣清、惠風和暢の意を傳出すれば乃ち佳なり、詩家の事を賦し物を詠するも、亦須らく此機に參すべきなり、杜詩の雨を咏するが如き、野徑雲俱に黒く、江船火獨り明かなり、雪をす、暗は度る南樓の月、寒は深し北渚の雲、の如き、雨雪の狀を摹せずして、雨雪の神を寫す、此れ化工の筆なり。

呂氏童蒙訓に云、咏物の詩分明に説き盡すを待たず、只彷彿に

彷彿形容便見妙處。蓋至論也。夫咏物神理在無字句處。善用側筆不犯正位。襯說以取神韻。此文家避實擊虛法。所謂索之於驅黃牝牡之外者。是傳神之妙也。若規規刻畫。黏皮著骨。形狀雖巧。全無精神。使一覺便盡。亦何足道哉。明人朱存仁咏燕云。三月巢乾雛未成。茅堂來往日營營。說殘午夢千聲巧。剪破春愁兩尾輕。宮柳陰濃金鎖合。水芹香細綠波晴。畫欄十二無人倚。一半梨花一半鶯。鍾伯敬評之云。前一聯就燕點染。已曲盡咏物之情。後四句絕無一字及燕。只虛摹景色。而宛若。有燕子來往其中。尤見傳神之妙。此深得風人之義。真中肯綮矣。又獨醒雜志載東安一

して形容して、便ち妙處を見るに、蓋至論なり、夫れ咏物の神理は、字句無き處に在り、善く側筆を用ひて正位を犯さず、襯説以て神韻を取る、此れ文家の實を避け虚を撃つゝの法、謂ゆる之を驅黃牝牡の外に索むる者にして、是れ傳神の妙なり、若し規規刻畫、皮に黏し骨に著けば、形狀は巧なり、雖、全く精神無し、一覺して便ち盡きしむ、亦何ぞ道ふに足らんや、明人朱存仁、燕を詠じて云、三月巢乾きて雛未だ成らず、茅堂來往日に營々、午夢を説き殘して千聲巧に、春愁を剪り破りて兩尾輕し、宮柳陰は濃にして金鎖合し、水芹香は細にして綠波晴る、畫欄十二人の倚る無し、一半は梨花一半は鶯さ、鍾伯敬之を評して云、前一聯燕に就いて點し已に曲に咏物の情を盡くす、後四句絶へて一字の燕に及ぶ無く、只だ虚しく景色を摹し、宛も燕子の其中に來往する有るが若し、尤も傳神の妙を見るに、此れ深く風人の義を得て、真に肯綮に中れり、又獨醒雜志に載す、東安の一士人畫を善くし、八景圖を作る、殊に幽致有り、洞庭秋月の如き、

士人善畫、作八景圖、殊有幽致、如洞庭秋月、則不見月、江天暮雪、則不見雪、第狀其清明苦寒之態耳、若瀟湘夜雨、尤難形容、常畫者至作行人張蓋以別之、渠但作漁舟吹火於津頭、以火明彷彿有見、則危亭在岸、連橋在步耳、瀟湘故有故人亭、故藉此以見也、是亦金針度人語、學者誠得此而玩心焉、不患不能善咏物也、抑非獨咏物爲然、凡讀古人文字、亦須掩卷閉目、極爲想像、細心體認、求之筆墨之表、所謂以意逆志、方得古人匠心處、於是意境歷歷、神理活動、宛然如在目中、不知手之舞之、足之蹈之、斯爲善讀書觀詩者矣、司馬溫公曰、古人爲詩、貴於意在言外、使人思而

則其月を見ず、江天暮雪には、則ち雪を見ず、第其清明苦寒の態を狀するのみ、瀟湘夜雨の若き、尤も形容し難し、常に畫く者は行人の蓋を張るを作し、以て之を別つに至る、渠は但だ漁舟火を津頭に吹くを作し、火明を以て彷彿として見る有り、則ち危亭岸に在り、連橋歩に在るのみ、瀟湘は故に故人亭あり、故に此を藉りて以て見はずなり、是れ亦金針人を度するの語、學者誠に此を得て玩心せば、咏物を善くする能はざるを慮へざるなり、抑も獨り咏物を然りと爲すに非ず、凡そ古人の文字を讀む、亦須らく卷を掩ひ目を閉ち極めて想像を爲し、細心體認して、之を筆墨の表に求むべし、謂はゆる意を以て志を逆へ、方に古人匠心の處を得、是に於て意境歷々として神理活動し、宛然目中に在るが如し、手の舞ひ、足の蹈むを知らず、斯を善く書を讀み詩を觀る者と爲す、司馬溫公曰、古人詩を爲る、意、言外に在るを貴び、人をして思ひて之を得しむ、故に之を言ふに罪無く、之を聞く者は以て戒むるに足るなり、梅聖俞も亦言ふ、詩の

得之、故言之無罪、聞之者足以戒也、梅聖俞亦言、詩之工者、寫難寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、此詩家秘密藏、學者不知斯訣、未可與言詩也已。

詩題貴簡要、不宜冗長、輕薄生不憚煩、尋常題引強敷衍爲數行、增置套語、填用助辭、徒取厭觀、將焉用之、元人辛文房、唐才子傳云、立題乃詩家切要、貴在卓絕、清新言簡而意足、句之所到、題必盡之、中無失節、外無餘語、此可與智者商榷、予每爲人舉之、戒片言不苟、清人袁枚云、唐陸相屢稱、士不飲酒已成半士、因謂詩題潔用韻、饗便是半个詩人、亦知言也。

少陵以論事罷官、而詩乃云、官因老病休、

工なる者は、寫し難きの景を寫し、目前に在る如くし、不盡の意を含みて、言外に見はず、此れ詩家の秘密藏なり、學者斯訣を知らざれば、未だ與に詩を言ふ可からざるのみ。

詩題は簡要を貴ぶ、宜しく冗長なるべからず、輕薄生は煩を憚からず、尋常の題引、強て敷衍して數行を爲し、套語を増置し助辭を填用して、徒に厭觀を取る、將た焉んぞ之を用ひん、元人辛文房の唐才子傳に云、題を立つるは乃ち詩家の切要、貴は卓絶清新、言簡にして意足るに在り、句の到る所、題必ず之を盡し、中に失節無く、外に餘語無し、此れ智者と商榷す可しと、予毎に人の爲めに之を舉げ、片言苟もせざるを戒む、清人袁枚云、唐陸相屢稱す、士酒を飲まず、已に半士と成るを、因て謂ふ、詩題潔にして、用韻饗、便ち是れ半个の詩人と、亦知言なり。

少陵、事を論ずるを以て官を罷めらる、詩乃云ふ「官は老病に因

又云、聖朝無棄物、老病已成翁、較孟浩然不才明主棄、蘊藉何如、樂將軍云、忠臣去國不潔其名、故君子立言有則、乃可與語風人之旨矣。

凡物之清麗、其氣有餘者、皆稱曰香可也、少陵咏竹得香字云、雨濯娟娟淨、風吹細細香、此極稱新竹風氣之爽、一聯精神全在香字、胡荈溪譏之固矣、少陵又云、枇杷樹樹香、枇杷初無香、亦謂風氣已、李青蓮梨花白雪香、又白門柳花滿天香、溫庭筠咏柳香隨靜婉、歌塵起、韓昌黎謝賜櫻桃香隨翠籠擎、偏重、皆是贊詞、謂秀色快人、若發香然、詩人象外之意、善於形容者也、野客叢書曰、陳堯佐題松江絕句云、扁舟

りて休す」云、又云、聖朝棄物無く、老病已に翁に成る」云、孟浩然の「不才明主棄」に較ぶれば蘊藉何如ぞや、樂將軍云、忠臣は國を去て其名を潔くせず、故に君子言を立て、則あらば、乃ち與に風人の旨を語る可し。

凡そ物の清麗にして其氣餘り有る者は、皆稱して香と曰ふて可なり、少陵、竹を咏じ、香の字を得たり、云、「雨濯ひて娟々淨く、風吹いて細々香し」、此極めて新竹風氣の爽を稱し、一聯の精神は全く香の字に在り、胡荈溪之を譏るは固なり、少陵又云、「枇杷樹々香し」、枇杷初めより香無し、亦風氣を謂ふのみ、李青蓮の「梨花白雪香し」、又「白門柳花滿天香し」、溫庭筠、柳を詠じ、「香は靜婉に隨ひて歌塵起る」、韓昌黎、櫻桃を賜ふを謝して、「香は翠籠に隨ひて擎偏に重し」、皆是れ贊詞にして秀色人に快よく、香を發するが若く然るを謂ふ、詩人象外の意形容に善き者なり、野客叢書に曰、陳堯佐、松江に題する絕句に云、「扁舟岸に繫きて去るに忍びず、西風斜日鱸魚香し」、張大潛之を譏り

繫岸不忍去、西風斜日鱸魚香、張大潛議之謂、魚未爲羹、雖嘉魚直腥耳、安得香哉、蓋作者正不必如是之泥、但言當秋風之起、鱸魚肥美之時、節氣候耳、非必指魚之馨香也、此能不以辭害意、可謂善讀詩者矣、萬葉集訓豔爲芬、亦此義也。

夏風未嘗香也、而稱南風之薰、亦形容之辭、極言其爽快也、李賀四月詞、依微香雨青氤氳、夏雨豈有香耶、亦贊美其爽涼耳、謝肇淛五雜俎云、困學紀聞、瓊爲赤玉、咏雪者不宜用之、此言雖是、終宋人議論、比況之詞、何必著色耶、此亦謂清涼爲薰之類也、昔九方臬之相馬、相忘於驪黃、牝牡之外、觀詩亦不當如是耶。

て謂ふ、魚未だ羹に爲さず、嘉魚に雖、直だに腥のみ、安んぞ香を得んやと、蓋作者正に必ずしも是の如く之れ泥ます、但、秋風の起るに當り、鱸魚肥美の時節氣候を言ふのみ、必しも魚の馨香を指すに非ざるなりと、此れ能く辭を以て意を害せず、善く詩を讀む者と謂ふ可し、萬葉集に鱸を訓じて芬と爲す、亦此の義なり。

夏風は、未だ嘗て香しからざるなり、而して南風の薰と稱するも、亦形容の辭にして、其爽快を極言するなり、李賀の四月詞に、「依微香雨青氤氳」と、夏雨豈に香のらんや、亦其爽涼を贊美するのみ、謝肇淛の五雜俎に云、困學紀聞に、瓊は赤玉たり、雪を咏する者は宜しく之を用ふべからずと、此言は是なりと雖、終に是れ宋人の議論なり、比況の詞、何ぞ必ずしも色を著けんや、此れ亦清涼を薰と爲すの類を謂ふなり、昔九方臬の馬を相するや、驪黃牝牡の外に相忘るを、詩を觀るも亦當に是の如くなる可からざらんや。

楊升菴云、杜牧之江南春云、十里鶯啼綠映紅、今本誤作千里、若依俗本、千里鶯啼誰人聽得、千里綠映紅、誰人見得、余按千里猶言到處、且稱畿甸、以其爲六朝舊都也、蓋江南春遍千里一樣、到處流鶯亂啼、柳綠花紅、瀾漫錦世界、滿眼富貴之相、宛是六朝舊畿甸矣、若作十里、意味索然、固哉升菴之說詩也。

許渾高歌一曲掩明鏡、掩明鏡而高歌也、元稹泥他沽酒拔金釵、令拔金釵以沽酒也、驟讀不可解、已如宋張耒、戒懼敢忘暫、明邵寶、平生到會未倒法最奇、然易見耳、太白清平調詞、雲想衣裳花想容、亂裝句法、言衣裳疑雲容疑花也、雲衣比天仙謂

楊升菴云、杜牧之の江南春に云、「十里鶯啼いて緑紅に映ず」、今本誤て千里に作る、若し俗本に依れば、千里鶯啼くも、誰人か聽き得ん、千里綠紅に映するも、誰人か見得ん、余按するに、千里は猶到る處と言ふがごとし、且つ畿甸を稱す、其六朝の舊都たるを以てなり、蓋、江南春遍く、千里一樣、到處流鶯亂啼し、柳綠花紅、瀾漫たる錦世界、滿眼富貴の相、宛も是れ六朝の舊畿甸なり、若し十里と作さば、意味索然たり、固なるかな升菴の詩を説くや。

許渾の「高歌一曲明鏡を掩ふ」は、明鏡を掩ふて而して高歌するなり、元稹の「他に泥し酒を沽ひ金釵を抜き」金釵を抜き以て酒を沽はしむるなり、驟に讀めば解す可からざるのみ、宋の張耒の「戒懼敢て忘る暫く」、明の邵寶の、「平生到る會て未し」の如き、倒法最も奇なり、然れども見易きのみ。

太白の清平調の詞に「雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ」と、亂裝句法、衣裳を雲かと思ひ、容を花かと思ふを言ふなり、雲衣を

其周旋輕妙如雲之翩翩也、唐史稱貴妃肌體豐豔、是與牡丹態度酷肖、故亦花想容也、蓋彼此目迷殆不可辨、故特亂裝其語、以可解不可解、見恍惚之意、語氣與事狀相稱、此詩家用筆之妙、少陵久拚野鶴如雙鬢、亦用此法、蓋一朝對鏡、大驚、疑野鶴成我頭、隨自看來、野鶴是雙鬢、雙鬢是野鶴、終不可辨也、若徒謂爲聲律倒裝、淺矣、其看詩也、但如暮潮歸去、早潮來、歸來得問菜莢女、山青每到識春時、天涯不復有離群、纔可容顏十五餘、則倒置以就句法耳。

不解事者譏詩人說謊、夫謂水寒謂火熱、言則實當而意索矣、其何趣之有哉、其或

天仙に比するは、其周旋輕妙にして雲の翩翩たるが如きを謂ふなり、唐史に稱す、貴妃は肌體豐豔なり、是れ牡丹の態度に酷だ肖たり、故に亦花には容を想ふなり、蓋、彼此目迷ひ、殆んど辨ず可からず、故に特に其語を亂裝し、解す可く解す可からざるを以て恍惚の意を見はす、語氣事狀と相稱ふ、此れ詩家用筆の妙なり、少陵の「久しく拚る野鶴雙鬢の如し」、亦此法を用ふ、蓋一朝鏡に對し大いに驚き、野鶴我頭を成すか、疑ひ、目を隨りて看來れば、野鶴は是れ雙鬢、雙鬢は是れ野鶴、終に辨ず可からざるなり、若し徒に聲律の篇に、倒裝す、謂はば、淺いかな、其詩を看るや、但だ「暮潮歸り去りて早潮來る」「歸來問を得たり菜莢の女」「山青くして到る毎に春時を識る」「天涯復た離群有らず」「纔に容顏十五餘なる可き」の如きは則ち倒置して以て句法を就すのみ。

事を解せざる者は詩人の謊を説くを譏る、夫れ水を寒しと謂ひ、火を熱しと謂ふ、言は則ち實當にして、意は索なり、其れ何の趣

言之過當、然後情暢意徹焉。民靡孑遺、血流漂杵、漆園之憤言、三閭之怨辭、皆是物也。蓋言之緊切、勢不得不激、平常說話、猶然、況詩人之詞、尙婉而成章乎。若直情徑行、不足以動人、苟不達意與之旨、不可與言詩也已。

錢希言戲瑕曰、高唐雲雨、是先王楚懷事、楚襄雖夢神女、而賦中不言雲雨也、唐人詩以爲襄王事、相沿不改、後遂爲填詞家借資、然使正其訛而作懷王、便不成佳話矣、余按古樂府有云、本自巫山來、無人覩顏色、惟有楚襄王、曾言夢相識、此蓋唐人所本、所謂妄言妄聽、雅道之寬可見也、因憶如黃鸞丹楓之類、本土所不有、而其稱

か之れ有らんや、其れ或は之を言ひて當を過し、然る後ち情暢び意徹す、民子遺靡し、血流れて杵を漂はす、漆園の憤言、三閭の怨辭、皆是の物なり、蓋し言の緊切なる、勢激せざるを得ず、平常の說話、猶然り、況んや詩人の詞は、婉にして章を成すを尙ぶをや、若し直情徑行ならば以て人を動すに足らず、苟も意興の旨に達せずんば、與に詩を言ふ可からざるのみ。

錢希言の戲瑕に曰、高唐の雲雨は是れ先王楚懷の事、楚襄は神女を夢むに雖、而して賦中に雲雨を言はざるなり、唐人の詩、以て襄王の事爲し、相沿ふて改めず、後、遂に填詞家の借資爲る、然れども其訛を正し懷王を作さしめば、便ち佳話を成さすに、余按ずるに、古樂府に云へる有り「本、巫山自り來る、人の顏色を覩る無し、惟だ楚の襄王有り、曾て言ふ夢に相識る」と此れ蓋、唐人の本づく所、謂はゆる妄言妄聽、雅道の寬見るべきなり、因て憶ふ黃鸞丹楓の類の如き、本土の有らざる所、而して其鸞を稱し楓を呼ぶ者、古人其類似する所あるに因り、權

鶯呼楓者、古人因其所類似、權以其名與之爾、遂相沿誤用、不必改正、魚虎爲鶯、鵲、瀟瀟爲鶯鶯、此類皆將錯就錯、作點綴詞章用可也、近時好穿鑿者、欲直持草家三尺畫正詞壇訛稱、不識風雅之過也。

好細腰者、靈王、非襄王也、如劉禹錫踏歌行、爲是襄王故宮地、至今猶自細腰多、則誤記耳、襄王屢爲詞人所汚、先世淫穢皆歸焉、不亦冤哉。

日暮碧雲合、佳人殊不來、江淹擬湯惠休詩也、唐人遂用爲惠休詩、遞齋間覽、歷舉唐句論之、然亦不必改、後人仍襲焉。

漢書趙皇后女弟合德、絕幸爲昭儀、居昭陽舍、西京雜記亦云、皇后女弟在昭陽殿、

りに其名を以て之に與ふるのみ、遂に相沿ふて誤用し、必ずしも改正せず、魚虎を鶯鶯と爲し、瀟瀟を鶯鶯と爲す、此の類皆錯を將て錯に就き、詞章を點綴する用と作して可なり、近時穿鑿を好む者、直に草家の三尺を持ち、盡く詞壇の訛稱を正さん欲す、風雅を識らざるの過なり。

細腰を好む者は、靈王にして、襄王に非ざるなり、劉禹錫の踏歌行に、「是れ襄王故宮の地たり、今に至りて猶ほ自ら細腰多し」の如きは、則ち誤記のみ、襄王屢、詞人の汚す所と爲る、先世の淫穢は皆歸す、亦冤ならずや。

「日暮碧雲合し、佳人殊に來らず」と、江淹の湯惠休に擬する詩なり、唐人遂に用ひて惠休の詩と爲す、遞齋間覽、唐句を歴舉して之を論ず、然れども亦必ずしも改めず、後人仍ほ襲に襲る。

漢書に、趙皇后の女弟合德、絶た幸せられ、昭儀と爲り、昭陽舍に居るに、西京雜記も亦云、皇后の女弟昭陽殿に在り、是れ昭陽

是昭陽爲合德居處、但三輔黃圖則云、趙皇后居昭陽舍、蓋飛燕未爲后時、亦嘗居昭陽、歟、詩人所指專歸飛燕、亦猶高唐雲雨轉訛而循用也。

千門萬戶本出西京賦、謂宮室之夥、詩家所用亦專指禁中、岑參「千門柳色連青瑣」、李頎「歸鴻欲度千門雪、盧綸「卻望千門草色間、皆用建章宮千門萬戶事也、此方詩人或用謂肆慶之盛、誤矣、但姚合晦日送窮云、年年到此日、灑酒拜街中、萬戶千門看無人、不送窮、此似謂市井、然亦在長安所作、或謂邸第之盛耳。

宇士新禁人文字中用嶽字、云、嶽是山之

は合徳の居處たり、但だ三輔黃圖には則云、趙皇后、昭陽舎に居るこ、蓋、飛燕未だ后に爲らざる時に、亦嘗て昭陽に居りしか、詩人の指す所は専ら飛燕に歸す、亦猶ほ高唐の雲雨、轉訛して循用するがごときなり、

千門萬戶は本に西京賦に出で、宮室の夥しきを謂ふ、詩家の用ふる所、亦専ら禁中を指す、岑參「千門の柳色青瑣に連る」、李頎「歸鴻度らんこ欲す千門の雪」、盧綸「卻て望む千門草色の間」、皆建章宮の千門萬戶の事を用ふるなり、此方の詩人或は用ひて肆慶の盛を謂ふは、誤れり、但だ姚合の晦日窮を送るに云、「年年此日に到り、酒を灑して街中を拜す、萬戶千門看る、人の窮を送らざる無し」と、此れ市井を謂ふに似たり、然れども亦長安に在りて作る所なり、或は邸第の盛を謂ふのみ。

宇士新、人の文字中に嶽の字を用ふるを禁す、云ふ、嶽は是れ

爵故五嶽以外無稱嶽者若在此方則振古所無也余按孫綽天臺山賦嗟台嶽之奇挺伏滔遊廬山序廬山者江陽之名嶽也陸雲答茂安書南巡狩登稽嶽謂會稽山也孔稚圭北山移文竊吹草堂濫巾北嶽謂鍾山也寒山子詩茂陵與驪嶽今日茫茫李咸用廬山詩非嶽不言嶽此山通嶽言蓋亦謂山之靈異者稱嶽爾不可一槩而論也但世俗稱山高者輒曰某嶽濫矣西土江河固有定稱此間通稱川流爲江爲河俗人亡論已文士往往孟浪京師鴨川淺水涓涓曾不容刀詩詞中動輒稱曰鴨江江戶小石川亦稱曰磯河韓文公曰凡作文宜略識字楊誠齋曰無事好看韻

山の爵なり故に五嶽以外に嶽と稱する者無し、若此方に在りては、則ち振古無き所なりと、余按ずるに孫綽の天台山賦に、嗟台嶽之奇と、挺伏滔の廬山に遊ぶ序に、廬山は江陽の名嶽なりと、陸雲の茂安に答ふる書に、南に巡狩し稽嶽に登ると、會稽山を謂ふなり、孔稚圭の北山移文に、草堂に竊吹し、北嶽に濫巾すと、鍾山を謂ふなり、寒山子の詩に、「茂陵と驪嶽と、今日草茫茫」李咸用の廬山の詩に、「嶽に非んば嶽と言はず、此山は嶽に通じて言ふ」と、蓋亦山の靈異なる者を謂て嶽と稱するのみ、一槩にして論ず可からざるなり、但世俗に山の高き者を稱して輒ち某嶽と曰ふは、濫なり。

西土の江河は、固き定稱あり、此の間通じて川流を稱して江と爲し河と爲す、俗人は論じきのみ、文士にして往々孟浪なり、京師の鴨川は淺水涓々として曾て刀を容れず、詩詞中動もすれば輒ち稱して鴨江と曰ふ、江戶の小石川も亦稱して磯河と曰ふ、韓文公曰、凡そ文を作るには、宜く皆ほ字を識るべしと、楊誠齋

書政爲此輩道也。

予看雜華集語僧某曰無隱和尚亦破戒僧哉某曰何也曰伊勢六孝歌聞說盟津境里民純孝多謂我藩爲盟津殊爲無謂豈非妄語耶如萬菴大潮尤其罪魁乎其人拜曰敬領教矣。

跡近付於人書某稿禮也冀有_レ其不淨書也今人有書稿而押印者何其不解事之甚也。

輕薄兒好向人自誦其詩抗聲朗吟鼻間栩栩然面貌可憎也昔郭功甫攜詩一軸示東坡先自吟誦聲振左右旣罷謂坡曰辨正此詩幾分東坡曰十分功甫驚喜問之坡曰七分來是讀三分來是詩豈不是

曰く、無事好し韻書を看るこ、政に此の輩の爲めに道ふなり。

予、雜華集を看て僧某に語りて曰、無隱和尚も亦破戒僧なるかなこ、某曰、何ぞや、曰、伊勢六孝歌に、説くを聞く盟津の境、里民純孝多しこ、我藩を謂ひて盟津爲す、殊に謂れ無し爲す、豈妄語に非ずや、萬菴、大潮の如き、尤も其れ罪魁かこ、其人拜して曰、敬んで教を領せりこ。

近付を人に贈すに、某稿を書するは、禮なり、其淨書せざる有りさんこを冀ふなり、今人、稿を書して印を押す者有り、何ぞ其れ事を解せざるの甚しきや。

輕薄兒好んで人に向ひて自ら其詩を誦し、聲を抗けて朗吟す、鼻間栩栩然として、面貌憎む可し、昔郭功甫詩一軸を攜へ東坡に示し、先づ自ら吟誦し、聲左右に振ふ、旣に罷め、坡に謂ふて曰、辨正此の詩幾分こ、東坡曰、十分こ、功甫驚喜して之を問ふ、坡曰、七分來是れ讀にして、三分來是れ詩、豈是れ十分ならずやこ、予毎に此を舉げて以て之を戒む、凡そ長者に示すには、宜

十分耶。予每舉此以戒之。凡示長者宜書以呈之。不可自誦也。

東坡書魚山綸長老壁。其中有云。譬如長鬣人。不以長爲苦。一旦或人問。每睡安所措。歸來被上下。一夜著無處。展轉遂達晨。意欲盡鏹去。此言雖鄙淺。故自有深意。傳者皆以爲妙譬喻。當時蔡君謨美鬣髻。一日內宴。帝顧問曰。卿鬣甚美。夜間將覆之。衾下乎。將置之於外乎。君謨謝不知。及歸就寢。思帝語。置之內外。悉不安。遂一夕不能寢。見鐵圍山譚叢。正賦此事也。

作詩篇成有一二字於心不安。苦思力索。竟不能得。遂倦而廢。他日於無意中得之。忽然而來。渾然而就。宛若神助。喜不可言。

しく書して以て之を呈すべし。自ら誦す可からざるなり。

東坡、魚山綸長老の壁に書す、其中に云へるあり「譬へば長鬣の人の如し、長を以て苦き爲さず、一旦或人問ふ、睡る毎に安に措く所ぞ、歸來上下に被る、一夜著るに處無し、展轉して遂に晨に達し、意盡く鏹去せんぞ欲す」と、此言は鄙淺まじ雖、故に自ら深意あり、傳者皆以て妙譬喩う爲す、當時蔡君謨、鬣髻まじなり、一日內宴に、帝顧みて問ふて曰、卿の鬣甚美なり、夜間將た之を衾下に覆ふか、將た之を外に置かき、君謨知らずと謝す、歸りて寢に就くに及び、帝の語を思ひ、之を内外に置くに、悉く安んぜず、遂に一夕寢る能はずと、鐵圍山譚叢に見ゆ、正に此事を賦するなり。

詩を作り、篇成りて一二字の心に安んぜざるあり、苦思力索して竟に得る能はず、遂に倦んで廢す、他日無意中に於て之を得、忽然として來り、渾然として就り、神の助くるが若し、喜び、言

蓋由先積精思、因機發而得也。若初不思、索非僥倖可得也。因憶左氏所載裨諶謀事、失於邑而獲於野、良有以也。蓋鄭之蕞爾、當晉楚爭霸之日、介于其間、事之甚苦、而國窮民困、爲政尤難、其處分事、作辭命、苟謀之或失、動係國存亡、豈不深慎乎。故方事之難裁、焦思凝慮、未得其所、以處恐深泥滋惑、乃舍而去、放浪於野、盪蕩鬱胸、優游遣興、逍遙自適、則暢然神王、智囊便開、於是觸物感事之次、躍然有所發揮焉。猶詩人含苦吟、忘於懷、不求之求、自然而得也。是別墅行館之設、亦所以不可已耶。然唯賢者能之、非凡庸之所庶幾也。

僧貫休詩、盡日覺不得、有時還自來、謂詩

ふ可からず。蓋、先きに精思を積むに由り、機に因り發して得るなり。若し初めに思索せずんば、僥倖にして得可きに非ざるなり。因て憶ふ、左氏に載する所、裨諶事を謀り、邑に失ひ而して野に獲たりと、良に以有るなり。蓋、鄭の蕞爾たる、晉楚を爭ふの日に當り其間に介まり、之に事ふる甚だ苦し、而して國窮まり民困み、政を爲す尤も難し、其事を處分し辭命を作るに、苟も謀の或は失はば、動もすれば國の存亡に係る、豈深く慎まざらんや。故に事の裁し難きに方り、思を焦し慮を凝らし、未だ其處する所以を得ず、深く泥み蕩ます惑はんことを恐れ、乃ち舍て去り、野に放浪し、鬱胸を盪蕩し、優游して興を遣り、逍遙して自適せば、則ち暢然として神王し、智囊便ち開く、是に於て物に觸れ事に感ずるの次、躍然として發揮する所有り、猶ほ詩人の苦吟を舍て、懷に忘れ、求めざるの求め、自然にして得るがごとし、是れ別墅行館の設け、亦已む可からざる所以か。然れども唯、賢者之を能くす、凡庸の庶幾する所に非ざるなり。

僧貫休の詩に「盡日覺めて得ず、時有りて還た自ら來る」と詩の

之好句難得、此真絕妙好辭、人間萬事皆爾、宋人所謂著意栽花花不發、無心插柳柳成林、涉世更事者自默識之耳。

何大復詩、樓臺萬里眼、時序百年情、與老杜、乾坤萬里眼、時序百年心、相犯、大復豈盜竊古句者哉、蓋嘗誦此聯、心深悅之、一時感興所觸、偶從胸臆出、而忘其爲杜詩耳、杜詩、薄雲巖際宿、孤月浪中翻、與何遜薄雲巖際出、初月波中上、亦何雷同之甚、公嘗有咏及前賢、更勿疑、遞相祖述、復先誰之句、蓋爲是解嘲也、予夢遊吉野、得花界三千春、漫漫香臺十二畫沉沉、一聯、頗自以爲得意、因續成篇、後偶閱唐詩鼓吹、乃胡宿牡丹詩、花界三千春、渺渺銅槃十

好句難得を謂ふ、此れ眞に絶妙好辭、人間萬事皆爾、宋人の謂はゆる「意を著け花を栽れば花發かず、心無く柳を挿めば柳林を成す」と、世を涉り事を更る者は、自ら之を默識せんのみ。

何大復の詩、「樓臺萬里の眼、時序百年の情」、老杜「乾坤萬里の眼、時序百年の心」と、相犯す、大復豈古句を盜竊する者ならんや、蓋嘗て此聯を誦し心に深く之を悦び、一時感興の觸るゝ所、偶たま胸臆より出で、而して其杜詩たるを忘れしのみ、杜詩「薄雲巖際に宿し、孤月浪中に翻る」、何遜「薄雲巖際に出で、初月波中に上る」と、亦何ぞ雷同の甚しき、公嘗て「咏、前賢に及ぶも更に疑ふ勿れ、遞に相祖述す復た誰を先とせん」の句有り、蓋是か爲に嘲を解くなり、予夢に吉野に遊び、「花界三千春、漫漫、香臺十二畫沉沉」の一聯を得、頗る自ら以て得意と爲し、因て續きて篇を成す、後ち偶たま唐詩鼓吹を閲するに、乃ち胡宿の牡丹の詩、「花界三千春、渺渺、銅槃十夜沉沉」と、僅に五字異なるのみ、余嘗て鼓吹を讀む一過、久ふして之を忘れ、誤り認めて以て已

二夜沉沉、僅五字異耳、余嘗讀鼓吹一過、久而忘之、誤認以爲出於己也、近見石林詩話曰、讀古人詩多、意所喜處、誦憶之久、往往不覺誤用爲己語、信矣、故詩成必以示人、庶幾被指摘而免於此蔽矣。

胡宿、宋仁宗時人、宋史有傳、鼓吹錯取爲唐人、高廷禮、唐詩正聲亦載其津亭一律、蓋氣格有類唐人、因誤收入楊慎丹鉛錄、李翹戒菴漫筆、辯之詳矣、周伯弼選唐詩三體、開卷第一首舉宋人杜常、尤可笑也、全唐詩亦竝附唐末、何其不之考也。

或人傳一詩謎、何來估客候門前、花海江陵一雪然、更入帳中尋不見、直隨飛鳥去、天邊曰俱唐詩作家、乃買至李白羅隱高

より出るを爲すなり、近ごろ石林詩話を見るに、曰、古人の詩を讀むこと多く、意の喜ぶ所の處、誦憶の久しき往々覺へず誤り用ひて己の語を爲す、信なり、故に詩成らば必ず以て人に示さば、庶幾くは指摘せられ、此蔽を免れん。

胡宿は、宋の仁宗の時の人なり、宋史に傳あり、鼓吹錯り取りて唐人を爲す、高廷禮の唐詩正聲も亦其の津亭一律を載す、蓋、氣格唐人に類するあり、因りて誤りて收入す、楊慎の丹鉛錄、李翹の戒菴漫筆之を辯ずること詳なり、周伯弼唐詩三體を選び、開卷第一首、宋人杜常を舉ぐ、尤も笑ふ可きなり、全唐詩にも亦竝に唐末に附す、何ぞ其之を考へざるや。

或人一詩謎を傳ふ、「何來估客門前に候す、花海江陵一雪然、更に帳中に入り尋ぬるも見へず、直に飛鳥に隨ひて天邊に去る」と、曰く、俱に唐詩の作家を、乃ち買至李白・羅隱・高適の四人の姓

適四人姓名也、然賈氏音聲、非商賈之義、
 世傳菅公憤冤、禱天爲雷、大震京城、蓋當
 時因天變造言也、公左遷、前年九月十三
 夜侍宴獻詩、上親自解御衣賜焉、及在配
 所、適值其夜、感而有作曰、去年今夜侍清
 涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧
 持每日拜餘香、其尊戴存誠情見乎辭、公
 之赤心明如皦日、世俗妄說不待辯矣、貝
 原篤信贊公像、末云、松梅節操、風月胸襟、
 不怨不尤、唯譴厥心、其亦有見于斯矣乎、
 吾國九月十三夜看月會、與中秋同也、寬
 平法皇嘗賞是夕、爲明月無雙、見于藤公
 宗忠中右記、此其權輿也、法性關白忠通
 九月十三夜玩月七言律詩、及諸公同咏

名なり、然れども賈氏音聲、商賈の義に非ず。

世に傳ふ、菅公憤冤、天に禱り雷を爲り、大に京城に震す、蓋、當
 時天變に因り言を造すなり、公左遷の前年九月十三夜、宴に侍
 し詩を獻す、上親ら自ら御衣を解きて賜を賜ふ、配所に在るに
 及び、適、其夜に値ひ、感じて作あり、曰、去年の今夜清涼に侍
 し、秋思の詩篇獨り斷腸す、恩賜の御衣今此に在り、捧持して毎
 日餘香を拜す、其尊戴、誠を存するの情、辭に見はる、公の赤
 心、明なるこゝに皦日の如し、世俗の妄說、辯するを待たず、貝原
 篤信、公の像を贊する末に云、「松梅の節操、風月の胸襟、怨みす
 尤めず、誰か厥の心を識らん、其れ亦斯に見るあるか。」

吾國九月十三夜の看月は、會、中秋と同じきなり、寬平法皇嘗
 て是の夕を賞して明月無雙を爲す、藤公宗忠の中右記に見ゆ、
 此れ其權輿なり、法性の關白忠通、九月十三夜に月を玩ぶ七言
 律詩、及び諸公同咏者俱に無題詩集に載す、是れ鳥羽帝保安二

者俱載無題詩集是爲鳥羽帝保安二年事、寺島氏三才圖會以爲始于此謬矣、蓋寬平天子適當夕屬快晴、澄酒賞咏爲歡、明年又值晴光、仍復從而行之、自是歲以爲常、遂成玩月佳例、於是天下踵而效之也。

菅公去年今夜侍清涼、北野緣起爲九月十三夜事、菅家文章注則云、九月十五日、余見躬愜集有九月十三夜侍宴之歌、亦係延喜中、然則當時玩是夜月爲盛、恐文章注或誤也。

上杉謙信、天正二年九月伐能州、攻七尾城、破之、遊佐彈正統其君島山義隆、謙信、織田氏、故謙信伐而滅之、會十三夜海月清朗、軍中置酒宴賞、卽席賦

年の事たり、寺島氏の三才圖會には、以て此に始まるを爲すは、謬れり、蓋、寬平天子適、當夕快晴に屬し、酒を澄き賞咏歡を爲す、明年又晴光に値ふ、仍て復た從つて之を行ふ、是れより歲、以て常を爲し、遂に玩月の佳例を成る、是に於て天下踵て之に效ふなり。

菅公の「去年の今夜清涼に侍す」、北野緣起に、九月十三夜の事を爲す、菅家文章注には、則ち云ふ、九月十五日を、余、躬愜集を見るに、九月十三夜宴に侍する歌あり、亦延喜中に係る、然らば、則ち當時是夜の月を玩ぶこと、盛なりを爲す、恐らくば文章注或は誤ならん。

上杉謙信、天正二年九月、能州を伐ち、七尾城を攻めて之を破る、遊佐彈正、其君島山義隆を統し、城に據り、織田氏に屬す、故に謙信伐つて之を滅す、會、十三夜にして海月清朗なり、軍中に置酒宴賞し、卽席詩を賦して云、「露は軍

詩云露下軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山并得能州景、遮莫家鄉念遠征、蓋爲將士慰勞、令遣興排飲也、將士解作歌詩者各有咏言、罄歎罷此亦可備一典故也、武田信玄新年口號、淑氣未融春尙遲霜、辛雪苦豈言詩、此情愧被東風笑、吟斷江南梅一枝、亦可吟玩矣、夫甲越二氏、兵家之泰斗、顧又嫺風雅如是、真橫槊賦詩、一世之雄也、今之兵家多忌歌詩、何耶、自護固陋耳。

仙臺貞山公政宗、驍勇豪爽、尤稱猛將、晚年好詞藝、遣興吟云、馬上青年過、時平白髮多、殘軀天所許、不樂復如何、又春夜作云、餘寒未去發花遲、春雪夜來重積時、信

營に下りて秋氣清し、數行の過雁月三更、越山并得能州の景、遮莫家郷の遠征を念ふを「蓋」、將士の爲めに慰勞し、興を遣り排飲せしめたるなり、將士の歌詩を作るを解する者、各咏言あり、歎を罄くして罷む、此れ亦一典故に備ふ可し。

武田信玄の新年口號に、「淑氣未だ融せず春尙ほ遅く、霜辛雪苦豈に詩を言はんや、此情愧づ東風に笑はれん、吟斷す江南の梅一枝」も、亦た吟玩すべし、夫れ甲越二氏は兵家の泰斗にして、顧て又風雅に嫺ふこと是の如し、眞に槊を横たへ詩を賦す、一世の雄なり、今の兵家多くは歌詩を忌むは何ぞや、自ら固陋を護するのみ。

仙臺貞山公政宗、驍勇豪爽にして尤も猛將と稱す、晩年に詞藝を好む、興を遣る吟に云、「馬上に青年過ぎ、時平にして白髮多し、殘軀天の許す所、樂まずして復た如何せん」と、又春夜の作に云、「餘寒未だ去らず花を發く遅く、春雪夜來重積の時、手に信ぜ聊か料む數盃の酒、醉中獨り樂む誰れ有つてか知らん」と、

手聊斟數盃酒、醉中獨樂有誰知、語雖平平、風調渾厚、英氣勃勃乎言表、真風流人豪哉、孰謂兜鍪之流、祇解道明月赤團圓也。仙臺舊名巖手澤、貞山公假城改命嘉名、陳子昂登金華觀詩、白玉仙臺古、疑其取諸此、蓋因金華山在邦域之中也。尾張敬公春興絕句、見林學士一人一首、世所知也、紀伊南龍公有海遊舟中次那波道園韻之作、附載活所遺稿中、世謂南龍公豪武耳、乃有若風流、可不尤欽哉。山城守直江兼續、亦一世之雄、當路大國、能以衆整戎馬之隙、注意文雅、嘗刊五臣注文選、見羅山文集、其雅好可見也、賦織女惜別云、二星何恨隔年逢、今夜連牀散

語は平々々雖、風調渾厚にして、英氣言表に勃々たり、真に風流の人豪なるかな、孰れか謂ふ兜鍪の流、祇に明月赤團圓を道ふを解す。

仙臺は舊名巖手澤、貞山公、城を假めて改めて嘉名を命ず、陳子昂金華觀に登る詩、「白玉仙臺古」、疑らくは其れ諸を此に取る、蓋し金華山邦域の中に在るに因るなり。

尾張敬公の春興絶句、林學士一人一首に見ゆ、世の知る所なり、紀伊の南龍公、海遊舟中に那波道園の韻に次するの作あり、活所遺稿中に附載す、世に南龍公は豪武のみを謂ふ、乃ち若のこまき風流あり、尤も欽せざる可けんや。

山城の守直江兼續も亦一世の雄なり、路に大國に當り、能く衆を以て整ふ、戎馬の隙に、意を文雅に注ぐ、嘗て五臣注文選を刊す、羅山文集に見ゆ、其雅好見るべきなり、織女別を惜むを賦して云、「二星何ぞ恨まん年を隔て、逢ふを、今夜連牀鬱胸を散

鬱胸、情話未終先灑淚、合歡枕下五更鐘、
 辭京作云、春雁似吾鄉思切、洛陽城裏背
 花歸、亦一樹足知味矣夫、當時干戈騷擾
 中、諸公何暇而染指斯文、其工至如是、誠
 可異也、方今世道恬熙、上下相忘於無事
 之天、於是韋布之士多彬彬足觀者、而王
 侯貴人殊寥寥焉、是文在下而不在上、尤
 可異耳。

詩詞中有籬落院落村落、史稱匈奴地曰
 部落區落、皆實字也、字書落訓居、通鑑綱
 目集覽、人所聚居故謂之村落、聚落屯落、
 予按、落者絡也、漢書鼂錯傳、爲中周虎落、
 注云、若今竹虎、以竹篾相連、遮落之、又漢
 魏三公門施行馬、行馬桓木也、交互其木

す、情話未だ終へず先つ涙を灑ぐ、合歡枕下五更の鐘に、京を
 辭する作に云、「春雁は吾郷思の切なるに似たり、洛陽城裏花に
 背きて歸るに、亦た一樹にして味を知るに足る、夫れ當時干戈
 騷擾の中、諸公何の暇あつてか指を斯文に染め、其工是の如き
 に至る、誠に異すべきなり、方今世道恬熙、上下、無事の天に
 相忘る、是に於て韋布之士、彬彬として觀るに足る者多し、而し
 て王侯貴人殊に寥寥たり、是れ文、下に在りて上に在らず、尤も
 異すべきのみ。

詩詞中に籬落・院落・村落有り、史に匈奴の地を稱して部落・區
 落と曰ふ、皆實字なり、字書に、落を居と訓す、通鑑綱目集覽に、
 人の聚居する所、故に之を村落・聚落・屯落と謂ふと、予按する
 に、落は絡なり、漢書鼂錯傳に、中周虎落を爲す、注に云、今の竹
 虎の若し、竹篾を以て相連ね之を遮落す、又漢魏、三公の門に行
 馬を施す、行馬は、桓木なり、其木を交互し、門を遮闌す、故に又

遮闌于門故又謂之行落也稱天爲碧落亦謂積氣遮落也然則村落部落亦皆斯義本謂離落也王褒僮約縛落鉏園是謂離單稱落本義可見矣蓋村民之居不能構牆爲設色障以遮落之故有村落之稱諸餘皆是也唐宮中巷有野狐落疑亦掖庭設藩籬遮落其巷也又漢書溝洫志河決於館陶及東郡金堤王延世爲河隄使者塞河以竹落長四丈大九圍盛以小石兩船夾載而下之三十六日隄成竹落盛石之籠後世所謂臥牛者此亦連絡之義綱目集覽落與絡通以竹篾爲外蕃而籠絡之是也又史記屈原傳鳳皇在筱注引王逸楚辭注云筱籠落也索隱云籠落謂藤

四〇
 た之を行落と謂ふなり、天を稱して碧落と爲すも、亦た積氣の遮落を謂ふなり、然らば則ち村落部落も亦た皆斯の義、本、籬落を謂ふなり、王褒の僮約に、落を縛して園を鉏く、是れ籬を謂ひて單に落と稱す、本義見る可し、蓋、村民の居は、牆を構ふ能はず、爲に色障を設け以て之を遮落す、故に村落の稱あり、諸餘皆是なり、唐宮中巷に野狐落あり、疑ふらくは亦掖庭に藩籬を設け、其巷を遮落するなり、又漢書の溝洫志に、河、館陶及び東郡の金堤に決す、王延世河隄使者と爲り、河を塞ぐに竹落の長さ四丈大九圍なるを以てし、盛るに小石を以てし、兩船に夾載して之を下す、三十六日にして隄成る、竹落は、石を盛るの籠後世の謂はゆる臥牛といふ者、此れも亦連絡の義、綱目集覽に、落は絡と通ず、竹篾を以て外蕃と爲し、而して之を籠絡すとは、是なり、又史記屈原傳に、鳳皇、筱に在り、注に、王逸の楚辭の注を引きて云、筱は籬落なり、索隱に云、籬落は、藤籬の相籠絡するを云ふ、亦見るべきなり、落は、本に落に作る、集

羅之相籠絡、亦可見也。落本作落、集韻歷各切、音洛、離落也。蓋以落落音通、後世借用已難字押韻、必有所本爲妙。蘇武、征夫懷遠路、起見夜何其用詩庭燎章語、韓退之、一蛇兩頭見未曾、自莊子技經、肯綮之未嘗來、僧貫休、鄭鼠寧容者、齊竿久舍、諸本論語山川其舍、諸楊萬里閣迴詩、更超古往亦今猶、據蘭亭序結語、馬祖常、俯仰歎存沒、今茲霜露又、本詩室人入又、楊基、此藥豈不佳而乃止酒那、據左傳、棄甲則那、八景之名、宋嘉祐中、宋廼以瀟湘風景寫平遠山水八幅、一時觀者留題、目爲瀟湘八景、是其權輿也、世俗所傳近江八景詩歌、見白石先生紳書說、天正年間、京師相

頤に、歷各の切、音洛、離落なり、蓋、落落音通するを以て、後世借用するのみ。

難字、韻を押す、必ず、本づく所あるを妙と爲す、蘇武、征夫遠路を懐ひ、起て見る夜何其、詩庭燎章の語を用ふ、韓退之、一蛇兩頭見る未だ曾てせず、莊子の技、肯綮を經るも之れ未だ嘗てせずより來る、僧貫休、「鄭鼠寧を容る者ぞ、齊竿久しく諸を舍てんや」、論語の山川其れ諸を舍てんやに本づく、楊萬里の閣迴の詩に、「更に超ゆ古往亦今猶」、蘭亭序の結語に據る、馬祖常の「俯仰、存沒を歎じ、今茲霜露又」、此詩の室人入又に本づく、楊基の「此藥豈に佳ならざらんや、而して乃ち酒を止むは那ぞ」、左傳の甲を棄つるは則ち那ぞに據る。

八景の名、宋の嘉祐中に、宋廼、瀟湘の風景を以て、平遠山水八幅を寫す、一時觀る者、留題し、目して瀟湘八景と爲す、是れ其權輿なり、世俗傳ふる所の近江八景の歌は、白石先生の紳書說に見ゆ、天正年間、京師相國寺の横長老故ありて、此間に謫居す、

國寺標長老有故謫居此間頗喜作詩就湖畔擇景擬宋人題目賦之國風之詠陽明丞相三藐院公所和云然據岡田耕筆所載相公手簡則擇景設題亦公之所創時永祿五年八月云蓋樸詩因公歌而作也於是詩歌竝行遂作畫併傳至鑿版以觀之自是八景之名大噪四方至今風人流咏不已因而十室之邑三里之城以及野寺村園靡不有八景題目瞰名俗子好事估客轉相倣尤作記設圖以求人之詩歌亦輕薄之習可厭也

扶桑名勝詩集引江陽日記云明應九年八月近衛公政家爲京極高賴所招遊江州淹留累日作八景之歌江陽日記不知

頗る詩を作るを喜み湖畔に就て景を擇び、宋人の題目に擬して之を賦す、國風の詠は、陽明丞相三藐院公の和する所云、然れども岡田耕筆に載する所の相公の手簡に據れば、則ち景を擇び題を設くる、亦公の創むる所時に永祿五年八月なり云、蓋、樸の詩は公の歌に因りて作るなり、是に於て詩歌竝び行はれ、遂に畫を作り、併せ傳へて、版に鑿し以て之を觀くに至る、是れより八景の名、大に四方に噪く、今に至るまで風人流咏して已まず、因て十室の邑、三里の城より、以て野寺村園に及ぶまで、八景の題目あらざるはなし、瞰名の俗子、好事の估客、轉して相倣尤し、記を作り圖を設け、以て人の詩歌を求む、亦輕薄の習ひ厭ふべし。

扶桑名勝詩集に、江陽日記を引きて云、明應九年八月近衛公政家、京極高賴に招かれ、江州に遊び、淹留累日、八景の歌を作るとき、江陽日記は何人の作る所なるを知らず、恐らくは杜撰に

何人所作、恐屬杜撰矣。林道春、齊玄同、僧元政、竝有八景詩、見名勝集。

瀟湘八景、遠浦歸帆、云、鷺界青山一抹秋、潮平銀浪接天流、歸橋漸入蘆花去、家在夕陽江上頭、人或因此詩、以爲潮入洞庭、誤矣、潮是湖字之訛耳、海潮從九江入鄱陽湖、湖在南康府東南、潮來至城東而止、張繼詩云、潮至潯陽、回去、相思無處通書、顧況亦云、潯陽向上不通潮、此可以驗矣、徐鉉廬山詩、海潮盡處逢陶石、江月圓時上庾樓、陶石淵明遺迹在南康城西、潮或進至此也、洞庭去南康甚遠、非潮水所至、陸放翁入蜀記至鄂州、條云、自江州至此七百里、汜流、雖日得便風、亦須三四日、韓

屬す、林道春、齊玄同、僧の元政、竝に八景の詩有り、名勝集に見ゆ。

瀟湘八景の遠浦歸帆に云、「鷺は界す青山一抹の秋、潮は平にして銀浪天に接して流る、歸橋は漸く蘆花に入りて去る、家は夕陽江上の頭に在り」と、人或は此詩に因り、以て潮、洞庭に入るを爲すは誤れり、潮は是れ湖の字の訛のみ、海潮は九江より鄱陽湖に入る、潮は南康府の東南に在り、潮來り城東に至りて止む、張繼の詩に云、「潮は潯陽に至りて回りに去り、相思、書を通ずるに處無し」と、顧況も亦云、「潯陽向上潮を通せず」と、此れ以て驗すべし、徐鉉の廬山の詩に、「海潮盡くる處陶石に逢ひ、江月圓なる時庾樓に上る」と、陶石は淵明の遺迹にして、南康城西に在り、潮或は進みて此に至るなり、洞庭は南康を去る甚だ遠し、潮水の至る所に非ず、陸放翁の蜀記、鄂州に至るの條に云、江州より此に至る七百里、流に汜る、日に便風を得、雖、亦三四日を須ゆ、韓文公の詩に、「湓城等渚を去り、風便一日のみ」

文公詩、湓城去鄂渚、風便一日耳、蓋公未嘗行此路也、鄂州卽武昌府、南臨洞庭、東坡詩云、吳潮不到武昌宮、蓋其土之人多不知潮沙爲何物已、白香山詩、九派吞青草、自注、潯陽江九派南通、青草洞庭湖、此謂其上流遙通、賈至岳陽樓別王員外、貶長沙詩、江路東連千里潮、亦謂前程所望、杳與海接已、讀者宜勿誤以爲直接也、且洞庭之爲湖也、自春至秋之間耳、冬則爲陸地矣、故莊子稱洞庭之野者、平時只爲空曠之野也、見地志所說、湘江自南來、至岳陽、達蜀江、及春漲相觸、爲蜀江、退住、湖水讓而退、溢爲洞庭湖、瀾漫吞天、浩瀚伴海、而君山宛在水中、秋水歸壑、湖底漸出、

こ、蓋公未だ嘗て此路を行かざるなり、鄂州は卽ち武昌府にして、南、洞庭に臨む、東坡の詩に云、「吳潮は到らず武昌宮」こ、蓋、其土の人多くは潮沙の何物たるを知らざるのみ、白香山の詩に、「九派草を呑む」こ、自注に、潯陽江の九派、南、青草洞庭湖に通ず、此れ其上流の遙に通ずるを謂ふなり、賈至、岳陽樓に王員外の長沙に貶せらるゝに別る詩に、「江路東に連る千里の潮」こ、亦前程望む所をこして海に接するを謂ふのみ、讀者宜しく誤りて以て直接を爲す勿かるべし、且洞庭の湖たるや、春より秋に至るの間のみ、冬は則ち陸地を爲る、故に莊子に洞庭の野を稱するは、平時は只、空曠の野たるなり、地志の説く所を見るに、湘江は南より來り、岳陽に至り、蜀江に達し、春漲相觸ふに及びて、蜀江に退住せられ、湖水讓りて退き、溢れて洞庭湖を爲り、瀾漫天を呑み、浩瀚、海に伴し、而して君山宛として水中に在り、秋水壑に歸り、湖底漸く出で、此山復た陸に居り、渾々たる曠野にして、唯一條の湘川のみ、錢起の詩に、「月明

此山復居于陸漠曠野、唯一條湘川而已。錢起詩云、月明湘水白、霜落洞庭乾、正謂是也。王右丞送邢桂州詩、日落江湖白、潮來天地青、上句承起聯、風波下洞庭、所謂銀浪接天者、下句接饒吹喧京口、潯陽已往之景、謂江湖瀾漫如海、蓋京口至大海、僅五百里云、讀者詳之可也。

老杜春夜宴韋氏莊、劈頭便言風林纖月落、奇峭甚、後幾不可繼、況夜宴失月、詩料掃地、尤難于著筆、而奇思自在、衝口出來、局勢容與、游亦有餘、如暗水春星一聯、則真向造化窟裏奪將來、且暗水傾耳而聽、春星張目以觀、一俯一仰、乍暗乍明、開闔起伏、錯綜變化、不可方物矣。

かにして湘水白く、霜落ちて洞庭乾く、正に之を讀ふなり、王右丞の邢桂州を送る詩に、「日落ちて江湖白く、潮來りて天地青し」と、上句は起聯の「風波洞庭に下る」を承く、謂はゆる銀浪天に接する者、下句は「饒吹京口に喧し」に接す、潯陽已往の景、江湖瀾漫して海の如きを謂ふ、蓋京口より大海に至るまで僅に五百里云、讀者之を詳にして可なり。

老杜の春夜宴韋氏の莊に宴する劈頭に便ち言ふ、「風林纖月落つ」と、奇峭甚だし、後幾んど繼ぐ可からず、況んや夜宴月を失ひ、詩料地を掃ふ、尤も筆を著くるに難し、而して奇思自在、口を衝いて出で來り、局勢容與、游及餘りあり、「暗水春星の一聯の如き、則真に造化窟裏に向つて奪將し來る、且つ「暗水耳を傾け而して聽き、春星目を張りて以て觀る」、一俯一仰、乍ち暗く乍ち明か、開闔起伏、錯綜變化、方物す可からず。

杜牧題桃花夫人廟。至竟息亡緣底事。可憐金谷墜樓人。主客抑揚議論痛快真詩之斧鉞矣。鄭畋馬嵬驛詩。終是聖明天子事。景陽宮井又何人。此則咏時事以回護出之。臣子立言。方爲得體。可以爲法也。

凡國家不幸之事。臣子不當形之歌咏。不但諱國惡之禮。蓋所不忍言也。況敢嘲弄之乎。李商隱馬嵬驛詩。海外徒聞更九州。他生未卜此生休。空聞虎旅傳宵柝。無復雞人報曉籌。此日六軍同駐馬。當時七夕笑牽牛。如何四紀爲天子。不及盧家有莫愁。前輩譏之云。起無原委。突如而來。一病也。用鄭衍云九州之外更有九州。徒聞空聞。故直咏事。則可用。跡信突然矣。此生此日。犯複二病也。虎鷄馬牛。疊用。三

杜牧の桃花夫人の廟に題するに、「至竟息亡緣底事。可憐金谷墜樓の人」云、主客抑揚議論痛快、真に詩の斧鉞なり、鄭畋の馬嵬驛の詩、「終に是れ聖明天子の事、景陽宮井又何人ぞ」云、此れ則ち時事を咏じ、回護を以て之を出だす、臣子言を立つる、方に體を得たりと爲す、以て法と爲す可し。

凡そ國家不幸の事、臣子は當に之を歌咏に形はずべからず、但に國惡を諱むの禮のみならず、蓋、言ふに忍びざる所なり、況んや敢て之を嘲弄するをや、李商隱の馬嵬驛の詩に、「海外徒に聞く更に九州、他生未だ卜せず此の生休す、空しく聞く虎旅宵柝を傳ふ、復、鷄人の曉籌を報ずる無し、此日六軍同じく馬を駐め、當時七夕牽牛を笑ふ、如何せん四紀天子と爲り、盧家の莫愁有るに及ばず」云、前輩之を譏りて云ふ、起に原委無く、突如として來る、一病なり、鄭衍九州の外に更に九州ありと云ふを用ふ、故に直に事を咏せば則可なり、跡を用せば信に突然なり、徒聞空聞、此生此日・犯複す、二病なり、虎鷄馬牛疊用、三病

病也、盧家莫愁、擬人不倫、四病也、余謂不
 特此也、顯咏時事、彰君之惡、殊爲失體、五
 六、晒其棄殺、頗涉調劇、七八、淺近太俗、醜
 詆尤甚、詩人比興、掃地矣、雖屬對精工、詞
 氣宕逸、亦無取耳、商隱又有華清宮詩曰、
 華清恩幸古無倫、猶恐蛾眉不勝人、未免
 被他嬖女笑、只教天子暫蒙塵、不亦惡劇
 乎、如驪山詩曰、平明每幸長生殿、不從金
 輿唯壽王、龍池詩曰、夜半宴歸宮漏永、薛
 王沉醉壽王醒、此在當時、尤非所宜、言聖
 人答陳司敗知禮之問、恐不爾也、薛逢亦
 咏明皇事、言其致亂之由曰、寧王玉笛三
 更咽、虢國金車十里香、蓋楊妃與安祿山
 私、虢國亦通、楊國忠宮闈不飭、禍水所由、

なり、盧家莫愁、人を擬する不倫、四病なり、余謂ふ特此に此の
 みならず、顯に時事を咏じ、君の惡を彰す、殊に體を失ふ爲す、
 五六、其棄殺を晒ふ、頗る調劇に涉る、七八、淺近太だ俗にして、醜
 詆尤も甚し、詩人の比興、地を掃ふ、屬對精工にして、詞氣宕逸
 なり、雖、亦取る無きのみ、商隱又華清宮の詩あり、曰、「華清恩
 幸古に倫無く、猶ほ恐る蛾眉の人に勝らざるを、未だ免れず他
 の嬖女に笑はれん、只天子をして暫く蒙塵せしむ、亦惡劇な
 らずや、驪山の詩に曰、「平明毎に幸す長生殿、金輿に從はざ
 るは唯壽王」、龍池の詩に曰、「夜半宴して歸る宮漏永し、薛
 王は沉醉し壽王は醒む」の如き、此れ當時に在りて尤も宜しく
 言ふべき所に非ず、聖人、陳司敗禮を知るの問に答ふ、恐くは爾
 らざるなり、薛逢も亦明皇の事を咏じて、其亂を致すの由を言
 ふて曰、「寧王の玉笛三更に咽び、虢國の金車十里香し」、蓋、
 楊妃、安祿山と私し、虢國も亦楊國忠に通ず、宮闈飭せず、禍水
 の由る所、本意直に之を刺らんを欲す、然れども國惡を諱みて

本意欲直刺之、然諱國惡而不露、只舉其
 竊吹寧王之笛、每乘金車入宮門、而微意
 隱然乎言外、得國風諷刺之體、如商隱詩、
 非唯失風人之意、亦全無臣子之禮矣、明
 車清臣曰、白樂天長恨歌、叙事詳贖、後人
 得知當時實事、有功紀錄、然以敗亡爲戲、
 更無惻怛憂愛之意、身爲唐臣、亦盍思春
 秋所以存魯之故、余於商隱亦深憎、無禮
 於其君云、

東坡稱老杜北征詩、識君臣之大體、忠義
 之氣、與秋色爭高、善哉其言之也、如憶昔
 狼狽初、事與古先別、不聞夏殷衰、中自誅
 襄妲、爲明皇出色、厚於鄭畋、更幾倍矣、春
 秋之稱、微而顯、志而晦、婉而成章、盡而不

露、只其寧王之笛、竊吹、每乘金車、入宮門、
 而微意、隱然、乎言外、得國風諷刺之體、
 如商隱之詩、知きは、唯に風人之意を失するのみに非ず、亦全く
 臣子の禮無し、明の車清臣曰、白樂天の長恨歌は、叙事詳贖、後
 人當時の實事を知るを得て、紀録に功あり、然れども敗亡を以
 て戲爲し、更に惻怛憂愛の意無し、身、唐臣たり、亦た盍を春
 秋魯を存する所以の故を思はざる、余商隱に於ても亦深く其君
 に無禮なるを憎む云ふ。

東坡稱す、老杜北征の詩は、君臣の大體を識り、忠義の氣、秋色
 と高きを争ふと、善いかな其之を言ふや、憶昔昔狼狽の初、事、
 古先と別なり、聞かず夏殷衰ふ、中自ら襄妲を誅するを、の如き、
 明皇の爲に色を出だし、鄭畋より厚きこと更に幾倍ぞ、春秋の
 稱、微にして顯、志にして晦、婉にして章を成し、盡して汚れず、

汚詩賦之體亦當如是也。

嚴維詩、柳塘春水漫、花塢夕陽遲、劉賈父
謂夕陽遲、繁花、春水漫、不須柳也、東坡詩、
春江水暖鴨先知、毛西河謂、春江水暖、定
該鴨知、鶯不知耶、論詩如此、鑿窳而混沌
死、李西崖曰、詩話作而詩亡、信矣、蓋善詩
者不說詩、說詩者不善詩、故古人之詩多
爲注家所誤、阮裕曰、非但能言人不可得、
正索解言人亦不可得、嗟呼、不獨清言也。

夜航詩話卷之一 終

夜航詩話卷之一

も亦當さに是の如くなるべきなり。

嚴維の詩に、「柳塘春水漫く、花塢夕陽遲し」、劉賈父謂ふ、夕陽
遲は花に繁かり、春水漫は柳を須ひざるなりと、東坡の詩に、
春江水暖かにして鴨先づ知る、毛西河謂ふ春江水暖にして、定
めて鴨の知るを諺す、鶯は知らざらんやと、詩を論ずる此の如
き、窳を鑿ちて混沌死せん、李西崖曰、詩話作つて詩亡ぶと、信
なり、蓋詩を善くする者は詩を説かず、詩を説く者は詩を善く
せず、故に古人の詩、多くは注家に誤らる、阮裕曰、但言を能く
する人の得べからざるのみに非ず、正に言を解する人を索むる
も亦得可からず、嗟呼、獨り清言のみならざるなり。

夜航詩話卷之二

伊勢津阪孝綽君裕著

男 達 有 功 校

張籍還珠吟、君知妾有夫、贈妾雙明珠、感君綢繆意、繫在繡羅襪、妾家高樓臨苑起、良人執戟明光裏、知君用心如日月、事夫誓擬同生死、還君明珠雙淚垂、恨不相逢未嫁時、籍在他鎮幕府、鄂帥李師古以書幣辟之、籍卻而不納、作此詩以謝之、蓋君子待小人、宜不惡而嚴、若峻卻激怨、則其人不肖之心、生不中傷之不已也、宋李昉爲相、人有求進用者、必溫語卻之、子弟或問其故、曰、既失所望、又無善詞、取怨之道

張籍の還珠吟に、「君、妾に夫有るを知り、妾に贈る雙明珠、君が綢繆の意に感じ、繫で繡羅襪に在り、妾が家の高樓苑に臨んで起り、良人は戟を執る明光の裏、君の心を用ふる日月の如きを知るも、夫に事へ誓つて生死を向ふせん」と撰す、君に明珠を還し雙淚垂る、恨むらくは未だ嫁せざりし時に相ひ逢はざりしを」と、籍は他鎮の幕府に在り、鄂帥李師古、書幣を以て之を辟す、籍卻けて納れず、此詩を作り以て之を謝す、蓋、君子の小人を待つこと、宜しく惡まずして嚴なるべし、若し峻ならば卻て怨を激す、則ち其人不肖の心生じ、之を中傷せずんば已まざるなり、宋の李昉、相と爲り、人の進用を求むる者有れば、必ず溫語もて之を卻く、子弟或るまき其故を問ふ、曰、既に望む所を失ひ、又善詞無ければ、怨を取るの道なり、易に曰、快履自厲

也。易曰：快履貞厲。故仲尼不爲。已甚。古來
豪傑敗於小人者多昧此幾。吾故表而出
之。使世之惡惡已甚者有以監戒焉。

孟郊審交詩：種樹須擇地。惡土變木根。結
交若失人。中道生謗言。君子芳桂性。春濃
寒更繁。小人槿花心。朝在夕不存。莫躡冬
冰堅。中有潛浪翻。唯當金石交。可與賢達
論。吁。莽恭拳拳。甫笑嬉嬉。小人智慮險。平
地本太行。世之定交者。不可以不審矣。

俞安期鍾藤謠：鍾藤纏樹枝。樹枯藤作樹。
鄰婦媚私郎。歲久翻作私郎婦。里諺所謂
借賃舍。被奪本房者。弱主濫假名器。遂爲
姦雄所篡。大都類此。

袁介踏災行。有一老翁如病起。破衲襤褸。

ミ、故に仲尼は已甚は甚だしきを爲さずミ、古來豪傑の小人に敗る
者は、多くは此幾に昧きなり、吾故に表して之を出せし、世の
惡を惡む已甚しき者をして、以て監戒する有らしむ。

孟郊の交を審する詩に、「樹を種うるは須らく地を擇ぶ可し、惡
土は木根を變ず、交を結び若し人を失はば、中道に謗言を生ず、
君子は芳桂の性、春濃にして寒更に繁し、小人は槿花の心、朝に
在りて夕に存せず、躡む莫れ冬冰の堅きを、中に潛浪の翻へる
有り、唯當に金石の交、賢達と論ず可し」ミ、吁、莽恭拳々、甫笑
嬉々、小人の智慮險、平地本ミ太行、世の交を定むる者、以て審
かにせざる可からず。

俞安期の鍾藤謠に、「鍾藤樹枝に纏ひ、樹枯れて藤、樹ミ作る、鄰
婦私郎に媚び、歲久しくして翻て私郎の婦ミ作る」ミ、里諺に
謂はゆる舍を借賃して、本房を奪はる者、弱主濫りに名器を假
し、遂に姦雄に篡はる、大都おもむね此に類せり。

袁介の踏災行に、「一老翁有り病起の如く、破衲襤褸

瘦如鬼、曉來扶向官道傍、哀告行人乞米錢、予時奉檄離江城、邂逅一見憐其貧、倒囊贈與五升米、試問何故爲窮民、老翁答言聽我語、我是東鄉李福五、我家無本爲經商、只種官田三十畝、延祐七年三月初、賣衣買得犁與鋤、朝耕暮耘受辛苦、還私債納官租、誰知六月至七月、雨水絕無、湖又竭、欲求一點半點水、卻比農夫眼中血、滔滔黃浦知溝渠、農家爭水如爭珠、數車相接不能到、稻田一旦成沙塗、官司八月受災狀、我恐微糧吃官棒、相隨鄰里去告災、十石官糧望全放、當年隔莊分吉凶、高田盡荒低田豐、縣官不見高田旱、將謂亦與低田同、文字下鄉如火速、四隣百姓

如し、曉來扶けられて官道の傍に向ひ、行人に哀告して米錢を乞ふ、予時に檄を奉じて江城を離れ、邂逅一見して其貧を憐み、囊を倒にして五升の米を贈與す、試に問ふ何の故に窮民なる、老翁答へて言ふ我が語を聽け、我は是れ東鄉李福の五、我家は本々經商を爲す無し、只、種う官田三十畝、延祐七年三月初、衣を賣りて買ひ得たり犁と鋤と、朝耕暮耘辛苦を受け、私債を還し官租を納むるを要す、誰か知らん六月より七月に至り、雨水絶えて無く湖又竭く、一點半點の水を求めんと欲するに、卻て比す農夫眼中の血、滔々たる黃浦は溝渠の如く、農家水を争ふ珠を争ふが如し、數車相接して到る能はず、稻田一旦沙塗と成る、官司八月災狀を受く、我れ糧を徴して官棒を吃ふを恐る、鄰里に相隨ひ去て災を告ぐ、十石の官糧全放を望み、當年莊を隔て、吉凶を分つ、高田は盡く荒れ低田は豊、縣官、高田の旱を見ず、將た謂ふ亦た低田と同じと、文字郷に下る火の如く速に、四隣の百姓都て首伏す、只、我が首首せざるを嘆るに因り

都首伏、只因嗔我不肯首、卻把我田批爲
熟、太平九月開旱倉、嗟嗟貧乏無可償、男
名阿孫女阿惜、逼我嫁賣賠官糧、阿孫賣
與運糧戶、即日不知去何處、可憐阿惜猶
未筭、賣向湖州山裏去、我老今年七十奇、
饑無口食寒無衣、東求西乞度殘喘、無由
早向黃泉歸、旋言旋拭腮邊淚、我忽驚慚
汗沾背、老翁老翁勿復言、我是今年檢田
吏、介字可潛、元末人明袁御史凱、卽其子
也、此篇一字一淚、悽惻欲絕、凡膺是職、巡
野觀稼者、當日誦之一過、以培養慈心、庶
其視民如傷、不忍行苛虐矣、

馬柳泉賣子嘆云、貧家有子貧亦嬌、骨肉
恩重那能拋、饑寒生死不相保、割腸賣兒

て、却て我田を把て批して熟すを爲す、太平九月旱倉を開く、嗟々貧乏償ふ可き無し、男の名は阿孫女は阿惜、我に逼り嫁賣して官糧を賠ふ、阿孫は賣與す運糧戶、即日知らず何れの處にか去る、憐む可し阿惜猶ほ未だ筭せず賣られて湖州山裏に向つて去る、我は老う今年七十奇、饑えて口食無く寒くして衣無し、東求西乞殘喘を度る、由無し早く黃泉に向つて歸るに、旋言ひ旋拭ふ腮邊の涙、我忽ち驚慚し汗背を沾す、老翁老翁復た言ふ勿れ、我は是れ今年の檢田吏に、介字は可潛、元末の人、明の袁御史凱は卽ち其子なり、此篇、一字一淚、悽惻絶えんを欲す、凡そ是の職に膺り、野を巡り稼を観る者、當に日に之を誦すること一過、以て慈心を培養す可し、庶はくば其の民を視る傷むが如くにして、苛虐を行ふに忍びざらん。

馬柳泉の子を賣る嘆に云ふ、「貧家に子有り貧も亦嬌、骨肉の恩重し那ぞ能く拋たん、饑寒生死相保たず、腸を割き兒を賣り奴

爲奴曹此時一別何時見。遍撫兒身。舐兒面。有命豐年來。贖兒無命九泉抱。長怨曠兒切莫憂。爺孃憂思成病誰汝將。抱頭頓足哭聲絕。悲風颯颯天地茫。此作亦哀。一讀腸斷不忍再讀矣。

李紳憫農詩。鋤田日當午。汗滴禾下土。誰知盤中餐。粒粒皆辛苦。又聶夷中詩。二月賣新絲。五月糶新穀。醫得眼前創。剋卻心頭肉。田家困苦在阿堵中。爲民之父母者。宜時時吟誦念其情狀也。顏仁賄農詩。夜半呼兒趁曉耕。羸牛無力漸羸行。貴人認識農家苦。秣道田中穀自生。蔣貽恭蠶詩。辛勤得繭不盈筐。燈下繅絲恨更长。著處不知來處苦。但貪身上錦衣裳。竝五代人

曹爲爲す、此の時一別何れの時にか見ん、遍く兒の身を撫し兒の面を舐む、命有らば豊年に來りて兒を贖はん、命無くば九泉に長怨を抱かん、兒に曠す切に爺孃を憂ふる莫れ、憂思病を成さば誰か汝を將けん、頭を抱き足を頓して哭聲絶え、悲風颯々として天地茫たりし、此作も亦哀し、一讀腸斷え、再讀するに忍びず。

李紳の農を憫む詩に、「田を鋤き日午に當る、汗は滴る禾下の土、誰か知らん盤中の餐、粒々皆な辛苦」に、又聶夷中の詩に、「二月新絲を賣り、五月新穀を糶る、眼前の創を醫し得て、剋卻す心頭の肉」に、田家の困苦は阿堵の中に在り、民の父母たる者は宜しく時々吟誦して其情狀を念ふ可きなり、顏仁賄の農の詩に、「夜半兒を呼び曉を趁ふて耕す、羸牛は力無く漸く行を羸む、貴人は識らず農家の苦を、秣道ふ田中穀自ら生ず」に、蔣貽恭の蠶の詩に、「辛勤繭を得て筐に盈たず、燈下絲を繅り恨更に長し、著る處は知らず來る處の苦を、但だ貪る身上の錦衣裳」に、竝に五代の人、意旨絶はだ類す、前の二詩に及ばず、雖、亦

意旨絶類、雖不及前二詩、亦爲食租衣稅者、作雙幅掛軸、可也。

楊升菴云、唐詩有極劣者、宋人採入全唐詩話、使觀者曰是亦唐詩一體、譬之燕趙多佳人、其間有跛者、眇者、疥且痔者、乃專房寵之、曰是亦燕趙佳人之一種、可乎、余謂雖杜工部王右丞、間亦有粗俗可厭者、而學者一槩效顰、不免於升菴之誚、甚或徒得其短處、而遺其長處矣、凡學諸技藝、不可不知此訣也。

王阮亭香祖筆記云、杜詩、戶外昭容紫袖垂、蓋唐制、天子臨朝、則用宮人、引至殿上、至天祐二年、始詔罷之、是全盛之時、反不如衰亂之朝、爲合禮也、又郎官直亦有侍

租を食み税を衣る者の爲めに、雙幅掛軸を作して可きなり。

楊升菴云ふ、唐詩に極劣の者有り、宋人採りて全唐詩話に入れ、觀者をして是れ亦唐詩の一體と曰はしむ、之を譬ふるに、燕趙に佳人多し、其の間に跛者・眇者・疥且痔者有り、乃ち房を專にし之を寵し、是れも亦燕趙佳人の一種と曰ふ、可ならんや、余謂ふに、杜工部王右丞も雖、間も亦粗俗厭ふ可き者有り、而して學者一槩に顰に效ふ、升菴の誚せしめを免れず、甚しきは或は徒に其短處を得て、其長處を遺せり、凡そ諸の技藝を學ぶには、此の訣を知らざる可からざるなり。

王阮亭の香祖筆記に云ふ、杜詩「戶外昭容紫袖垂」は、唐の制に、天子朝に臨む、則ち宮人を用ひ、引いて殿上に至る、天祐二年に至り、始めて詔して之を罷む、是れ全盛の時、反て衰亂の朝の禮に合ふと爲すに如かざるなり、又、郎官の直とらふに、亦「侍

女新添五夜香之句、竟不曉侍女是何色人也、宋明以來乃爲嚴重矣、予按韓退之紅桃花詩、應知侍史歸天上、故伴仙郎宿禁中、亦指此事、是禁中宿妓也、杜詩又有輦前才人帶弓箭之句、唐制天子遊幸、官女騎馬扈從、不典尤甚、彼方男女之別、特嚴而朝廷之間、卻多此風流、何也、見盧照鄰長安古意、朝官淫縱之甚、邪慾放逸、無所底止、舉朝爲遊冶郎、禍水之源、有自來矣、

唐宋皆有官妓、搢紳宴會、必召以侑酒、或與妓賡詩、無復畏清議、若杜牧之狂狷、反以爲美談、故倡門之遊、雖貴官無懼、金魚牙牌、纍纍懸於歌樓、何其失體之甚也、至

女新に添ふ五夜の香の句あり、竟に曉らず侍女は是れ何色の人たるを、宋明以來は乃ち嚴重爲る、予按するに韓退之の紅桃花の詩に、「應に知るべし侍史天上に歸り、故らに仙郎を伴ひ禁中に宿す」と、亦此の事を指す、是れ禁中に妓を宿するなり、杜詩に又「輦前の才人弓箭を帶ぶ」の句あり、唐の制に天子遊幸すれば、官女馬に騎り扈從す、不典尤も甚だし、彼方男女の別特に嚴なり、而して、朝廷の間、卻て此風流多きは何ぞや、盧照鄰の長安古意を見るに、朝官淫縱の甚だしき、邪慾放逸、底止する所無く、朝を舉げて遊冶郎爲る、禍水の源は自りて來る有り。

唐宋皆な官妓有り、搢紳の宴會には、必ず召して以て酒を侑む、或は妓を詩を賡し、復た清議を畏るゝ無し、杜牧之の狂狷の若き、反て以て美談爲す、故に倡門の遊は、貴官を雖懼る無し、金魚牙牌纍々として歌樓に懸る、何ぞ其の體を失するの甚しき

於明興士習稍還、而此風不變、諸司每朝退、相率飲於妓館、淫放沈湎、政多廢弛、至宣德初、有禁革之、挾妓宿娼者有律、始無寄猥之醜、云我邦官箴之嚴、自古以來、未嘗有如是之弊、或風流之徒、謾傲尤異、邦作贈妓悼妓等詩者、君子國之罪人也、

善作情詩者、其人必不端、卽摘藻如春葩、奚取於君子之林、沉歸愚唐詩別裁、不收西崑香奩諸體、肥藩樂泮集、苟涉豔語者、皆擯而弗取、其見卓矣、蓋名教中自有樂地、何必沾沾喜溫柔鄉語、而鳴桑濮之音、戲言亦出於思、況乃詩爲心聲、豈宜以輕薄爲風流、而自失體、德乎、嫌慢諛浪、慣爲美談、恐至執女手之言、發自臨喪之際、

や、明興るに至り士習稍還る、而して此風變せず、諸司朝退する毎に、相ひ率ゐて妓館に飲す、淫放沈湎、政多く廢弛す、宣德の初に至り、禁有りて之を革め、妓を挾み娼を宿せしむる者は律有り、始めて寄猥の醜無しと云ふ、我邦官箴の嚴なる、古より以來未だ嘗て是の如きの弊あらず、或は風流の徒、謾りに尤に異邦に倣ひ、妓に贈る、妓を悼む等の詩を作る者は、君子國の罪人なり。

善く情詩を作る者は、其人必不端でからず、卽ち摘藻、春葩の如きも、奚ぞ君子の林に取らんや、沉歸愚の唐詩別裁に、西崑香奩の諸體を收めず、肥藩の樂泮集は、苟も豔語に渉る者は、皆擯けて取らず、其見卓なり、蓋名教の中に自ら樂地あり、何ぞ必しも沾々として溫柔郷の語を喜びて、桑濮の音を鳴らさんや、戲言も亦思に出づ、況んや乃ち詩は心聲たり、豈宜しく輕薄を以て風流と爲して、自ら體を失し德を穢す可けんや、嫌慢諛浪、慣れて美談と爲さば、恐らくは女手を執るの言は、喪に臨むの際より發し、妃膺を蓋むの詠は、宴に侍するの餘に宣ふるに至り、名教

留妃唇之詠宜於侍宴之餘名教掃地矣然關雎爲國風之首即言男女之情孔子刪詩亦存鄭衛則其發乎情止乎禮義者亦宜有所用捨未必一槩擯棄也抑又如國雅者流好咏花柳閑情甚或藉之爲花鳥使辭氣鄙倍使人不勝聞夫以移風易俗之具反爲誨淫誘邪之媒胡燮亭所謂筆墨之修羅當喫老僧之痛棒矣

宋沉朗奏關雎夫婦之詩頗嫌狎褻不可冠國風故別撰堯舜二詩以進敢願孔子之案理宗嘉之賜帛百匹拘儒以理爲宗不得詩人之趣一至于斯哉

律詩五七言竝從下第四字忌仄間平其爲大禁猶國歌所謂腰折也若上字仄聲

地を掃はん、然れども關雎は國風の首たり、即ち男女の情を言へり、孔子詩を刪り亦鄭衛を存す、則ち其情に發し、禮義に止る者は、亦宜しく用捨する所有るべし、未だ必ずしも一概に擯棄せざるなり、抑も又國雅者流の如き、好んで花柳の閑情を詠じ、甚しきは或は之を藉りて、花鳥の使を爲す、辭氣鄙倍、人をして聞くに堪へざらしむ、夫れ風を移し俗を易ふの具を以て、反つて淫を誨へ邪を誘ふの媒を爲す、胡燮亭の謂はゆる筆墨の修羅は、當に老僧の痛棒を喫すべし。

宋の沉朗奏す、關雎は夫婦の詩にして、頗る狎褻を嫌ふ、國風に冠す可からず、故に別に堯舜の二詩を撰し以て進む、敢て孔子の案を翻へす、理宗之を嘉みし、帛百匹を賜ふ、拘儒理を以て宗を爲し、詩人の趣を得ざること、一に斯に至るかな。

律詩五七言、竝に下より第四字、仄、平を間むを忌む、其大禁たる、猶ほ國歌の謂はゆる腰折の^{こし折}こときなり、若し上字仄聲にし

不可那移、則其下用平字以避之、如鳥啼竹樹間、萬戶搗衣欲暮秋、則千百首中、屢一二句耳、豈可取以爲法哉、韓愈天上宵嚴建羽旄、殷堯藩強把黃花、插滿頭、來鶴醉踏殘花、屐齒香、改夜爲宵、菊爲黃、落爲殘、以治聲律也、然此尙不見痕迹、至如陸龜蒙忘情不效、孤醒客、破浪欲乘千里船、段成式猶憐最小分瓜日、徐夔五斗低腰走世塵、何宏中馬革盛尸每恨遲、獨醒破瓜折腰破、萬里浪馬革裹尸皆故實、字面猶改用替代字、李蟠龍十載詞林供奉中、亦以詞替翰字、又老學菴筆記體以道詩、頌君一日殷勤意、示我十年感遇詩、十轉平聲、可讀爲誼、汴京里巷間音亦爲是、

て那移す可からずんば、則ち其下に平字を用ひ以て之を避く、「鳥は啼く竹樹の間」、「萬戸衣を搗きて暮秋ならん」欲すの如き、則ち千百首中屢々一二句のみ、奪取て以て法と爲す可けんや、韓愈の「天上宵嚴に羽旄を建て」、「殷堯藩の「強いて黃花を把つて滿頭に挿む」、來鶴の「酔て殘花を踏んで屐齒香ばし」、夜を改めて宵と爲し、菊を黃と爲し、落を殘と爲し、以て聲律を治むるなり、然れども此れ尙ほ痕迹を見ず、陸龜蒙の「情を忘れて效はず孤醒の客、浪を破りて乘らん」欲す千里の船、段成式の「猶憐む最小分瓜の日」、徐夔の「五斗腰を低れて世塵に走る」、何宏中の「馬革尸を盛る毎に遲きを恨む」、の如きに至りては、獨醒破瓜は折腰、萬里の浪を破り、馬革尸を裹むは皆故實、字面猶ほ改めて替代の字を用ふ、李蟠龍の「十載詞林供奉の中」亦詞を以て翰の字に替ふ、又老學菴筆記に、體以道の詩に、「君を頌はす一日殷勤の意、我に示す十年感遇の詩」、十、平聲に轉す、讀て誼と爲す可し、汴京里巷間の音も亦是れと爲す、故に云ふ、其の孤平を忌む至嚴なるを見る可きなり、五言の聲律は差や寬、

故云、可見其忌孤平至嚴也已、五言聲律差寬、然白居易請錢不、早朝注、請讀平聲、陸龜蒙、但和大小包、徐鉉、但知盡意看、竝注、但平聲、乃知唐人所慎避、故特注叶音、其不可忽審矣、雖然導幼學者、姑不責備而可、必苛束以聲病、恐左扞右格、不得動手矣、稍有所立、進步向難、既引升堂、更當入室、揚子所謂、在夷貉、則引之倚門牆、則麾之、亦教之術也、

寬政七年冬、清國蘇州漁舟、漂抵仙臺海濱、舍其人於府下、稟官取進止、留百餘日、於是往觀者多攜紙求書、或投詩請和、然彼皆漁夫、但愧謝而已、府學博士村東藏管領其事、因爲寫詩句、令習以塞人之需、

然れども白居易の「錢を請ふて早く朝せず」と、法に、讀は平聲に讀む、陸龜蒙の「但、大小を和して包む、徐鉉の、但だ知る意を盡して看る、」竝に但は平聲を注す、乃ち知る唐人の慎んで避くる所、故に特に叶音を注す、其忽にす可からざるや審なり、然る雖、幼學を導く者は、姑く備はるを責めずして可なり、必ず苛束するに聲病を以てせば、恐らくは左扞右格して手を動かすを得ず、稍、立つ所有らば、歩を進めて難きに向ふ、既に引て堂に升り、更に當に室に入るべし、揚子の謂はゆる夷貉に在れば、則ち之を引き、門牆に倚れば、則ち之を麾くしほ、亦教の術なり。

寬政七年の冬、清國蘇州の漁舟漂ひて仙臺の海濱に抵り、其の人を府下に舍き、官に稟して進止を取る、留るこゝ百餘日、是に於て往きて觀る者多くは紙を攜へて書を求め、或は詩を授じて和を請ふ、然れども彼は皆漁夫にして但愧謝するのみ、府の學博士村東藏其の事を管領し、因て爲に詩句を寫し、習ひて以て

又教作詩、彼游手涉日、無間可消、唯詩書是攻、及其赴長崎、道中所作絕句、僅有可觀者、西人學詩書於我、而歸亦可謂奇事也矣、

南風稱薰、既詳于前、清人常調之笑、徒長於說理而濶於事情者、云、譬如贊美人秀色可餐、君必爭人肉喫、不得、算不得聰明也、凡形容之文、比況之詞、皆宜以此意觀之也、如堯舜之民可比屋、而封桀紂之民可比屋而誅、若向癡人說夢、則唐虞之時、封侯滿天下、夏殷之末、大辟遍海內也、說詩以意逆志、不以辭害志、孟子之教、何但詩也、

班固、西都賦、紅塵四合、左思、吳都賦、紅塵

人の語を塞がしむ、又た詩を作るを教ゆ、彼、手を遊ばし日を涉り、間の消す可き無し、唯だ詩書を是れ攻む、其長崎に赴くに及び、道中作る所の絶句、僅、觀る可き者あり、西人、詩書を我に學びて歸る、亦奇事と謂ふ可きなり。

南風、薰と稱す、既に前に詳なり、清人常調之徒らに理を説くに長じて、事情に濶れる者を笑ひて云、譬へば美人の秀色餐ふ可きを贊するが如き、君必ず人肉の喫し得ざるを争はん、聰明を算し得ざるなり、凡そ形容の文、比況の詞は、皆な宜しく此意を以て之を觀るべし、堯舜の民は比屋にして封す可く、桀紂の民は比屋にして誅す可きが如き、若し癡人に向つて夢を説かば、則ち唐虞の時、封侯天下に滿ち、夏殷の末、大辟海内に遍きなり、詩を説くに意を以て志を逆へ、辭を以て志を害せず、孟子の教、何ぞ但に詩のみならずや。

班固の西都の賦に、「紅塵四合す」と、左思の吳都賦に、「紅塵

晝昏古詩紅塵蔽天地白日何冥冥皆謂熱鬧也蓋紅者清麗之稱以諸色中紅最清麗故稱美顏曰紅顏清泉曰紅泉猶古語以鮮明爲翠也宋人詹度句滿目江山映日紅亦唯謂風色鮮明已蓋都會繁華之地塵埃滾滾漲起然錦街繡陌如拭而華轂綺鳥所揚視之村巷驛路牛馬敗履糞穢狼藉蓬勃相撲不勝汚人者不亦清麗乎所以稱紅塵也祖庭事苑云塵本無紅以其能染物故曰紅塵亦曲說耳

白雲謂晴空閑雲詩家所用多爲紅塵反對白樂天詩紅塵鬧熱白雲冷是也故李于鱗送別云君去何時歸山中春草夕暮將白雲塵不及紅塵陌蓋自陶隱居之怡

しに古詩に「紅塵天地を蔽ひ、白日何ぞ冥々」、皆な熱鬧を謂ふなり、蓋紅は清麗の稱、諸色中紅は最も清麗なるを以て、故に美顔を稱して紅顔と曰ひ、清泉を紅泉と曰ふ、猶古語に鮮明を以て翠と爲すが如し、宋人詹度の句に「滿目の江山日に映して紅なり」、亦唯風色の鮮明を謂ふのみ、蓋都會繁華の地は、塵埃滾々として漲り起る、然れども錦街繡陌拭ふが如く、而して華轂綺鳥の揚る所、之を村巷驛路の牛馬敗履、糞穢狼藉、蓬勃として相ひ撲ち、人を汚すに勝へざる者に視ぶれば、亦清麗ならずや、紅塵と稱する所以なりと、祖庭事苑に云ふ、塵は本と紅無し、其能く物を染むるを以て、故に紅塵と曰ふと、亦曲説のみ。

白雲は、晴空の閑雲を謂ふ、詩家の用ふる所、多くは紅塵の反對と爲す、白樂天の詩に、「紅塵は鬧熱白雲は冷なり」と、是れなり、故に李于鱗の送別に云ふ、「君去つて何の時にか歸る、山中春草の夕、白雲の塵を將つて、紅塵の陌に及ばざる莫れ」と、蓋

悅、遂專稱隱者境界以其無心而出岫、悠悠閒逸之態、有似山人逍遙之趣也、北史魏彭城王勰傳、高祖詔曰、勰清規懋賞、與白雲俱潔、厭榮捨紱、以松竹爲心、此亦可見其義已、

張和仲云、杜子美仰面貪看鳥、回頭錯應人、乃詩家上乘、而朱考亭引之、爲心不在焉、則不得其正之證、是何異癡人前說夢乎、真可發一笑、其論似矣、然朱子姑假此爲喻、亦斷章取義耳、豈如是昧乎詩耶、和仲不曉其意、乃真癡人說夢、尤可發一笑也、

好嗜人之短、以炫己之長、學者之通弊也、宋人詩云、鮑老當筵笑、郭郎笑他舞袖太

陶隱居の怡悅より、遂に専ら隱者の境界を稱す、其無心にして岫を出で、悠悠閒逸の態、山人逍遙の趣に似たるあるを以てなり、北史魏彭城王勰傳に、高祖詔して曰、勰清規懋賞、白雲俱潔、深く、榮を厭ひ紱を捨て、松竹を以て心爲す、此亦其の義を見る可きのみ。

張和仲云ふ、杜子美の「面を仰いで看鳥を貪り、頭を回して塵人を錯る」、乃ち詩家の上乗なり、而して朱考亭之を引き、心焉に在らずんば則ち其の正を得ざるの證を爲す、是れ何ぞ癡人の前に夢を説くに異らんや、真に一笑を發す可し、其論は似たり、然れども朱子姑らく此を假りて喻を爲す、亦章を斷ち義を取るのみ、豈是の如く詩に昧からんや、和仲其意を曉らず、乃ち真に癡人の夢を説く、尤も一笑を發す可きなり。

好んで人の短を嗜し、以て己の長を炫するは、學者の通弊なり、宋人の詩に云ふ「鮑老筵に當りて郭郎を笑ふ、笑ふ他の舞袖太

郎當若教鮑老當筵舞轉更郎當舞袖長
可爲易言者鍼砭程伊川見人論前輩得
失曰汝輩且取他長處誠德言也

清人李穆堂云拾人遺篇斷句而代爲存
之者比之葬暴露之白骨功德更大此言
良厚詞人嘔出心肝幾許纔得一二不朽
之語同好相愛不可不傳也然臧拙蔽臭
亦是大功德晉桓溫少與殷浩友善殷常
作詩示溫溫後見之謂曰汝慎勿犯我我
當出汝詩示人明姚廣孝著道餘錄議者
非之張洪輿曰少師于我厚今死矣吾無
以報但見道餘錄輒爲焚棄耳余於神風
編亦有當載而不載者非幽冥之間負斯
良友也

郎當若し鮑老をして筵に當りて舞はしめば、轉更せん郎當舞
袖の長きを「ミ」言を易くする者の鍼砭を爲す可し、程伊川、人
の前輩の得失を論ずるを見て曰、汝が輩且く他の長處を取れ「ミ
誠に德言なり。

清人李穆堂云ふ、人の遺篇斷句を拾ひ、而して代りて爲に之を
存する者、之を暴露の白骨を葬むるに比すれば、功德更に大な
り「ミ、此の言良に厚し、詞人心肝を嘔出する「ミ幾許にして、纔に
一二不朽の語を得ば、同好相ひ愛して傳へざる可からざるなり、
然れども拙を藏し臭を蔽ふも、亦是れ大功德なり、晉の桓溫少
くして殷浩「ミ友「ミし善し、殷常に詩を作り溫に示す、溫後ち之
を見て謂て曰く、汝慎みて我を犯す勿れ、我當に汝の詩を出だ
して人に示すべし「ミ、明の姚廣孝、道餘錄を著す、論者之を非る、
張洪輿曰く、少師我に於て厚し、今死せり、吾以て報する無し、
但だ道餘錄を見れば、輒ち爲めに焚棄せんのみ「ミ、余、神風編に於
ても、亦當に載すべくして載せざる者有り、幽冥の間、斯の良友
に負くに非ざるなり。

武弁之士作詩無害磨盾橫槩之風悲歌慷慨之氣亦可以庶幾焉如學國字卅一之什直是養成兒女子態耳余亦嘗染指以其易於詩殆將爲專家既而嫌其無丈夫氣遂焚此筆研矣加藤清正慮士風流于文弱戒藩中禁之良有以也

源孝道詩巫陽有月猿三叫衝嶺無雲雁一行孝道多田滿仲季子當時武弁中有若絕唱真足驚人矣而世俗唯稱清原滋藤東征途次誦杜荀鶴漁舟燈火寒歸浦驛路鈴聲夜過山一聯何耶
源英明夏日作池冷水無三伏暑松高風有一聲秋菅原文時改作水冷池無三伏暑風高松有一聲秋只四字移易其所而

武弁の士詩を作る害無し磨盾横槩の風悲歌慷慨の氣亦以て庶幾す可し國字卅一の什を學ぶが如き直に是れ兒女子の態を養成するのみ余も亦嘗て指を染む其の詩より易きを以て殆んど將に專家たらんさす既にして其の丈夫の氣無きを嫌ひ遂に此の筆研を焚けり加藤清正士風の文弱に流るゝを慮り藩中に戒めて之を焚く^ま以有るなり。

源の孝道の詩に「巫陽月有り猿三叫衝嶺雲無く雁一行」孝道は多田滿仲の季子なり當時武弁の中に若のこゝき絶唱有り眞に人を驚かすに足る而して世俗は唯だ清原滋藤東征の途次に杜荀鶴「漁舟の燈火寒歸に歸り驛路の鈴聲夜山を過ぐ」の一聯を誦するを稱するは何ぞや。

源の英明の夏日の作に「池は冷にして水に三伏の暑無く松は高くして風に一聲の秋有り」菅原文時改めて「水は冷にして池に三伏の暑無く風は高くして松に一聲の秋有り」に作る只

手段超然矣、文時嘗丞相曾孫也、英明親王齊世之子、賜源姓、曾丞相外孫、

滄波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲、橋直幹作爲時稱賞、世傳僧齋然西渡、雲爲霞鳥爲蟲、以爲己作示人、西人云、若作雲鳥乃佳、此其拙陋、童子所不爲、齋然爲名僧、豈若是駭乎、若盜以自誇、其向域外之人、孰憚而易字之爲、江談鈔亡論已、南郭世語北海詩史皆採之、何耶、余爲齋然、雪冤云、

技工入手漸近、自然稱曰圓熟、謂不見痕迹也、詩家所用更有二義、唐彦謙詩、定起松鳴屋、吟圓月上身、劉克莊詩、新詩鍛鍊久方圓、此謂圓成、蓋從圓滿之義來、猶言

四字其の所を移易して、手段超然たり、文時は曾丞相の曾孫なり、英明親王は齊世の子にして、源姓を贈ふ、曾丞相の外孫、

「滄波路は遠く雲千里、白霧山は深し鳥一聲」、橋の直幹の作、時に稱賞せらる、世に傳ふ、僧齋然西渡し、雲を霞と爲し、鳥を蟲と爲し、以て己の作と爲して人に示す、西人云ふ、若し雲鳥に作らば乃ち佳なりと、此れ其の拙陋なる童子も爲さざる所なり、齋然は名僧たり、豈是の若く駭ならんや、若し盗んで以て自誇らば、其の域外の人に向ふ執を憚りて字を易ふることを之れ爲さん、江談鈔は論亡のみ、南郭の世語、北海の詩史に皆之を採るは、何ぞや、余齋然の爲めに冤を雪ぐと云ふ。

技工手に入らば、漸く自然に近し、稱して圓熟と曰ふ、痕迹を見はさざるを謂ふなり、詩家の用ふる所、更に二義有り、唐彦謙の詩に、「定より起きて松屋に鳴り、吟圓にして月身に上る」と、劉克莊の詩に、「新詩鍛鍊久しくして方に圓なり」、此れ圓成を謂ふ、蓋、圓滿の義より來る、猶ほ全しと言ふがごとし、丁元珍の

全也、丁元珍詩、日中林影直、風靜鳥聲圓、此謂圓滑、猶言宛轉、鄭谷松堂虛豁講聲圓、王禹偁講經霜殿磬聲圓、亦竝此義也、
 罨畫奇語、人喜用之、然問其義、多未能委、罨、鳥合反、說文、水中魚罕也、蓋網之自上掩下者也、湖州長興縣有罨畫溪、古木夾岸、陰森蔽天、可十里許、故稱謂其景掩映如畫也、唐詩賈珠釋、諱用之遊、章曲詩、罨畫春塘大白低、云罨掩也、言畫在上、而水映在下、大白山名、映在水中、故曰低、又釋、秦韜玉花明、驛路騰脂暖、山入江亭、罨畫開、云、山影在水底、如畫之罨於下、此皆就映水而言也、宋人罨畫溪詩云、竹林深處杜鵑啼、兩岸青青草色齊、欲識人間真罨

詩に、「日中して林影直く、風靜にして鳥聲圓なり」と、此れ圓滑を謂ふ、猶ほ宛轉と言ふがごとし、鄭谷の「松堂虚豁にして講聲圓なり」王禹偁の「經を講する霜殿磬聲圓なり」と、亦た竝に此義なり。

罨畫は、奇語、人喜んで之を用ふ、然れども其の義を問へば、多くは未だ委す能はず、罨は鳥合の友、說文に、水中の魚罕なりと、蓋、網の上より下を掩ふ者なり、湖州長興縣に罨畫溪あり、古木岸を夾み、陰森天を蔽ふ、十里許はがり、故に稱して其景掩映畫の如きを謂ふ、唐詩賈珠に、諱用之の章曲に遊ふ詩に、罨畫春塘大白低しを釋して云ふ、罨は掩なり、言ふは畫、上に在り、而して水映じて下に在り、大白は山の名、映じて水中に在り、故に低しと曰ふと、又秦韜玉の「花は驛路に明かに騰脂暖に、山は江亭に入りて罨畫開く」を釋して云ふ、山影は水底に在り、畫の下に罨ふが如しと、此れ皆水に映するに就きて言ふなり、宋人罨畫溪の詩に云ふ、「竹林深き處杜鵑啼き、兩岸青青々草色齊し、人間眞の罨畫を識らん」と欲せば、朱藤影を倒にして清溪に入

畫朱藤倒影、入清溪、其義不尤明乎、元稹
 畫畫樓臺青黛山、謂烟鶻之籠也、又張祐
 柘枝妓詩、紅罽畫衫纈腕出、白居易罽畫
 羅衣畫嫂裁、和凝罽畫披袍從傘地、是今
 之網繡也、花蕊夫人宮詞、新秋女伴各相
 逢、罽畫船飛別浦中、陸游、禹祠行樂盛、年
 年繡殼爭先、罽畫船此謂彩船已、

杜詩此行非不濟、良友昔相於、按孔北海
 與韋甫休書云、間僻疾動、不得與、足下岸
 幘廣座、舉杯相於、以爲邑邑、曹子建樂府
 云、廣情故、心相於、是漢末常語、猶云相與、
 謂親昵也、蓋於通與、相得而歡也、古詩賞
 析、以爲相往來未盡、佩文詩韻附注、於居
 也、相依以居之意、亦鑿說耳、近得通雅讀

る、其義尤も明ならずや、元稹の「罽畫の樓臺青黛の山」、烟
 鶻の籠れるを謂ふなり、又張祐の柘枝妓の詩に、「紅罽畫衫纈腕を
 纏ふて出づ」、白居易の「罽畫羅衣嫂の裁する儘なり」、和凝の
 「罽畫袍を披く袖を傘する從りす」、是れ今の網繡なり、花蕊夫
 人の宮詞に、「新秋女伴各、相ひ逢ふ、罽畫の船は飛ぶ別浦の中」、
 陸游の「禹祠行樂年々盛なり、繡殼先を争ふ罽畫の船」、此
 れ彩船を謂ふのみ。

杜詩の「此行濟らざるに非ず、良友昔相於にす」、按ずるに孔北
 海の韋甫休に與ふる書に云、間僻疾動、足下、廣座に岸幘し、杯
 を舉げて相於にするを得ず、以て邑邑を爲す、曹子建の樂府
 に云ふ、情故を廣くし心相於にす、是れ漢末の常語にして、猶
 ほ相與にす、云ふがごとし、親昵するを謂ふなり、蓋、於は與に
 通ず、相得て歡するなり、古詩賞析に、以て相往來す、爲す、未
 だ盡さず、佩文詩韻の附注に、於は居なり、相ひ依りて以て居る
 の意、亦た鑿說のみ、近ごろ通雅を得て之を讀むに、詳に其義
 を辯じ、余の考を符す、賈島の姚少府に酬ゆるに、「文を刊する

之詳辯其義與余考符買島酬姚少府刊
 文非不朽君子自相於朱慶餘送馬秀才
 相於竟何事無語與知音許棠誰知江徽
 客此景倍相於羅隱今日空江畔相於只
 酒尊僧齊己相於分倍親劉得仁贈敬旺
 助教便欲去隨爲弟子片雲孤鶴可相於
 元稹未面西川張校書書來稠疊頗相於
 皆言相對而昵也

采在蒂之下擎花之莖也故數花曰幾采
 此方俗語所云幾輪非枝柯之謂唐書韋
 陟傳陟以五采賤爲書記使侍妾主之陟
 唯署名自謂所書陟字如五采雲署名謂
 押字五采五花也若訓枝成何義耶細采
 釵采鬢采耳朵亦皆是也杜詩黃四娘家

は不朽に非ず、君子自ら相於にす。朱慶餘の馬秀才を送るに、
 「相於にす、竟に何事ぞ、語無く知音と與にす。許棠の「誰か知
 らん江徽の客、此景倍、相於にす」と、羅隱の「今日空江畔、相
 於にす、只だ酒尊」と、僧齊己の「相於にし分れて倍、親む」
 と、劉得仁の敬旺助教に贈るに、「便ち去隨して弟子たらん」と欲
 す、片雲孤鶴相於にす可し」と、元稹の「未だ面せず西川の張校
 書、書來り稠疊頗る相於にす」と、皆相ひ對して昵しむを言ふな
 り。

采は蒂の下に在りて、花を擎ぐるの莖なり、花を數へて幾采と
 曰ふ、此方の俗語に云ふ所の幾輪なり、枝柯の謂に非ず、唐書韋
 陟傳に、陟、五采賤を以て書記と爲し、侍妾をして之を主らしむ、
 陟は唯名を署するのみ、自ら謂ふ書する所の陟の字は五采雲の
 如しと、名を署すとは、押字を謂ふ、五采は五花なり、若し枝と
 訓せば何の義を成さんや、細采、釵采、鬢采、耳朵も亦皆な是れ

花滿蹊、千朵萬朵亞枝低、白居易、石榴枝
 上花千朵、荷葉杯中酒十分、又、蝶戲爭香
 朵、鶯啼選穩枝、又、咏木蓮花、花房膩似紅
 蓮朵、方干題山花、濃香薰墨葉、繁朵壓車
 枝、元稹、櫻桃花一枝、兩枝千萬朵、費冠卿
 掛樹藤、蔓衍數條、遠溟濛、千朵垂、劉禹錫
 渾侍中宅牡丹、徑尺千餘朵、人間有此花、
 又春詞、行到中庭數花朵、白敏中、桃花、千
 朵穠芳倚樹斜、一枝枝綴亂紅霞、陸龜蒙
 辛夷花、高處朵稀難避日、動時枝弱易爲
 風、裴說、薔薇、一架長條萬朵春、嫩紅深綠
 小窠勻、崔魯山、鶻、一番春雨吹巢冷、半朵
 山花咽、荀香、雍陶、嘉蓮、露濕紅芳雙朵重、
 風翻綠蒂一枝長、黃滔、千葉石榴、一朵千

なり、杜詩に、「黃四娘家は花蹊に滿す、千朵萬朵枝に亞きて低
 る」云、白居易の「石榴枝上花千朵、荷葉杯中酒十分」、又「蝶は戲
 れて香朵を争ひ、鶯は啼いて穩枝を選ぶ」、又木蓮花を咏して、
 「花房の膩は紅蓮の朵に似たり」、方干の山花に題して、「濃香墨
 葉に薰し、繁朵車枝を壓す」、元稹の「櫻桃花一枝、兩枝千萬朵」、
 費冠卿の「樹に掛る藤蔓衍する數條、遠く溟濛として千朵垂る」、
 劉禹錫の渾侍中宅の牡丹に、「徑尺千餘朵、人間此花有り」、又春
 詞に、「行きて中庭に到り花朵を數ふ」、白敏中の桃花に、「千朵
 の穠芳樹に倚て斜なり、一枝枝綴して紅霞を亂たる」、陸龜蒙の
 辛夷花に、「高處朵稀にして日を選び難し、動く時に枝弱くして
 風を爲し易し」、裴說の薔薇に、「一架の長條萬朵の春、嫩紅深
 綠小窠勻ふ」、崔魯山の鶻に、「一番の春雨巢を吹いて冷に、半朵
 の山花鶻に咽びて香し」、雍陶の嘉蓮に、「露濕ひ紅芳雙朵重し、
 風翻て綠蒂一枝長し」、黃滔の千葉石榴に、「一朵千葉騰枝を繞
 る、珠霞別に與に期を成すに堪へたり」云、初學の爲めに之を歴

英繞曉枝、綵霞堪別與成期、爲初學、歷舉之、其義可見已、又元稹題美人須臾日射臙脂頰、一朵紅蘇旋欲融、此猶一顆也、盧綸茶萸一朵映華簪、元稹萸房暗綻紅珠、衆僧齊已對菊好把茶萸、配伊此以、其簇簇相綴、比花積稱之也、白居易荔枝圖序、荔枝葉如桂、冬青花如橘、春榮實如丹、夏熟、朵如蒲桃、元人黃松瀑謝新荔枝詩、海國仙人剪絳霞、年年一朵到山家、此亦與茶萸之朵同、爾雅注、櫻桃每一朵不下二十顆、亦同、又山峰以衆稱、蓋亦比蓮瓣而言也。

泥、去聲、訓滯、詩家所用、猶言惱也、亦作泥、或作泥、楊升菴詞品云、俗謂柔言索物曰

舉す、其の義見る可きのみ、又元稹の美人に題すに「須臾に日は射る臙脂の頰、一朵の紅蘇靡て融せん」欲す、此れ猶ほ一顆のこゝし、盧綸の「茶萸一朵華簪に映す」、元稹の「萸房暗に綻ぶ紅珠の朵」、僧齊己の「菊に對して好し茶萸衆を把る」、伊に配す、此れ其簇々として相綴するを以て、花衆に比して之を稱するなり、白居易の荔枝圖序に、荔枝の葉は桂の如くにして冬青し、花は橘の如くにして春榮え、實は丹の如くにして夏熟し、朵は蒲桃の如し、元人黃松瀑の新荔枝を謝する詩に、「海國の仙人絳霞を剪り、年々一朵山家に到る」、此れ亦茶萸の朵と同じ、爾雅の注に、櫻桃は一朵毎に、二十顆を下らず、亦同じ、又山峰に、衆を以て稱す、蓋し亦蓮瓣に比して言ふなり。

泥は去聲、滯を訓す、詩家の用ふる所、猶ほ惱と言ふが如し、亦泥に作る、或は泥に作る、楊升菴の詞品に云ふ、俗に柔言、物を

泥諺所謂軟纏也。軟纏謂遺不去譯。追企麻土布。又譯阿麻逼屢。李白「晚來移彩仗行樂泥光輝」唐彥謙獨來成恨望不去泥。闕于杜甫「年年至日長爲客忽忽窮愁泥殺人」白居易「失卻少年無處覓泥他湖水欲何爲」竝阿麻逼屢也。又元稹悼亡顧「我無衣搜畫篋泥他沽酒拔金釵」白居易「今宵始覺房櫳冷坐索寒衣泥孟光猶賴洛中饒辭客時時詎我喚笙歌」月終齋滿誰開素須託奇章置一筵姚合欲泥山僧分屋住羞從野老借牛耕此譯伊自屢又譯捏但屢卽阿麻逼屢之甚也。

居然晉宋間語猶坐然也蓋不須動作容易自爾意。后稷詩云居然生子是其本也。

案むるを請ひて泥ミ曰ふ諺に謂はゆる軟纏なり、軟纏ミは、遺り去らしめざるを謂ふ、追企麻土布ミ譯す、又阿麻逼屢ミ譯す、李白の「晚來彩仗を移し、行樂して光輝に泥す」、唐彥謙の「獨り來りて恨望を成し、去らず闕于に泥す」、杜甫の「年年至日長く客ミ爲り、忽々窮愁人を泥殺す」ミ、白居易の「少年を失却して覓るに處無く、他の湖水に泥して何を爲さん」欲す」ミ、竝に阿麻逼屢なり、又た元稹の悼亡に「顧ふ我れ衣の畫篋に搜る無し、他に泥して酒を清ひ金釵を抜く」、白居易の「今宵始めて覺る房櫳の冷を、坐して寒衣を索めて孟光に泥す」、猶ほ賴に洛中辭客饒し、時々我に泥して笙歌を喚ぶ、「月終齋滿ち誰か素を開く、須らく奇章を託して一筵を置くべし」、姚合の山僧に泥し屋を分ち任せん」欲す、野老に従ひ牛を借りて耕すを羞つ、此れ伊自屢ミ譯し、又捏但屢ミ譯す、即ち阿麻逼屢の甚しきなり。

居然は、晉宋間の語にして、猶ほ坐然の如きなり、蓋、動作を須ひず、容易に自ら爾るの意、后稷の詩に云、「居然子を生じ」ミ、

莊子居然不免於患蓋自然相及之義賈
 誼過秦論豈世世賢哉其勢居然也耳言
 據四塞之固坐爲諸侯之雄也世說江山
 遼落居然有萬里之勢又安石居然可陵
 踐又衛洗馬居然有羸形又庾敬嘆衆人
 中居然獨立張協雜詩不見郢中歌居然
 能否別謝眺敬亭山隱淪旣已託靈異居
 然棲楊炯居然混玉石直置保松筠駱賓
 王居然同物化何處欲藏舟又相顧百齡
 皆有待居然萬化成應改杜甫居然成落
 落白首甘契濶他日憐才命居然屈壯圖
 雪濤詩話評杜詩讀之山川歷落居然在
 眼藝苑卮言子木雅士居然前輩風流皆
 訓坐自雖不中不遠矣

是れ其の本なり、莊子に、「居然患を免れず」三、蓋自然に相及ぶ
 の義なり、賈誼の過秦論に、世世々賢ならんや、其勢居然たるの
 み、四塞の固に據り、坐して諸侯の雄を爲るを言ふなり、世説
 に、江山遼落、居然として萬里の勢有り、又安石、居然として陵
 踐す可し、又衛洗馬居然として羸形有り、又庾敬嘆、衆人中に處
 り、居然獨立す、張協の雜詩に、「見すや郢中の歌を、居然能否
 別る」三、謝眺の敬亭山に、「隱淪旣已に託す、靈異居然として棲
 む」、楊炯の「居然玉石を混じ、直置松筠を保つ」、駱賓王の「居然
 物化を同し、何の處にか舟を藏せん」三欲す、又「相顧みれば
 百齡皆な待つ有り、居然萬化成な應に改むべし」、杜甫の居
 然落落を成し、白首契濶に甘んず、「他日才命を憐み、居然壯圖
 を屈す」、雪濤詩話に杜詩を評す、之を讀めば山川歷落、居然こ
 して眼に在り、藝苑卮言に、子木、雅士居然、前輩風流皆な坐
 自訓す、中らず、雖、遠からず。

詩用十二有三種、漢書郊祀志、黃帝時爲五城十二樓以候神人、應劭注云、崑崙玄圃有五城十二樓、仙人所常居、蘇頌車如流水、馬如龍、仙史高臺十二重、駱賓王、小堂綺帳三千戶、大道青樓十二重、本諸此也、十二欄、歇後語、齊武帝西洲曲、闌干十二曲、垂手明如玉、此其本也、梁武帝河中之水歌、咏莫愁云、頭上金釵十二行、足下絲履五文章、是謂頭插十二釵、爾、白樂天云、鍾乳三千兩、金釵十二行、以言聲伎之多、作十二重行、故又有九燭臺前十二妹之句、蓋轉用也、

瑯環記引謝氏詩源云、漢霍光園中鑿大池、植五色睡蓮、養鴛鴦三十六對、望之爛

詩に十二を用ふるに三種有り、漢書郊祀志に、黃帝の時に五城十二樓を爲り、以て神人を候す、應劭の注に云ふ、崑崙玄圃に五城十二樓有り、仙人の常に居る所、蘇頌の「車は流水の如く馬は龍の如し、仙史高臺十二重」、駱賓王の「小堂綺帳三千戶、大道青樓十二重」、諸を此に本づくなり、十二欄は、歇後の語なり、齊の武帝の西洲曲に、「闌干十二曲、手を垂る明玉の如し」と、此れ其の本なり、梁の武帝の河中之水歌に莫愁を咏して云ふ、「頭上の金釵十二行、足下の絲履五文章」と、是れ頭に十二釵を挿むを謂ふのみ、白樂天云ふ、「鍾乳三千兩、金釵十二行」と、以て聲伎の多き十二重の行を作すを言ふ、故に又「九燭臺前十二妹」の句有り、蓋、轉用なり。

瑯環記に、謝氏詩源を引きて云ふ、「漢の霍光の園中に大池を鑿ち、五色の睡蓮を植へ、鴛鴦三十六對を養ふ、之を望めば爛々し

若披錦故相逢行云、鶯鶯七十二、羅列自成行、謂六六雙雙也、輟耕錄云、詩多用七十二、不知何所祖、九成之博識、猶有此逗漏也、李于鱗詩、落日蒼茫秋不斷、青天七十二芙蓉、謂衡山七十二峰、是亦舉實數也、如孟東野蓋微歌、仙機軋軋飛鳳皇、花開七十有二行、楊維禎遊滄海歌、長梯上摘七十二朶之青菌、蓋、雖語本樂府、只舉其多而言之耳、蓋西土事物多稱七十二者、如封禪七十二家、神龜七十二鑽、稷下七十二先生、道家七十二福地等、皆非必實數、只言其多爾、

樂府、晉孫綽情人碧玉歌、碧玉破瓜時、郎爲情顛倒、感君不羞艷、廻身就郎抱、隨園

て錦を披くが若し、故に相逢行に云ふ「鶯鶯七十二、羅列して自ら行を成す」と、六々雙々を謂ふなり、輟耕錄に云ふ、詩に多く七十二を用ふ、何の祖とする所を知らずと、九成の博識にして猶ほ此の逗漏有り、李于鱗の詩に、「落日蒼茫秋斷えず、青天七十二の芙蓉」と、衡山の七十二峰を謂ふ、是れ亦實數を擧ぐるなり、孟東野の蓋微歌に、「仙機軋軋飛鳳皇、花は開く七十有二行」と、楊維禎の滄海に遊ぶ歌に、「長梯上、七十二朶の青菌を摘む」が如き、語、樂府に本づくも雖、只だ其の多きを擧げて之を言ふのみ、蓋、西土の事物七十二と稱する者多し、封禪七十二家、神龜七十二鑽、稷下七十二先生、道家七十二福地等の如き、皆な必しも實數に非ず、只だ其の多きを言ふのみ、

樂府、晉の孫綽の情人碧玉の歌に、「碧玉破瓜の時、郎は情の爲に顛倒す、君に感じて羞厭せず、身を廻らして郎に就きて抱か

詩話云、破瓜或解以爲月事初來如瓜破、則見紅潮者、非也、蓋將瓜字縱橫破之、成二八字、作十六歲解也、李羣玉贈馮姬詩、瓜字初分碧玉年、此其證矣、香祖筆記云、楊文公談苑載、呂洞賓謁張洎贈詩云、功成應在破瓜年、洎後以六十四卒、乃知破瓜者八八也、老少男女皆可稱破瓜、亦奇、余按、碧玉破瓜似謂破身故曰、時不然、下句竟作何解、又樂府歡好曲窈窕上頭歡、那得及破瓜、亦言求其元也、李商隱有柳枝詞、蓋商隱從昆讓山鄰家之女、因悅商隱燕臺詩、遂通其約、而愆期不果、後竟爲他人所有、詩中有云、嘉瓜引蔓長、碧玉冰寒葉、東陵雖五色、不忍值牙香、是用破瓜

る、隨園詩話に云ふ、破瓜、或は解して以て月事初めて來る、瓜の破るゝが如く、則ち紅潮を見るを爲す者は非なり、蓋瓜字を將て縱橫に之を破れば二八の字を成し、十六歳を作して解するなり、李群玉の馮姬に贈る詩に、「瓜字初めて分る碧玉の年」云、此其の證なり、香祖筆記に云、楊文公談苑に載す、呂洞賓、張洎に調し詩を贈りて云、「功の成る應に破瓜の年に在るべし」云、洎、後六十四を以て卒す、乃ち知る破瓜は八八なり、老少男女皆な破瓜を稱す可し、亦奇なり、余按するに碧玉の破瓜は破身を謂ふに似たり、故に時曰ふ、然らずんば下句竟に何の解を作さん、又樂府歡好曲に、窈窕上頭、歡那ぞ破瓜に及ぶを得ん、亦、其元を求むるを言ふなり、李商隱に柳枝の詞あり、蓋商隱の從昆讓山鄰家の女、商隱の燕臺の詩を悦ぶに因り、遂に其の約を通じ、而して期を愆りて果さず、後竟に他人の所有を爲る、詩中に云ふ有り、「嘉瓜蔓を引きて長し、碧玉寒葉を冰にす、東陵五色を雖、忍びず牙香に値ふ」云、是れ破瓜の事を用ひて新上頭を謂ふなり、板橋雜記に、初めて破瓜する者は之を梳

事謂新上頭也、板橋雜記初破瓜者謂之梳櫛亦其義也、但如段成式猶憐最小分瓜日、孫榮輕盈年在破瓜初、楊萬里山如西施破瓜年、只謂十六歲耳、清異錄劉鋹得波斯女、年破瓜、黑脂而慧黠善淫、號爲媚豬、亦是也、神庵談苑曰、或贊信玄像云、陷城摧陣破瓜年、稱之男子可笑、又深草元政詩題有曰題聖德太子破瓜像者、徂來大笑之、見閑散餘錄、此皆誠可笑矣、然稱丈夫六十四、据呂仙翁詩可也、

無何、無幾也、又無何事也、又無何故也、竝見漢書、此間詩人或用爲無奈替代、認矣、翟方進傳、居無何、注猶言無幾、謂少時也、杜審言詩、昔出諸侯靜、無何霸業全、白居易

撫之謂ふも、亦た其の義なり、但、段成式の「猶ほ憐む最小分瓜の日」、孫榮の「輕盈年は破瓜の初に在り」、楊萬里の「山は西施破瓜の年の如し」の如き、只だ十六歳を謂ふのみ、清異錄に、劉鋹、波斯の女を得たり、年破瓜なり、黑脂にして慧黠、善く淫す、號して媚豬と爲す、亦た是れなり、神庵談苑に曰、或ひも、信玄の像に贊して云、「城を陥れ陣を摧く破瓜の年」とも、之を男子に稱す笑ふ可し、又深草元政の詩題に、聖德太子破瓜の像に題すこ曰ふ者有り、徂來大いに之を笑ふも、閑散餘錄に見ゆ、此れ皆な誠に笑ふ可きなり、然れども丈夫六十四を稱す、呂仙翁の詩に据りて可なり。

無何は、幾くも無きなり、又何事も無きなり、又た何故も無きなり、竝に漢書に見ゆ、此の間の詩人、或は用ひて奈ともする無し、の替代と爲すは謬れり、翟方進傳に、居るこも無し、注に、猶幾も無しと言ふがこもきなり、少時を謂ふなりと、杜審言の詩に、「昔出づ諸侯靜、何も無く霸業全し」と、白居易の「何も無

易無何天寶大徵兵、戶有三丁點一丁、楊萬里、人生離合風前葉、聚首亡何復離羣、皆言居無幾也、袁盎傳、君能日飲無何注更無餘事也、東坡詩、名垂不朽終安用、日飲無何計亦良、又老守無何惟日飲將軍、競病自詩、鳴戴復古、逢人共作亡何飲、撥冗時觀未見書、竝用此事、范成大、尊前見在膏騰醉飯後無何爛漫眠、亦言閑暇優游無何一事也、金日磾傳、何羅無何從外入、注、猶云無故也、明皇平胡詩、雜虜忽猖狂、無何敢亂常、言無故而起兵也、張賁詩、仙侶無何訪蔡經、兩煩韶濩出形庭、言無故來臨、蓋喜其出於不意也、李商隱、舊隱無何別歸來、始更悲、鄭谷、才拙道仍孤、無

夜飲詩話卷之二

く天寶大に兵を徵す、戶に三丁有らば一丁を點す、楊萬里の「人生の離合は風前の葉、聚首何も亡く復た離羣」と、皆居ること幾も無きを言ふなり、袁盎傳に、君は能く日に飲み何もすること無し、注に、更に餘事無きなりと、東坡の詩に「名、不朽に垂るも終に安くに用ひん、日飲何する無く計亦良し」と、又「老守何する無く惟だ日に飲み、將軍競病自ら詩鳴」と、戴復古、「人に逢ふて共に何する亡く飲むを作す、冗を撥し時に未だ見ざる書を觀る」と、竝に此事を用ふ、范成大的「尊前見に在り膏騰さして酔ふ、飯後何する無く爛漫して眠る」と、亦閑暇優游何の一事無きを言ふなり、金日磾傳に、何羅何に無く外從り入ると、注に、猶は故へ無しと云ふがごとし、明皇の胡を平ぐる詩に「雜虜忽ち猖狂、何に無く敢て常を亂す」、故へ無くして兵を起すを言ふなり、張賁の詩に「仙侶何に無く蔡經を訪ひ、兩ら韶濩を煩はして形庭を出つ」と、故無く來り臨むを言ふ、蓋其不意に出づるを喜ぶなり、李商隱の「舊隱何に無く別れ、歸來始めて更に悲む」と、鄭谷の「才は拙に道仍孤なり、何に無く釣徒を捨つ」と、亦故無く郷を去るを言ふ、蓋、之を悔ゆるなり、淮南衛山王傳

何捨釣徒亦言無故去鄉蓋悔之也淮南
 衡山王傳王自處無何注無何罪也張祐
 詠史無何求善馬不算苦生民言無何罪
 而征伐也是可見無何絕無無奈之義矣
 其如無如與無奈同竝歇後語略何字也
 無奈童生知之其如無如則人率不知也
 杜詩其如儂侶稀其如蠶白休願況直道
 其如命平生不負神司空曙惆悵心徒壯
 無如得作翁張九齡更憐離下菊無如松
 上羅陸游無如梅作經年別聖賢自古無
 如命高叔嗣復有高堂宴無如伏枕心竝
 句脚加何字看蓋如何與何如不同如何
 如之何也何如比較以問之辭故無無何
 如之語乃易無奈以無何不成義矣但范

に、王自ら處る何無しに、注に、何の罪無きなり、張祐の詠史に、「何に無く善馬を求め、算せず生民を苦むを」、何の罪無く而して征伐るを言ふなり、是れ無何は絶えて奈する無しなすの義無きを見る可し。

其如無如は、無奈と同じ、竝に歇後の語、何の字を略するなり、無奈は、童生も之を知る、其如無如は、則ち人率ね知らざるなり、杜詩に、「其れ儂侶の稀なるを如せん」、其れ白を蠶みいん休むを如せん、願況の「直道其れ命を如せん、平生神に負かず」、司空曙の「惆悵心徒らに壯、如こもする無し」、張九齡の「更に憐む離下の菊、如こもする無し」、松上の羅陸游の「梅、經年の別を作すを如こもする無し」、聖賢古より命を如こもする無し、高叔嗣の「復た高堂の宴有り、如こもする無し伏枕の心」、竝に句脚に何の字を加へて看る、蓋如何は何如と同じからず、如何は、如之何なり、何如は、比較して以て問ふの辭、故に無何如の語無し、乃ち無奈に易ふるに無何を以てするは義を成さず、但、范成大の胡孫愁の詩に、「僕夫酸斷途の窮る

成大、胡孫愁詩、僕夫酸嘶、訴途窮、我亦付命、無何中、胡孫愁、閩中險阪之名、此似言付之無可奈何、殊爲可疑、或恐誤寫耳、或謂蓋無何有之鄉、言一切付自然、鑿矣、元人蕭南軒詩、清風明月故人識、有酒無魚良夜何、奇附殊甚、

梅莊詩語解、作有起義生義、與爲差異、故徘徊猶作漢宮看、何人不作月中看、不用爲字、余按、梁庾肩吾歲盡詩、梅花應可拆、情爲雪中看、陳陰鏗咏竹、欲見陵冬質、當爲雪中看、此竝其義、自別、言向雪中看已、但黃滔咏花、東風吹綻還吹落、明日誰爲今日看、僧貫休瓦研、應念研磨苦、莫爲瓦礫看、明陸容詩、吁嗟棟梁材、誤爲花草看、

を訴ふ、我も亦命の何ともする無きの中に付す、胡孫愁は閩中險阪の名、此れ之を奈何ともす可き無きに付す言ふに似たり、殊に疑ふ可き爲す、或は恐らくは誤寫のみ、或は謂ふ蓋、無何有の郷、一切を自然に付するを言ふ、鑿なり、元人蕭南軒の詩に、「清風明月故人識る、酒有りて魚無し良夜を何せん」と、奇附殊に甚し。

梅莊の詩語解に、作に起義生義有り、爲差異、故に徘徊して猶ほ漢宮の看を作す、「何人が月中の看を作さざらん」と、爲の字を用ひず、余按するに、梁の庾肩吾の歲盡の詩に、「梅花應に拆す可し、情ひて雪中の看を爲す」と、陳陰鏗、竹を咏するに、「冬を陵ぐの質を見ん、欲せば、當に雪中の看を爲す可し」と、此れ竝に其の義自ら別、雪中に向つて看るを言ふのみ、但、黃滔の花を咏するに、「東風吹き綻び還た吹き落さす、明日誰か今日の看を爲す」と、僧貫休の瓦研に、「應に念ふべし、研磨の苦、瓦礫の看を爲す莫れ」と、明の陸容の詩に、「吁嗟棟梁の材、誤て花草の看を爲す」と、是れ爲を以て作の字に替ふ、絶えて無

是以爲晉作字、絕無而僅有、未可一槩論也。

詩家每用滄洲、蓋取滄浪爲名、只稱江海之境、對朝市而言已、不必指仙島也、杜陽雜編載、隋大業中、元藏幾爲過海使、判官被風飄至一處、居人云、此乃滄浪洲、去中國數萬里、其洲方千里、花木常如春、人多不死、藏幾思歸洲人、製陵風舸以送之、旬日達于東萊、時已唐之貞元末、殆二百年矣、注家多引之、不考之過也、貞元、德宗年號、盛唐詩人焉得預用之、陸雲泰伯碑、滄洲遺跡、箕山辭位、南史袁粲傳、粲詩訪迹、雖中字、循寄是滄洲、蓋其志也、又張充傳、飛竿釣渚、濯足滄洲、北史西魏明帝貽

くして僅に有り、未だ一槩に論ず可からず。

詩家毎に滄洲を用ふ、蓋、滄浪を取り名を爲す、只だ江海の境を稱す、朝市に對して言ふのみ、必しも仙島を指さざるなり、杜陽雜編に載す、隋の大業中、元藏幾、過海使の判官を爲り、風に飄へされて一處に至る、居人云ふ、此れ乃ち滄浪洲にして、中國を去るこゝ數萬里、其の洲方千里、花木常に春の如く、人多く死せず、藏幾歸を思ふ、洲人陵風舸を製して之を送る、旬日ならず東萊に達す、時已に唐の貞元末にして、殆んど二百年なり、注家多く之を引く、考へざるの過なり、貞元は德宗の年號なり、盛唐の詩人焉んぞ預め之を用ふるを得ん、陸雲の泰伯の碑に、滄洲跡を遺れ、箕山位を辭す、南史袁粲傳に、粲の詩に、「迹を訪ふ中字、雖、循寄是滄洲」云、蓋、其志なり、又張充傳に、竿を釣渚に飛ばし、足を滄洲に濯ふ、北史に西魏の明帝、韋皇に貽る詩に、「瀕陽讓意遠く、滄洲去て歸らず」云、文選に、

韋實詩穎陽讓愈遠滄洲去不歸文選謝眺之宣城出新林浦詩既懽懷祿情復協滄洲趣柳惲贈吳均寒雲晦滄洲奔潮溢南浦是六朝間已用之皆謂湖海接逼之境觀其配箕山穎陽而言其義不尤明乎但柳詩只謂水鄉已李善文選注載揚雄檄靈賦黃公起於蒼洲蒼與滄異恐是別事非所引也李白燭照山水壁畫歌高堂粉壁圖蓬瀛燭前一見滄洲清既曰蓬瀛而復曰滄洲泛謂水雲之鄉非島名明矣觀山海圖詩如登赤城裏揭步滄洲畔亦謂海濱已江上吟興酣落筆搖五嶽詩成笑傲陵滄洲直指眼前烟波之境也壯心屈黃綬溢迹寄滄洲功成拂衣去搖曳滄

謝眺宣城に之き、新林浦に出る詩に、「既に懽ふ祿を懐ふの情、復協ふ滄洲の趣」ミ柳惲の吳均に贈る「寒雲滄洲に晦く、奔潮南浦に溢る」是れ六朝間已に之を用ひ、皆な湖海接逼の境を謂ふ、其の箕山穎陽に配して言ふを觀れば、其義尤も明らかならずや、但、柳の詩は只、水郷を謂ふのみ、李善文選の注に、揚雄の檄靈賦の黃公蒼洲に起るを載す、蒼、滄ミ異なり、恐らくは是れ別事、引く所に非ざるなり、李白の燭山水の壁畫を照す歌に、「高堂の粉壁蓬瀛を圖す、燭前一見すれば滄洲清し」、既に蓬瀛ミ曰ひ、而して復た滄洲ミ曰ふ、泛く水雲の郷を謂ふ、島名に非ざるや明なり、山海圖を觀る詩に、「赤城の裏に登るが如し、掲歩す滄洲の畔」ミ亦海濱を謂ふのみ、「江上吟興酣なり、筆を落して五嶽を搖かす」ミ詩成りて笑傲滄洲を陵ぐ「ミ、直に眼前烟波の境を指すなり、「壯心黃綬に屈し、溢迹滄洲に寄す」ミ功成り衣を拂つて去り、搖曳す滄洲の傍」ミ、皆江東の遊を謂ふなり、杜甫の曲江にて酒に對するに、「更情更に覺ゆ滄洲の遠きを、

洲傍、皆謂江東之遊也。杜甫曲江對酒、更情更覺滄洲遠、老大徒悲未拂衣、亦因水鄉遊望、感而思爲江湖散人也。夔州西閣作、懶心似江水、日夜向滄洲、見蜀江之水東流向湖海、感其欲歸中土之心、日夜無已時也。江漲詩、輕帆好去便、吾道付滄洲、亦言乘漲南下、放浪江湖也。劉少府畫山水障歌、聞君掃卻赤縣圖、乘興遺畫滄洲趣、言不圖中原物色、而畫江海風景也。題玄武禪師屋壁、起手便云、何年顧虎頭、滿壁畫滄洲、而通篇只言江海景趣、未嘗涉仙境事、未舉廬山、以其接九江也。僧皎然觀王右丞滄洲圖歌、亦專言江湖之景耳。王維秋夜獨坐作、吾生將白首、歲晏思滄

老大徒に悲みて未だ衣を拂はず」云、亦水郷の遊望に因り、感じて江湖の散人たらんことを思ふなり。夔州西閣の作に「懶心江水に似たり、日夜滄洲に向ふ」云、蜀江の水、東に流れ湖海に向ふを見て、其の中土に歸らんことを欲するの心、日夜已む時無きを感じるなり。江漲の詩に「輕帆好し去るに便なり、吾か道滄洲に付す」云、亦漲に乗じて南下し江湖に放浪するを言ふなり。劉少府の畫山水障の歌に「聞く君赤縣圖を掃却して、興に乗じ畫を遣る滄洲の趣」云、中原の物色を圖せずして、江海の風景を畫くを言ふなり。玄武禪師の屋壁に題する起手に便ち云ふ、「何れの年か顧虎頭、滿壁滄洲を畫く」云、而して通篇只、江海の景趣を言ひ、未だ嘗て仙境の事に涉らず、未だ廬山を擧ぐ、其の九江に接するを以てなり。僧皎然の王右丞滄洲の圖を觀る歌も、亦専ら江湖の景を言ふのみ。王維の秋燭坐の作に、「吾が生白首を將て、歲晏滄洲を思ふ」云、水雲の郷に歸隱せんことを欲するなり。崔三が密州に往き觀省するを送り、「魯連功未だ報ひず、且つ滄洲

洲欲歸隱水雲之鄉也送崔三往密州觀
 省魯連功未報且莫蹈滄洲直是東海之
 替代岑參宿殿給事別業君雖在青瑣心
 不忘滄洲反用中山公子牟語言身處朝
 廷心存江海亦用替代也終南東溪作興
 來從所適還欲向滄洲言隨溪水而下欲
 直至江湖也過王判官西津所居何必到
 清溪忽來見滄洲言如到江湖也送鄭興
 宗歸扶風半生滄洲意獨有青山知謂江
 湖隱逸之志送嚴維還江東且歸滄洲去
 相送青門時送李翥遊江外且尋滄洲路
 遙指吳雲端竝謂三吳水雲之鄉已夷堅
 志洞庭漁翁詩八十滄洲一老翁蘆花江
 上水連空儲光義漁父詞逆浪還極浦信

を踏む莫れと直に是れ東海の替代なり岑參の殿給事の別業
 に宿するに「君は青瑣に在り雖心は滄洲を忘れず」と中山
 公子牟の語を反用す身は朝廷に處り心は江海に存するを言
 ふ亦替代を用ふるなり終南東溪の作に「興來り適く所に從
 ひ還りて滄洲に向はん欲す」溪水に随つて下り直に江
 湖に至らん欲するを言ふなり王判官の西津の所居を過くる
 に「何ぞ必しも清溪に到らん忽ち來り滄洲を見る」と江湖に
 到るが如きを言ふなり鄭興宗の扶風に歸るを送るに「半生滄
 洲の意獨青山の知る有り」と江湖隱逸の志を謂ふ嚴維の江
 東に還るを送るに「且く滄洲に歸り去らん相送る青門の時」
 李翥が江外に遊ぶを送るに「且く滄洲の路を尋ね遙に指す吳
 雲の端」と竝に三吳水雲の郷を謂ふのみ夷堅志に洞庭漁翁
 の詩に「八十滄洲の一老翁蘆花江上水空に連る」と儲光義の
 漁父の詞に「浪に逆りて極浦に還り潮に信せて滄洲に下る」
 と陸龜蒙の「好し伴はん滄洲白鳥の羣」と韓偓の「滄洲何れの

潮下滄洲陸龜蒙好伴滄洲白鳥群韓偓
滄洲何處覓漁翁溫庭筠不向滄洲理釣
絲李中滄洲何必去垂綸許渾十年耕釣
憶滄洲竝言烟波釣徒耳劉長卿尤好用
滄洲集中凡三十許其餘諸家所用不遑
枚舉皆泛稱汗漫之境未嘗指仙島歷歷
可見也但李白我有紫霞想緬懷滄洲間
澹蕩滄洲雲飄飄紫霞想杜甫玄圃滄洲
莽空澗金節羽衣飄婀娜此則謂神仙事
然非直斥仙島亦泛言其縹緲之境耳清
人趙賓詩蓬萊君咫尺果否有滄洲直爲
仙島之名可謂鹵莽矣王元美云蘇鶻杜
陽編乃郭子橫洞冥王子年拾遺之類已
是豈可引證者哉

處にか漁翁を覓む」ミ、温庭筠の「滄洲に向つて釣絲を理せず」
ミ、李中の「滄洲何ぞ必ずしも去て綸を垂れん」ミ、許渾の「十年
耕釣して滄洲を憶ふ」ミ、竝に烟波の釣徒を言をのみ、劉長卿尤
も好んで滄洲を用ふ、集中凡そ三十許、其餘の諸家の用ふる
所、枚舉に遑めらず、皆泛く汗漫あせまの境を稱す、未だ嘗て仙島を指
さず、歴々見る可きなり、但だ李白の「我有紫霞の想有り、緬懷
す滄洲の間」「澹蕩滄洲の雲、飄飄紫霞の想」、杜甫の「玄圃滄洲
莽として空澗、金節羽衣飄として婀娜」ミ、此れは則ち神仙の
事を謂ふ、然れども直に仙島を斥すに非ず、亦泛く其縹緲の境
を言ふのみ、清人趙賓の詩に「蓬萊君咫尺、果して滄洲有りや
否や」ミ、直に仙島の名を爲す、鹵莽を謂ふ可し、王元美云ふ、蘇
鶻の杜陽編は、乃ち郭子横の洞冥、王子年の拾遺の類のみ、是れ
豈引證す可き者ならんや。

朱子亦好用滄洲、失志墮塵網、浩志屬滄洲、正爾滄洲趣、難忘魏闕心、永棄人間事、吾道付滄洲、齊君叛物變、廓落滄洲期、漸喜涼秋近、滄洲去有期、若了滄洲趣、無勞正眼看、皆言汗漫之遊耳、晚年自稱滄洲病叟、見題寫真詩落款、猶云、江湖散人也、陸放翁孤坐無聊、每思江湖之適、云、此身只合臥滄洲、亦謂其鄉越州山陰烟水之境已、

東方朔神異經云、東海滄浪之洲、生鹽木焉、洲多用作舟楫、其木方一寸、可載百許觔、縱石鏡之不能沒、此只記其木神異耳、不必蓬萊瀛洲之類也、杜陽雜編所謂滄洲、蓋因神異經傳會之爾、

朱子亦好んで滄洲を用ふ、志を失ひ塵網に墮ち、浩志滄洲に屬す、「正に爾り滄洲の趣、忘れ難し魏闕の心、永く人間の事を棄て、吾道滄洲に付す」、「齊君物變を詠ひ、廓落滄洲の期、漸く喜ぶ涼秋の近きを、滄洲去るに期有り」、「若し滄洲の趣を了せば、勞する無れ正眼に看るを」、「皆汗漫の遊を言ふのみ、晩年に自ら滄洲病叟と稱す、寫真に題する詩の落款に見ゆ、猶ほ江湖散人云云が、こし、陸放翁の孤坐無聊、毎に江湖の適を思ふに、云ふ、「此の身只だ合に滄洲に臥すべし」、亦其郷、越州山陰烟水の境を謂ふのみ。

東方朔の神異經に云ふ、東海滄浪の洲に鹽木を生ず、洲多く用ひて舟楫を作る、其木は方一寸、百許觔を載す可し、縱石之を鏡するも沒する能はず、此は只其の木の神異を記するのみ、必しも蓬萊瀛洲の類ならざるなり、杜陽雜編の謂はゆる滄洲は、蓋、神異經に因りて之を傳會するのみ。

朝廷貴官多以清稱、言其居清高而不諂、濁也。故司馬相如諫獵書、犯屬車之清塵、顏師古注、言清者尊貴之意也。然則風塵俗吏糞土雜官、敢用清遊清觀等語、潛妄甚矣。但清言清談、謂晉人清虛之譚、不在此例也。顏氏家訓、王褒地胄清華、才學優敏、南史鄧騭傳、騭同列、王晏既貴、雅步從容、問曰、王散騎復何故爾、晏先爲鹵常侍、轉員外散騎郎、此二職清華所不爲、故以此嘲之、北史齊陽休之爲吏部尙書、謂人曰、此官實是清華、但煩劇妨吾賞適、我邦之制、朝紳亞攝籙之家、官至三大臣者、稱清華家、蓋本諸此、唐詩貫珠、大寮之次置清華部、亦是也。魏略、沐竝曰、吾以材質

朝廷の貴官多く清を以て稱せらる、其の居の清高にして諂濁ならざるを言ふなり、故に司馬相如の諫獵書に、屬車の清塵を犯す、顏師古の注に、清と言ふは、尊貴の意なりと、然らば則ち風塵俗吏糞土雜官、敢て清遊清觀等の語を用ふるは、憚る甚し、但、清言清談は、晉人清虛の譚を謂ふ、此の例に在らず、顏氏家訓に、王褒、地胄清華、才學優敏、南史鄧騭傳に、騭、同列を僞る、王晏既に貴し、雅步從容として問ふて曰く、王散騎復た何の故に爾る、晏は先に鹵常侍たり、員外散騎郎に轉ず、此の二職は清華の爲さざる所、故に此を以て之を嘲る、北史に齊陽休之は吏部尙書を爲るや、人に謂て曰く、此官は實に是れ清華なり、但、煩劇にして吾賞適を妨ぐ、我邦の制、朝紳、攝籙の家に亞き、官、三大臣に至る者は、清華家を稱す、蓋、諸を此に本づく、唐詩貫珠に、大寮の次に清華部を置く、亦是れなり、魏略に、沐竝曰く、吾材質穉濁を以て清流を^或対す、吳志に、中庶子の官最

滓濁汗於清流、吳志中庶子官最清密晉
 書文苑傳、晉彼辭人、共超清貫、職官志、武
 帝甚重兵官、故軍校多選朝廷清望之士、
 齊王攸與山濤書、洗馬今之清選、宋書、荀
 伯子少好學、博覽經傳、而通率好戲遊、遊
 閭里、故失清塗、南史齊張融傳、亦有少負
 令譽、超越清級者、北史張仲瑀、銓削選格、
 排抑武人、不使預清品、唐書韋陟、門地豪華、
 早踐清列、陳鴻長恨歌傳、叔父昆弟皆
 列在清貫、杜陽雜編、舒元興猶子守謙、官
 歷秘書郎、元興爲相、許列清曹、唐國史樂
 官受賞不如多予之金、無令浼汚清秩、東
 軒筆錄、翰林清要謂之仙掖、皆謂官之高
 貴也、徐錯詩題、太傅相公與家兄梅花訓

も清密と、晉書文苑傳に、晉彼の辭人、共に清貫を越ゆと、職官
 志に、武帝甚だ兵官を重んず、故に軍校多くは朝廷清望の士を
 選ぶ、齊王攸、山濤に與ふる書に洗馬は今の清選と、宋書に、荀
 伯子少くして學を好み、經傳を博覽し、而して通率戲を好み、閭
 里に激遊す、故に清塗を失ふ、南史齊の張融傳に亦少くして令
 譽を負ひ、清級を超越する者有り、北史に、張仲瑀、選格を銓削
 し、武人を排抑し、清品に預らしめず、唐書に、韋陟は門地豪華
 にして、早く清列を踐む、陳鴻の長恨歌傳に、叔父昆弟皆な列し
 て清貫に在りと、杜陽雜編に、舒元興の猶子守謙、官、秘書郎を
 歷、元興、相と爲り、清曹に列するを許す、唐國史に、樂官、賞
 を受くるは、多く之に金を與ふるに如かず、清秩を浼汚せしむ
 る無れと、東軒筆錄に、翰林清要、之を仙掖と謂ふ、皆、官の高貴
 を謂ふなり、徐錯の詩の題に、太傅相公、家兄と梅花訓唱し、末
 篇に繼るを許さる、護んで清韻を奉じ、用ひて鈞私を感ず、伏し

唱許綬末篇誠奉清韻用感鈞私伏惟采
覽猶云尊韻也五雜俎其有賜清坐假顏
色者卽詔以爲國士之選謂得待相公也
沈佺期皇鑒清居遠天文睿獎濃蘇頌吏部
端清鑒丞郎肅紫機李白崢嶸丞相府清
切鳳皇池杜甫絕域長夏晚茲樓清宴同將
軍魏武之子孫於今爲庶爲清門杜牧十
載遠清裁幽懷未一論韓愈高議參造化
清文煥皇猷白居易早接清班登玉陛方
干歷任聖朝清峻地石貫五朝清顯冠公
卿皆青雲上貴人事也陳子昂方謁明天
子清宴奉良籌元結公車當魏闕天子垂
清問徐安貞書殿賜宴玉階鳴溜水清閣
引歸烟杜甫梓州九日酒闌卻憶十年事

て惟みるに采覽せよと猶ほ尊韻と云ふがこゝきなり五雜
俎に其の清坐を賜ひ顔色を假す者有り卽ち詔して以て國士
の選と爲す相公に待するを得るを謂ふなり沈佺期の「皇鑒
清は居遠く天文睿獎濃かなり」蘇頌の「吏部は清鑒を端し丞
郎は紫機を肅す」李白の「崢嶸たる丞相府清切たる鳳皇池」
杜甫の「絕域長夏の晚、茲の樓清宴同し」「將軍は魏武の子孫、
今に於て庶と爲り清門と爲る」杜牧の「十載清裁に遠ひ幽懷
未だ一たびも論ぜず」韓愈の「高議造化に參し清文皇猷に煥
たり」白居易の「早く清班に接し玉陛を登る」方干の「歷任す
聖朝清峻の地」石貫の「五朝の清顯公卿に冠たり」と皆、青雲
上の貴人の事なり陳子昂の「方に謁す明天子清宴良筵を奉
す」元結の「公車魏闕に當り天子清問を垂る」徐安貞の書殿
に宴を賜ふ「玉階溜水鳴り清閣歸烟を引く」杜甫の梓州九日
に「酒闌にして卻て憶ふ十年の事臨は斷の驪山清路の塵」錢

腸斷驢山路塵、錢起晴雪早朝、獨看積素凝清禁、已覺輕寒讓大陽、此則天子事也、一句中本自爲對偶、謂之自對體、亦曰當句對、就句對、方板中用活時用之、盧照鄰勞思又勞望、相見不相知、沈佺期喜氣迎、冤氣青衣報白衣、杜甫白狗黃牛峽朝雲暮雨時、王維緒圻將赤岸、繫汰復揚舡、李昌府八月三湘道、聞猿胃雨時、韓愈絳闕銀河曉、東風右掖春、劉禹錫三湘與百越、雨散又雲搖、靜勝朝還暮、幽觀白已玄、張喬北闕東堂路、千山萬水人、白居易爐溫先煖酒、手冷未梳頭、杜荀鶴新墳侵古道、白髮戀黃金、薛能曉角秋砧外、清雲白月初、姚合何功來此地、竊位已經年、徐鉉青衿空皓

起の晴雪早朝に、「獨り看る積素清禁を凝らし、已に覺ゆ輕寒大陽に讓る」を、此は則ち天子の事なり。

一句中本自ら對偶を爲す、之を自對體と謂ひ、亦た當句對、就句對と曰ふ、方板中に活を用ふる時に之を用ふ、盧照鄰の「思を勞し又望を勞し、相見て相知らず」、沈佺期の「喜氣冤氣を迎へ、青衣白衣に報ゆ」、杜甫の「白狗黃牛の峽、朝雲暮雨の時」、王維の「緒圻と赤岸と、汰を繫ぎ復た舡を揚ぐ」、李昌府の「八月三湘の道、猿を聞き雨を胃す時」、韓愈の「絳闕銀河の曉、東風右掖の春」、劉禹錫の「三湘と百越と、雨散じ又た雲搖ぐ」、「靜勝朝還た暮、幽觀白已に玄」、張喬の「北闕東堂の路、千山萬水の人」、白居易の「爐は温にして先つ酒を煖め、手は冷にして未だ頭を梳らず」、杜荀鶴の「新墳、古道を侵し、白髮、黃金を戀ふ」、薛能の「曉角秋砧の外、清雲白月の初」、姚合の「何の功か此の地に來り、位を竊み已に年を経たり」、徐鉉の「青衿空しく皓首、往事、前生

首往事似前生、僧齊己、船中江上景、晚泊
 早行時、自來還獨去、夏滿又秋殘、楚雪還
 吳樹、西江正北風、萬古千秋裏、青山明月
 中、杜審言、伐鼓撞鐘驚海上、新妝袂、服照
 江東、杜甫、小院回廊春寂寂、浴鳧飛鷺晚
 悠悠、桃花細逐楊花落、黃鳥時兼白鳥飛、
 楚宮臘送荆門水、白帝雲偷碧海春、去馬
 不如歸馬逸、千家今有百家存、楓林橘樹
 丹青合、複道重樓錦繡連、長年三老遙憐
 汝、揜柁開頭捷有神、古往今來皆涕淚、斷
 腸分手各風烟、王維、厭見千門萬戶、經過
 北里南鄰、城外青山如屋裏、東家流水入
 西鄰、劉長卿、白雲千里萬里、明月前溪後
 溪、白雲飛鳥去寂寞、吳山楚岫空崖巖、白

に似たり、僧齊己の「船中江上の景、晚に泊す早行の時」、「自
 ら來り還た獨り去る、夏は滿ち又秋は殘す」、「楚雪還た吳樹、西
 江正に北風」、「萬古千秋の裏、青山明月の中」、杜審言の「鼓を伐
 ち鐘を撞き海上を驚かし、新妝袂服江東を照す」、杜甫の「小院
 回廊春寂々、浴鳧飛鷺晚悠悠」、「桃花は細に楊花を逐ふて落ち、
 黃鳥は時に白鳥と飛ぶ」、「楚宮臘は送る荆門の水、白帝雲は偷
 む碧海の春」、「去馬は如かず歸馬の逸に、千家今百家の存する
 有り」、「楓林橘樹丹青合し、複道重樓錦繡連る」、「長年三老遙に
 汝を憐む、柁を揜し頭を開き捷にして神有り」、「古往今來皆涕
 淚、斷腸分手各、風烟」、「厭まで見る千門萬戶、經過す北
 里南鄰」、「城外の青山は屋裏の如く、東家の流水は西鄰に入る」、
 劉長卿の「白雲千里萬里、明月前溪後溪」、「白雲飛鳥去て寂寞、
 吳山楚岫空しく崖巖」を、白居易の「幸に幣す散秩閑居の日、

居易、幸陪散秩閑居日、好是登山臨水時、
 可憐荒壠窮泉骨、曾有驚天動地文、劉禹
 錫、空懷濟世安人術、不見男婚女嫁時、杜
 荀鶴、難與英雄論教化、卻思猿鳥共烟蘿、
 李羣玉、黃葉黃花古城路、秋風秋雨別家
 人、陸龜蒙、但說漱流竝枕石、不辭蟬腹與
 龜腸、李昭象、春酒夜基難放客、短籬疎竹
 不遮山、李商隱、風朝露夜陰晴裏、萬戶千
 門開閉時、花鬚柳眼各無賴、紫燕黃蜂俱有
 情、韓愈、莫憂世事兼身事、須著人間比夢
 間、權德輿、金章玉節鳴騶遠、白草黃榆出
 塞難、杜牧、牧羊驅馬雖戎服、白髮丹心盡
 漢臣、秦陵漢苑參差雪、北闕南山次第春、
 山墻谷壑依然在、弱吐強吞盡已空、戴叔

夜航詩話卷之二

好し是れ登山臨水の時、「憐む可し荒壠窮泉の骨、曾有驚天動地
 地の文有り」と、劉禹錫の「空しく懷ふ濟世安人の術、見ず男婚
 女嫁の時」と、杜荀鶴の「英雄に教化を論じ難し、卻て思ふ猿鳥
 と烟蘿を共にせん」と、李羣玉の「黄葉黄花古城の路、秋風秋雨
 家に別るゝ人」と、陸龜蒙の「但だ説く流に漱き竝に石に枕すと、
 辭せず蟬腹と龜腸」と、李昭象の「春酒夜基客を放ち難く、短
 籬疎竹山を遮らず」と、李商隱の「風朝露夜陰晴の裏、萬戶千門
 開閉の時」、「花鬚柳眼各、無賴、紫燕黃蜂俱に情有り」と、韓愈
 の「憂ふる莫れ世事と身事と、須らく著くべし人間は夢間に比
 す」と、權德輿の「金章玉節鳴騶遠く、白草黄榆出塞難し」と、杜
 牧の「羊を牧し馬を驅り戎服すも雖、白髮丹心盡く漢臣」、「秦陵
 漢苑參差の雪、北闕南山次第の春」、「山墻谷壑依然として在り、
 弱吐強吞盡く己に空し」、「戴叔倫の「己に憐る化城は樂界に非

儉已悟化城非樂界、不知今夕是何年、嚴
 維、木奴花、映桐廬、縣、青雀舟、隨白鷺、濤、李
 幼卿、不堪花落花開處、況是江南江北人、鄭
 谷、秋山晚水吟情遠、雪竹風松醉格高、韋
 莊、楚地不知秦地亂、南人空怪北人多、薛
 濤、朝朝暮暮陽臺下、爲雨爲雲楚國亡、羅
 隱、紫陌紅塵今恨別、九衢雙闕夜同遊、九
 衢雙闕擬何去、玉壘銅梁空舊遊、章碣、絳
 帳青衿同日貴、春蘭秋菊異時榮、石貫、鳳
 笙龍笛巡酒、紅樹碧山無限詩、馬戴、東谷
 笑言西谷響、下方雲雨上方晴、韓偓、朝雲
 暮雨會合、羅襪繡被逢迎、鶴舞鹿眠春草遠、
 山高水濶夕陽遲、徐夔、天暎天寒三月暮、
 溪南溪北兩村名、徐鉉、主憂臣辱誰非我、

す、知らず今夕は是れ何の年ぞ」ミ、嚴維の「木奴花は映す桐廬
 縣、青雀舟は隨ふ白鷺濤」ミ、李幼卿の「堪へず花落ち花開く處、
 況んや是れ江南江北の人」ミ、鄭谷の「秋山晚水吟情遠く、雪竹
 風松醉格高し」ミ、韋莊の「楚地は知らず秦地の亂を、南人は空
 しく性む北人の多きを」ミ、薛濤の「朝朝暮暮陽臺の下、雨ミ爲
 り雲ミ爲つて楚國亡ぶ」ミ、羅隱の「紫陌紅塵今別を恨む、九衢
 雙闕夜同じく遊ぶ」ミ、「九衢雙闕何去に擬す、玉壘銅梁空しく
 舊遊」ミ、章碣の「絳帳青衿同日に貴く、春蘭秋菊異時に榮ゆ」
 ミ、石貫の「鳳笙龍笛巡の酒、紅樹碧山無限の詩」ミ、馬戴の
 「東谷は笑言し西谷は響き、下方は雲雨上方は晴る」ミ、「韓偓の
 朝雲暮雨會合、羅襪繡被逢迎」ミ、「鶴は舞ひ鹿は眠り春草遠く、
 山は高く水は濶く夕陽遲し」ミ、徐夔の「天暎天寒三月の暮、溪
 南溪北兩村の名」ミ、徐鉉の「主は憂ひ臣は辱められ誰か我を非

曲突徙薪唯_レ有_レ君、村橋野店景無限、綠水
 晴天思欲_レ迷、魚玄機忽喜_レ扣_レ門、傳語至_レ爲
 隣、巷小房幽、呂崑不熱_レ不寒、神蕩蕩、東
 來西去氣綿綿、僧齊已無_レ窮、今日明朝事、
 有限生來死去人、南宗北祖皆如此、天上
 人間更問誰、僧貫休、明月清風宗炳社、夕
 陽秋色庾公樓、仗信輸誠方始是、執_レ俘折
 誠欲何爲、文經武緯包_レ三古、日角龍顏退_レ
 四夷、右歷舉前脩之例、學者可以取_レ準也、
 七言起手上四字、各自爲對、亦才調之所
 弄巧也、沈佺期、天長地濶嶺頭分、去國離
 家見_レ白雲、李嶠、蓬閣桃源兩地分、人間海
 上不_レ相聞、賈至、雪晴雲散北風寒、楚水吳
 山道路難、岑參、柳鞦鶯嬌花復殷、紅亭綠

夜航詩話卷之二

る、突を曲け薪を徙す唯、君有り、「村橋野店景限り無く、綠水
 晴天思ひ迷はん」欲す、「魚玄機の「忽ち喜ぶ門を扣き語を傳
 へて至る、爲めに憐む鄰巷小房の幽」、呂崑の「熱せず寒せず
 神蕩々、東來西去氣綿々」、僧齊己の「窮り無し今日明朝の事、
 限り有り生來死去の人」、「南宗北祖皆ふ此の如し、天上人間更
 に誰に問はん」、僧貫休の「明月清風宗炳の社、夕陽秋色庾公
 の樓」、「信に仗り誠を輸し方に始めて是、俘を執り誠を折り何
 を爲さん」欲す、「文經武緯三古を包み、日角龍顏四夷を退む」
 、「右、前脩の例を歴舉す、學者以て準を取る可きなり。

七言の起手、上の四字、各、自ら對を爲す、亦才調の巧を弄する
 所なり、沈佺期の「天は長く地は濶く嶺頭分れ、國を去り家を離
 れて白雲を見る」、李嶠の「蓬閣桃源兩地に分れ、人間海上相
 聞せず」、賈至の「雪は晴れ雲は散じて北風寒く、楚水吳山道
 路難し」、岑參の「柳鞦鶯嬌花復殷に、紅亭綠酒君が還るを送る」、

酒送君還風恬日暖薄春光戲蝶狂蜂亂
 入房杜甫竹寒沙碧浣花溪橋刺藤梢咫
 尺迷張謂銅柱珠崖道路難伏波橫海舊
 登壇張繼月落烏啼霜滿天江楓漁火對
 愁眠此皆出於自然故工而無痕強著意
 傲之失於破碎矣

同韻重疊成語雖語意俱不對只以疊韻
 取對亦詩律一法如盧懷真曠望迷平野
 潺湲俯冥澗杜甫叱離放紅蕊想像啣青
 蛾蔣防始愜倉箱望終無滅裂憂僧貫休
 三清徒妄想千載亦須臾李頎悵望青天
 鳴墜葉嶺岼枯柳宿寒鷗是也徘徊遷延
 廉纖紛紜連綿崢嶸逡巡因循依稀霏微
 陰森婆娑蕭條蒼茫倉皇龍鍾闌干凡此

「風は恬に日は暖かに春光を薄し、戲蝶狂蜂亂れて房に入る」ミ、
 杜甫の「竹寒く沙碧なり浣花溪、橋刺藤梢咫尺に迷ふ」ミ、張謂
 の「銅柱珠崖道路難く、伏波横海舊登壇」ミ、張繼の「月落ち烏啼
 いて霜、天に滿ち、江楓漁火愁眠に對す」ミ、此れ皆自然に出づ、
 故に工にして痕無し、強ひて意を著けて之を傲せば、破碎に失
 す。

同韻重疊成語、語意俱に對せず雖、只疊韻を以て對を取る、亦
 詩律の一法なり、盧懷真の「曠望平野に迷ひ、潺湲冥澗に俯す」
 ミ、杜甫の「叱離紅蕊を放つ、想像青蛾を啣む」ミ、蔣防の「始は
 倉箱の望に愜ひ、終に滅裂の憂ひ無し」ミ、僧貫休の「三清徒に
 妄想、千載亦須臾」ミ、李頎の「悵望青天墜葉鳴り、嶺岼枯柳寒鷗
 宿す」の如き是れなり、徘徊・遷延・廉纖・紛紜・連綿・崢嶸・逡
 巡・因循・依稀・霏微・陰森・婆娑・蕭條・蒼茫・倉皇・龍鍾・闌干、凡
 そ此の類の雙字は、皆な悵望・想像・妄想等の語に對す可きな

類雙字、皆可對、悵望想像妄想等語也、

中原對海內、天中對平地、葢藝苑雌黃所
謂蹉對之類也、楊炯、友愛光天下、恩波渙
後塵、李嶠、芳桂尊中酒、幽蘭下調歌、劉禹
錫、旌旗環水次、舟楫泛中流、韓翃、共列中
台貴、能齊物外心、李絳、渙汗中天發、殊私
海外存、晁冲之、胸中有邱壑、左手取山川、
裴漼、始見魚躍方成海、卽觀飛龍利在天、
崔興宗、未勝晏子江南橘、莫比潘家大谷
梨、徐商、萍聚只因今日浪、荻斜都爲夜來
風、白居易、榮華物外終須悟、老病傍人豈
得知、徐鉉、天邊雨露年年在上苑、芳華歲
歲新、右略舉示類例亦可以參變也、

虛實對、或謂輕重對亦避板活手段也、范

り。

中原は海内に對し、天中は平地に對す、葢、藝苑雌黃の謂はゆる
蹉對の類なり、楊炯の「友愛は天下に光り、恩波は後塵に渙し」、
李嶠の「芳桂尊中の酒、幽蘭下調の歌」、劉禹錫の「旌旗水次を環
り、舟楫中流に泛ぶ」、韓翃の「共に列す中台の貴、能く齊ふす物
外の心」、李絳の「渙汗中天に發し、殊私海外に存す」、晁中之の
「胸中に邱壑有り、左手に山川を取る」、裴漼の「始て見る魚躍り
て方に海を成し、卽ち觀る飛龍利天に在り」、崔興宗の「未だ勝
らず晏子江南の橘、比する莫し潘家大谷の梨」、徐商の「萍聚只
今日の浪に因り、荻斜都て夜來の風の爲めなり」、白居易の「榮
華物外終に須らく悟るべし、老病傍人豈知るを得ん」、徐鉉の
「天邊の雨露年々に在り、上苑の芳華歲々に新なり」と、右は略
ほ類例を舉示す、亦以て變に參す可きなり。

虛實對、或は輕重對と謂ふ、亦板を避くる活手段なり、范曄文の

晞文對牀夜話云、老杜詩、不知雲雨散、虛
 費短長吟、桑麻深雨露、燕雀半生成、風物
 悲遊子、登臨憶侍郎、句意適然、不覺其爲
 偏枯、然非法也、柳下惠則可、吾則不可、羅
 大經鶴林玉露云、杜陵詩、桑麻深雨露、燕
 雀半生成、陳后山詩、稷耕扶日月、起廢極
 吹噓、或謂虛實不對、殊不知生爲造成、爲
 化、吹爲陰噓、爲陽、氣勢力量與雨露日月
 字正相配也、二說或拘繫或穿鑿、齊固失之
 矣、楚亦未爲得也、方萬里瀛奎律髓云、桑
 麻深雨露、燕雀半生成、雨自對露、生自對
 成、是輕重各對之法、此說得之、蓋亦就句
 對之類、唐人多用之、詩家常例也、舉類錄
 于左、以備取準、云、沈佺期、二庭無歲月、百

對牀夜話に云、老杜の詩に「知らず雲雨散するを、虚しく費す短
 長の吟」、「桑麻雨露深く、燕雀半は生成す」、「風物は遊子を悲ま
 しめ、登臨して侍郎を憶ふ」、句意適然、其の偏枯たるを覺えず、
 然れども法に非ざるなり、柳下惠は則ち可なり、吾は則ち不可
 なり、羅大經の鶴林玉露に云、「杜陵の詩に、桑麻雨露深く、燕雀
 半は生成す」と、陳后山の詩に、「耕を饒めて日月を扶け、廢を起
 して吹噓を極む」と、或ひは虚實對せずと謂ふ、殊に知らず生を
 造る爲し、成を化る爲し、吹を陰と爲し、噓を陽と爲す、氣勢力
 量は雨露日月の字と、正に相配するなりと、二說或は拘繫、或は
 穿鑿、齊は固より之を失せり、楚も亦未だ得るを爲さざるなり、
 方萬里の瀛奎律髓に云ふ、「桑麻雨露深く、燕雀半は生成す」、雨
 は自ら露に對し、生は自ら成に對す、是れ輕重各對の法なりと、
 此の説之を得たり、蓋亦就句對の類にして唐人多く之を用ゆ、
 詩家の常例なり、類を舉げて左に錄し、以て取準に備ふと云ふ、
 沈佺期の「二庭歲月無く、百戰勳功有り」杜審言の「歲月行旅を

戰有勳功杜審言、歲月催行旅、恩榮變、苦辛、舊跡灰塵散、遺墳故老傳、變風須、愷悌、成化行、絃歌李白、六代帝王國、三吳佳麗城、路歷波濤去、家唯坐臥歸、杜甫、自驚衰謝力、不道棟梁材、天子多恩澤、蒼生轉寂寥、社稷堪流涕、安危在運籌、老被焚籠役、貧嗟出入勞、筋力交彫喪、飄零免戰兢、耕鑿安時論、衣冠與世同、已撥形骸累、眞爲爛漫深、王維、賴有山水趣、稍解別離情、岑參、雲沙萬里地、孤負一書生、終日見征戰、連年聞鼓鼙、二人來信宿、一縣醉衣冠、高適、跡與松喬合、心緣啓沃留、風塵經跋涉、搖落怨睽攜、地卽泉源久、人當汲引初、杜牧、青苔滿階砌、白鳥故遲留、千峰橫紫翠、

夜航詩話卷之二

催し、恩榮苦辛を變ず、「舊跡灰塵散し、遺墳故老傳ふ」、「風を變ず須らく愷悌なるべし、化を成し絃歌を行む」、李白の「六代帝王の國、三吳佳麗の城」、「路は波濤を歴て去り、家は唯だ坐臥して歸る」、杜甫の「自ら驚く衰謝の力、道はず棟梁の材」、「天子恩澤多く、蒼生轉た寂寥」、「社稷は流涕するに堪へたり、安危は運籌に在り」、「老いて焚籠に役せられ、貧には嗟く出入の勞を」、「筋力交、彫喪す、飄零戰兢を免る」、「耕鑿時論に安じ、衣冠世と同じ」、「已に形骸の累を撥し、眞に爛漫の深き爲る」、王維の「賴に山水の趣有り、稍解く別離の情」、岑參の「雲沙萬里の地、孤負す一書生」、「終日征戰を見る、連年鼓鼙を聞く」、「二人來り信宿し、一縣衣冠に酔ふ」、高適の「跡は松喬と合ひ、心は啓沃に緣りて留る」、「風塵跋涉を経、搖落睽攜を怨む」、「地は卽ち泉源久しく、人は當る汲引の初め」、杜牧の「青苔階砌に滿ち、白鳥故らに遲留す」、千峰は、紫翠に横はり、雙闕園干に凭る、「劉禹錫の「變化言下に生し、蓬瀛眼前に落つ」、「運甓荆楚を

雙闕凭闌干、劉禹錫變化生言下、蓬瀛落
眼前、迢迢過荆楚、流落感涼溫、瑞呈霄漢
外、興入笑言間、薛能藏山難測度、暗水自
波瀾、皇甫冉閨歲風霜晚、山田收穫遲、劉
得仁、夕陽投草木、遠水映蒼茫、曹松、離鄉
俱少壯、到積滅肌膚、白居易提攜勞氣力、
吹箴不飛揚、杜甫、徒將遲暮供衰病、未、有
涓埃答聖朝、春來準擬開懷久、老去親知
見面稀、推轂幾年惟鎮靜、雙裾終日盛、文
僊、盤渦鷺浴底心性、獨樹花發自分明、紫
氣闌臨天地壯、黃金臺貯俊賢多、韋應物、
府縣同趨昨日事、升沉不改故人情、劉滄、
匹馬東西何處客、孤城楊柳晚來蟬、方干、
精靈消散歸寥廓、功業留傳在誌銘、帆勢

過ぎ、流落涼溫を感ず、「瑞は早す霄漢の外、興は入る笑言の
間」、薛能の「藏山測度し難く、暗水自ら波瀾」、皇甫冉の「閨歲風
霜晚く、山田收穫遅し」、劉得仁の「夕陽草木に投じ、遠水蒼茫に
映す」、曹松の「郷を離るゝ俱に少壯、積に到り肌膚を滅す」、白
居易の「提攜氣力を勞し、吹箴飛揚せず」、杜甫の「徒に遲暮を將
つて衰病に供し、未だ涓埃の聖朝に答ふる有らず」、「春來りて
懷を開くを準擬する久し、老い去りて親ら知る面を見る稀なる
を」、「推轂幾年惟、鎮靜、雙裾終日文僊盛なり」、「盤渦鷺は浴す
底心の性、獨樹花は發いて自ら分明」、「紫氣闌は天地に臨んで
壯に、黃金臺は俊賢を貯ふるこゝ多し」、韋應物の「府縣同じく
趨る昨日の事、升沉改めず故人の情」、劉滄の「匹馬東西何の處
の客ぞ、孤城楊柳晚來の蟬」、方干の「精靈は消散して寥廓に歸
し、功業は留傳して誌銘に在り」、「帆勢落斜浦浪に依り、鐘聲
斷續滄茫に在り」、劉禹錫の「一たび分襟して自り歲月多し、相
逢ふて滿眼是れ蓬瀛」、許渾の「詞客風に倚り暗淡を吟じ、使君

落斜依浦瀝鐘聲斷續在滄茫劉禹錫、一
 自分襟多歲月相逢滿眼是淒涼許渾、詞
 客倚風吟暗淡使君回馬濕旌旗趙嘏、徒
 知六國從斤斧莫有群儒定是非陸龜蒙、
 一代交遊非不貴五湖風月合教貧李羣
 玉、久向飢寒拋弟妹、每因時節憶團圓、羅
 隨時來天地皆同力、運去英雄不自由、杜
 荀鶴、在客易爲銷歲月、到家難住似經過、
 李商隱、飲啄斷年同鶴儉、風流終日看人
 爭、宋明諸家用此法尤多、不可勝舉也、
 楊萬里、夏夜獨酌竹風秋、九夏溪月晝三
 更、此以秋晝字爲虛活用者、與李昂英、瀑
 勢雷虛壑、松聲浪半空、同一句法、葛原詩
 話以爲與五月秋同法、如其說、則秋熱如

は馬を回して旌旗を濕す、趙嘏の「徒に知る六國斤斧に従ひ、
 羣儒の是非を定むる有る莫し」、陸龜蒙の「一代の交遊貴から
 ざるに非ず、五湖の風月合に貧ならしむべし」、李羣玉の「久し
 く飢寒に向つて弟妹を抛ち、毎に時節に因りて團圓を憶ふ」、羅
 隱の「時來りて天地皆な力を同じくし、運去りて英雄自由なら
 ず」、杜荀鶴の「客に在りて爲し易し歲月を銷するを、家に到り
 て住の難し經過に似たり」、李商隱の「飲啄斷年鶴儉を同じく
 し、風流終日人争を看る」も、宋明の諸家此の法を用ふる尤も多
 し、舉ぐるに勝ふ可らざるなり。

楊萬里の夏夜獨酌に「竹風九夏を秋にし、溪月三更を晝にす」
 も、此れ秋晝の字を以て虚爲し活用する者なり、李昂英の「瀑
 勢は虚壑を雷にし、松聲は半空を浪にす」も同一の句法なり、葛
 原詩話に以て五月の秋も同法を爲す、其の説の如くんば、則ち

夏晝暗如夜也。果成何義耶。六如擬作有云、歌呼煖熱冬三伏、雪月清妍晝二更、上句不成語、若強作冬溫之義、則下句爲晝暗如夜之義、且詩法自有恰好文字、必非三更不可、強叶聲律、容易那移、亦粗工之妄也。

杜甫、子能渠細石、吾亦沼清泉、白居易、不覺白雙鬢、徒言朱兩轡、手戴非吾事、腰鎌且發剛、李洞、肩囊尋省寺、袖軸徧公卿、朱弁、松皮爲菜、詩便堪奴、荀歛、詎肯友芝蘭、孫伯溫、麻姑山瀑布、雷震、白晝間、冰雪詩人胸、此皆活用實字、又玄宗、節變雲初夏、時移氣尙春、杜審言、雲霞出海曙、梅柳度江春、杜甫、晨鐘雲岸濕、勝地石堂烟、韓維、

秋熱は夏の如く、晝暗は夜の如きなり、果して何の義を成すや、六如の擬作に云ふ有り、「歌呼煖熱冬三伏、雪月清妍晝二更」と、上句語を成さず、若し強ひて冬溫の義を作さば、則ち下句は晝暗くして夜の如しの義を爲る、且つ詩法自ら恰好の文字有り、必ず三更に非ずんば不可なり、強ひて聲律を叶へ、容易に那移するこ、亦粗工の妄なり。

杜甫の「子能渠細石を渠にす、吾も亦清泉を沼にす」、白居易の「鬢へず雙鬢を白にし、徒らに言ふ兩轡を朱にす」と、「戴を手にするは吾事に非ず、鎌を腰にし且らく剛を發す」、李洞の「囊を肩にして省寺を尋ね、軸を袖にし公卿に徧くす」、朱弁の「松皮菜を爲すの詩に、便ち荀歛を奴にするに堪へたり、詎ぞ肯て芝蘭を友とせん」、孫伯溫の「麻姑山瀑布に、白晝の間を雷懸にし、詩人の胸を冰雪にす」と、此れ皆實字を活用す、又玄宗の「節は變じて雲は初夏、時は移りて氣尙春なり」と、杜審言の「雲霞海を出でて曙ひ、梅柳江を度りて春なり」、杜甫の「晨鐘雲岸濕ひ、勝地、石堂烟る」、韓維の「凍水晴て初めて澄だち、荒城晚に

凍水晴初浪、荒城晚自烟、方干、素琴醉去
 經宵枕、衰髮寒來向、日梳、楊萬里、烟雲慘
 澹天將雪、風日荒寒梅未花、句脚字亦皆
 活用、與楚辭洞庭波兮木葉下同法、

韻脚若三平相連、對句亦疊三仄以應之、
 唐詩拗格中往往有之、是鶴膝病之尤者、
 變體中變體耳、故非拗體者未嘗見之也、
 蓋古人造語適到、因以連用、本出於不得
 已、後人遂立以爲格、正體謹嚴中犯之妄
 也、夫大醇小疵、差可耳、散材多節、何所取
 哉、凡名賢高作、或不拘繩墨、如拗體出韻
 等變格、以瑕不掩瑜、不棄焉、故柳下惠乃
 可、學之則不可、慎勿藉爲口實也、

律詩對句仄脚、已挾平者、韻句第五

自ら烟る、方干の「素琴酔ひ去つて宵を經て枕し、衰髮寒來り
 て日に向つて梳る」、楊萬里の「烟雲慘澹して天將に雪ならん
 ます、風日荒寒梅未た花さかす」、句脚の字亦皆活用す、楚辭
 の「洞庭波だちて木葉下る」も同法なり。

韻脚若し三平相連らば、對句も亦三仄を疊して以て之に應ず、
 唐詩の拗格中に往々之れ有り、是れ鶴膝病の尤なる者にして、
 變體中の變體のみ、故に拗體に非ざる者未だ嘗て之を見ざるな
 り、蓋、古人造語適到、因て以て連用す、本、已むを得ざるに出
 づ、後人遂に立てて以て格と爲す、正體謹嚴の中に之を犯すは
 妄なり、夫れ大醇にして小疵ならば、差や可なるのみ、散材節多
 きは何の取る所ぞや、凡そ名賢の高作、或は繩墨に拘らず、拗
 體出韻等の變格の如き、瑕の瑜を掩はざるを以て、棄せず、故
 に柳下惠は乃ち可なり、之を學ぶは則ち不可なり、慎んで藉て
 口實と爲すこと勿れ。

律詩對句の仄脚、已を得ずして挾平にする者は、韻句第五字は、

字必用平聲以應之、唐詩皆然、今人多昧乎此、不亦妄乎、

藤納言爲家誨學國雅者曰、凡製歌須如構重塔、言先營自下也、蓋一篇精彩全萃於落句、起手則點景耳、故倒行而逆施之也、詩家作絕句亦須依是法、先就後二句、經始述其主意、預了結局、然後回筆還及起處、裝綴襯帖以成章、則首尾相擊、局勢有餘矣、不然其意盡發端、而未稍索、然每苦不足、貂續支吾不勝、蛇足矣、楊仲弘曰、絕句以第三句爲主、而第四句發之、是實初學要訣、必先自第三句起工、而結句乃從此生、而韻定、上半因起韻填詞爲落語、作引爾、雖唐賢之作、蓋亦率然也、

必ず平聲を用ひて以て之に應ず、唐詩皆然り、今の人多く此に味し、亦妄ならずや。

藤納言爲家、國雅を學ぶ者に誨へて曰く、凡そ歌を製するは、須らく重塔を構ふが如くなるべし、先づ營するに下よりのを言ふなり、蓋、一篇の精彩は全く落句に萃る、起手は則ち點景のみ、故に之を倒行して逆施す、詩家の絶句を作る、亦須らく是法に依るべし、先づ後の二句に就いて經始し、其の主意を述べ、預め結局を了して、然る後に筆を回らし、遡りて起處に及び、裝綴襯帖し、以て章を成さば、則ち首尾相擊ち、局勢餘り有り、然らずんば其の意發端に盡きて、未稍、索然として毎に足らざるを苦しむ、貂續支吾し、蛇足に勝へず、楊仲弘曰く、絶句は第三句を以て主と爲し、而して第四句之を發す、是れ實に初學の要訣なり、必ず先づ第三句より工を起し、而して結句は乃ちこれより生ず、而して韻定り、上半因て韻を起し、詞を填めて、落語と爲し、引を作すのみ、唐賢の作も雖、蓋亦率ね然り。

宇士新曰、名世之文不在多、而多則傳不廣、傳不廣、難保不朽、精有數卷、斯足矣、刻詩亦宜爾也、黃魯直晚自刊定其詩、止三百八篇、徐昌國自選、廸功集亦止三百餘首、蓋百十選一、以傳諸世、昔人自愛其名、如此、歐陽公所謂怕後生笑也、唐人咏蜀葵花云、能共牡丹爭幾許、被人嫌處只緣多、夫務精不務多、何但兵而已哉、

明葛震甫稱徐巢友詩曰、不多作、不苟作、不爲應酬之作、又華聞脩自叙其集曰、吾不取一時之好、冀千百年後有一人知我、千百帙中取其一帙、千百篇中存其一篇、而吾二十餘年心血、或藉此一帙一篇以傳、亮哉斯言矣、

宇士新曰、名世の文は多きに在らず、而して多ければ則ち傳はるること廣からず、傳はるること廣からずんば、不朽を保ち難し、精、數卷有らば斯れ足れり、詩を刻するも亦宜しく爾る可し、黃魯直に自ら、其の詩を刊定す、止た三百八篇のみ、徐昌國自ら廸功集を選ぶ、亦止た三百首のみ、蓋、百十に一を選び、以て諸世に傳ふ、昔人自ら其名を愛する此の如し、歐陽公の謂はゆる後生の笑を怕るなり、唐人、蜀葵花を咏じて云ふ、「能く牡丹と共に争ふ幾許ぞ、人に嫌はる、處只多きに緣るに、夫れ精を務めて多きを務めざる、何ぞ但に兵のみならんや。」

明の葛震甫、徐巢友の詩を稱して曰く、多く作らず、苟も作らず、應酬の作を爲さず、又、華聞脩、自ら其集に叙して曰、吾れ一時の好を取らず、千百年の後に一人の我を知るもの有らんことを冀ふ、千百帙の中に其一帙を取り、千百篇の中に其一篇を存す、而して吾が二十餘年の心血、或は此の一帙一篇を藉りて以て傳ふに、亮なるかな斯の言や。

伊藤蘭嶼雖好作詩、未嘗留案、人或言其可惜、曰、苟足以傳者、人其舍諸、否者、祇自累耳、卽此語足不朽矣、不翅唐山人詩瓢也、

章莊詩曰、泉布先生老漸慳、嘆老戒之在欲也、朝野僉載、章莊性儉、數米而炊、秤薪而爨、少一櫛而覺之、一子八歲而卒、妻斂薪以時服、莊剝取以故席、裹尸殮訖、擊其席而歸、其憶念也、嗚咽不自勝、唯慳吝耳、是其於阿堵物、不唯老慳、夙習乃爾、以先生稱、固其宜也、

好自高者、正其不高之弊、俗眼不脫、故作清態、所謂閉目不窺己、是一種公案、達人隨遇而安、悠然忘懷、無境不適也、胡孝轅癸籤曰、章莊靜極、卻嫌流水鬧、閑多翻笑、

伊藤蘭嶼好んで詩を作るに雖、未だ嘗て案を留めず、人或は其惜む可きを言ふ、曰く、苟も以て傳ふるに足らば、人其れ諸を捨てんや、否らざれば、祇に自ら累はすのみ、卽ち此の語不朽に足る、翅に唐山人の詩瓢のみならずなるなり。

章莊の詩に曰く、「泉布先生老いて漸く慳なり」と、老いては之を戒むる欲に在るを嘆ずるなり、朝野僉載に、章莊、性儉に、米を數へて炊き、薪を秤りて爨き、一櫛少ければ而ち之を覺る、一子八歳にして卒す、妻斂するに時服を以てす、莊剝取し、故席を以て尸を裹み、殮し訖り其席を擊けて歸る、其憶念するや、嗚咽して自ら勝へず、唯慳吝なるのみ、是れ其の阿堵物に於て、唯に老慳なるのみならず、夙習乃ち爾り、先生を以て稱す、固より其れ宜しきなり。

好んで自ら高くする者は、正に其の高からざるの弊なり、俗眼不脱せず、故に清態を作す、謂はゆる目を閉ぢて窺はざるのみ、是れ一種の公案、達人は遇に隨ひて安んじ、悠然として懷に忘れ、境さして適せざるは無し、胡孝轅癸籤に曰く、章莊の「靜極つて却て嫌ふ流水の鬧、閑多くして翻つて笑ふ野雲の忙」と、老杜

野雲忙、本于老杜之水流心不競、雲在意俱遲、但多著一嫌字、笑字、覺非真閑、真靜耳、此誠中竅矣、僧肇有言曰、知惱非惱、則惱亦淨、以淨爲淨、則淨亦惱、譏自矜其達、非真達也。

菊池五山言六如上人、詩才奇警、寔方外一敵國、然聞其爲人、矜情作態、面目可憎、故吾不欲見之、恐十年情戀、一朝灰冷矣、嘗被皆川筠齋勸一往候之、門下以疾辭、五山終以不見爲幸、云昔唐宰相鄭畋之女、覽羅隱詩、諷誦不已、畋疑有慕才意、隱貌寢陋、女一日隔簾見之、自是絕不詠其詩、五山於六如其類於斯歟、然此弊不獨六如、率京僧之常態、若令生見蕉中和尙、

の「水は流れて心競はず、雲は在り欲俱に遲し」に本づくなり、但、多く一の嫌の字、笑の字を著け、真閑真靜に、非ざるを覺ゆるのみ、此れ誠に蔽に中れり、僧肇言ふ有り曰く、惱の惱に非ざるを知れば、則ち惱も亦淨、淨を以て淨と爲さば、則ち淨も亦惱と、自ら其の達に矜るは眞達に非ざるを諷るなり。

菊池五山言ふ、六如上人は詩才奇警にして、寔に方外の一敵國なり、然れども其の人を爲りを聞くに、情に矜り、態を作し、面目憎む可しと、故に吾れ之を見るを欲せず、恐らくは十年の情戀、一朝に灰冷せん、嘗て皆川筠齋に勸められ、一たび往て之を候す、門下疾を以て辭す、五山終に見ざるを以て幸と爲す、云ふ、昔、唐の宰相鄭畋の女、羅隱の詩を覽て諷誦して已まず、畋、才を慕ふの意有るかと疑ふ、隱、貌、寢陋なり、女一日簾を隔て、之を見る、是れより絶えて其詩を詠せず、五山の六如に於ける、其れ斯に類するか、然れども此の弊は獨り六如のみなら

其必嘔酸水三斗矣、

鄭谷云詩無僧字格還卑、又云道著訪僧心且閑、其愛之深矣、然又云愛僧不愛紫衣僧、蓋貴僧必俗、古今一轍也、

六如好聲伎、故其詩言酒婦人不一而足、殊失衲子本色、殆與俗同科、錢虞山論僧慧秀詩云、昔人言僧詩忌蔬筍氣、如秀道人者、正惜其無蔬筍氣耳、是詩僧要調也、侯景數梁太子吐言止於輕薄、賦詠不出桑中、況於沙門乎、

鍾伯敬云、僧詩有僧詩氣習、僧而必不作僧詩、便有不作僧詩氣習、似是百年前爲萬菴、大潮等道、江北海云、僧詩不可有香火氣、又不可無香火氣、無則害德、有則害

ず、率ね京僧の常態なり、若し生きて蕉中和尙を見しめば、其れ必ず酸水三斗を嘔かん。

鄭谷云「詩に僧の字無くんば格還て卑し」、又云「僧を訪ふを道著すれば心且つ閑なり」云、其の之を愛する深し、然れども又云ふ「僧を愛して愛せず紫衣の僧」云、蓋、貴僧は必ず俗、古今一轍なり。

六如、聲伎を好む、故に其の詩に酒婦人を言ふ、一にして足らず、殊に衲子の本色を失す、殆んど俗と科を同うす、錢虞山、僧慧秀の詩を論じて云、昔人言ふ、僧の詩は蔬筍の氣を忌む、秀道人の如き者は、正に其蔬筍の氣無きを惜むのみ、是れ詩僧の要調なり、侯景、梁太子を數む、言を吐く輕薄に止る、賦詠、桑中を出でず、況んや沙門に於てをや。

鍾伯敬云、僧の詩には僧の詩の氣習有り、僧にして必ず僧の詩を作らずんば、便ち僧の詩を作らざる氣習有り、是れ百年前に、萬菴、大潮等の爲めに道ふに似たり、江北海云、僧の詩に香火の氣有る可からず、又た香火の氣無かる可からず、無けれ

詩簡在有意無意間、真至論也。

ば則ち徳を害し、有らば則ち詩を害す、簡ぶは有意無意の間に在りて、真に至論なり。

317

夜航詩話卷之二終

夜航詩話卷之二

夜航詩話卷之三

伊勢津阪孝緯君裕著

男 達 有 功 按

毛詩出其東門有女如雲東門之池彼美淑姬東門之楊昏以爲期孟子雖東家之牆樓其處子宋玉好色賦臣里之美者莫如臣東家之女古樂府孔雀東南飛東家有賢女自名爲羅敷皆言女子之事必稱東是字法蓋東字於春有情也唐詩用方位字如茨菰葉爛別西灣滿天風雨下西樓只今唯有西江月一曲長歌楚水西沈香亭北倚欄于楚王宮北正黃昏亦皆不

荷

毛詩に、「其の東門を出づれば、女有り雲の如し、東門の池、彼の美なる淑姬、東門の楊、昏以て期を爲す」と、孟子に東家の牆を踰え、其處子を擧ぐ、宋玉の好色賦に、臣の里の美なる者は、臣が東家の女に如くは莫しと、古樂府に、孔雀東南に飛ぶ、東家に賢女あり、自ら名つけて羅敷を爲す、皆女子の事を言ふに、必ず東を稱す、是れ字法なり、蓋、東の字、春に於て情あり、唐詩に方位の字を用ふ、「茨菰葉爛れて西灣に別る」、「滿天の風雨西樓を下る」、「只、今唯、西江の月のみ有り」、「一曲の長歌楚水の西」、「沈香亭北欄子に倚る」、「楚王宮北正に黃昏」の如き亦皆荷もせず。

西臆謂婦人寢室、如李義山寄北詩、何當共剪西臆燭、卻話巴山夜雨時、趙德麟妻詩、晚雲帶雨歸飛急、去作西臆一夜愁、其義可見、已、梅鼎祚春詞、海棠殘月照人低、枕上關山路欲迷、生怕啼鶯驚曉夢、垂楊不種畫欄西、妙在西字、畫龍點睛手段、祇南海明詩、但評曰、畫欄西、只謂軒前西字、趁韻耳、三浦梅園詩、轍亦云、甚矣其負良工苦心也。

服子遷寄懷源京國、蕭條白髮歲華流、今日論心不可求、剪燭西臆君記否、殷勤一夜說千秋、是若宿內人房中者、豈不太恃哉、恐後學襲謬、故爲拈出之。

杜詩麒麟不動爐煙上、言大明宮朝儀、爐

西臆は婦人の寢室を謂ふ、李義山の北に寄する詩に「何か當に共に西臆の燭を剪りて、却て巴山の夜雨を話するの時なるべき」、趙德麟の妻の詩に「晚雲雨を帯び歸り飛ぶ急に、去て西臆一夜の愁を作す」の如き、其の義見る可きのみ、梅鼎祚の春詞に「海棠殘月人を照して低く、枕上關山路迷はんこ欲す、生怕す啼鶯曉夢を驚かす、垂楊は種えず畫欄の西」、妙は西の字に在り、畫龍に睛を點するの手段なり、祇南海の明詩但評に曰、畫欄の西は只、軒前を謂ふ、西の字は韻を趁ふのみ、三浦梅園の詩轍にも亦云ふ、甚しいかな、其の良工の苦心に負くや。

服子遷の懷を源京國に寄するに、「蕭條白髮歲華流る、今日心を論ぜん」とするも求む可からず、燭を西臆に剪る君記するや否や、殷勤一夜千秋を説くは、是れ内人の房中に宿する者の若し、豈に太だ恃らずや、後學の謬を襲はんことを恐る、故に爲に、之を拈出す。

杜詩に「麒麟動かす爐煙の上」、大明宮の朝儀を言ふ、爐は元

元不動、不須言而特曰「不動者、言其勢殆欲活動而帖然能不動也」王建十五夜詩「冷露無聲濕桂華、亦癡想得妙、蓋露之大下、疑於有聲、而不知何間而下也、清人高文良、風裏銀河似有聲、翻用陸放翁銀河無聲接地流、殊使人爽然、可謂出蓋矣、杜少陵曰「良工心獨苦、又曰「能事不受人促迫、求詩書者不知此義、刻期追索、有如違負、真人役也、不如署門以塞之耳、六十一歳曰華甲、蓋拆華字爲六十一、猶四十八曰乘字年也、何遜夢井生榮事、見勵志楊洪傳注、西遊記第二十回、問年壽幾何、道癡長六十一、行者道、好好華甲重逢矣、范石湖丙午新正詩、祝我剎周華甲子、謝人深勸玉東

こ動かす、言を須ひず、而して特に動かさず、曰ふは、其勢殆んど活動せんことを欲し、而して帖然として能く動かざるを言ふなり、王建の十五夜の詩に「冷露無聲無桂華を濕ほす」と、亦癡想し得て妙なり、蓋、露の大に下る、聲有るかを疑ふ、而して何の間にして下るを知らざるなり、清人高文良、「風裏銀河聲有るに似たり」と、陸放翁の「銀河無聲無地に接して流る」を翻用し、殊に人をして爽然たらしむ、出蓋可謂ふ可し。

杜少陵曰、「良工は心獨り苦しむ」と、又曰、「能事は人の促迫を受けず」と、詩書を求むる者は此義を知らず、期を刻して追索し、違負の如きあり、眞に人役なり、門に署して之を塞くに如かざるのみ。

六十一歳を華甲と曰ふ、蓋、華の字を拆てば六十一と爲る、猶ほ四十八を乘字年と曰ふがごとし、何遜、井に榮を生するを夢む、此、勵志楊洪傳の注に見ゆ、

西遊記第二十回に、問ふ年壽幾何ぞ、道癡長するを六十一、行者道ふ好好華甲重逢と、范石湖の丙午新正の詩に、「祝す我が剎周華甲子、謝す人の深く勸む玉東西」と、丙午は石湖元命

西丙午、石湖元命之辰也。邦俗稱八十八爲米年、亦未爲不典也。

邦俗年四十稱爲初老、開宴爲壽、詩歌以祝之。據史、淳和天皇天長元年十一月、太上天皇年登四十、行慶壽之禮、懷風藻有刀利宣令賀五八年五言律詩、初老見菅家文章、饒與州刺史詩、其稱亦尙矣。

赤穂義士小野寺秀和字十内、爲京邸留守、事母孺慕不已、好學嗜風雅、仁齋先生賀十内母詩、母氏年高九十強、無憂無病、又無傷老、菜孝思誰能識、膝下猶呼作小郎、蓋紀實也。大石良雄之在山科、亦嘗撰謁仁齋、隸籍門下、云、十内歌詠載近世畸人傳、忠烈之氣見乎詞矣。

畸人傳所載十内寄内手取凡

の辰なり、邦俗に八十八を稱して米年と爲す、亦未だ不典と爲さざるなり。

邦俗に年四十、稱して初老と爲し、宴を開き壽を爲し、詩歌以て之を祝す、史に據るに、淳和天皇天長元年十一月、太上天皇、年四十に登り、慶壽の禮を行ふ、懷風藻に、刀利宣令の五八年を賀する五言の律詩あり、初老は菅家文章、與州刺史を饒する詩に見ゆ、其稱亦尙し。

赤穂の義士、小野寺秀和、字は十内、京邸の留守と爲り、母に事へ孺慕已まず、學を好み風雅を嗜む、仁齋先生十内の母を賀する詩に、「母氏年高く九十強、憂無く病無く又傷無し、老菜孝思誰か能く識らん、膝下猶ほ呼んで小郎と作す」と、蓋、實を紀するなり、大石良雄の山科に在る、亦嘗て謁を仁齋に備け、籍を門下に隸すと云ふ、十内の歌詠は近世畸人傳に載す、忠烈の氣、詞

七通、藏在一身田小野寺氏、其先秀益爲二十
 內兄當時住京師故教而藏之、又有大石良
 雄書一通大石良金吉田兼亮原元辰手書
 歌各一首皆所遺十內内人内人德義可見
 也、又伊藤梅字見閑談盡載十内將東行來
 古義堂與東屋性別事又及十内計至東屋
 往伊慰之母氏悅其報主全義而死深謝仁
 齋先生教育之恩焉、信是母而有是子也、

元人陳孚詩、幸逢乙夜明王問、更喜丁年
 奉使還、寔妙對也、人質乙夜之故實、按段
 文昌淮西碑、遵大禹櫛風之志、有光武乙
 夜之勤、是其出也、然光武紀云、講論經理
 夜分乃寤、無乙夜字、漢魏已來以甲乙丙
 丁戊紀夜、謂之五夜、亦曰五更、乙夜即二
 更也、漢書天文志、永始元年四月壬戌甲夜、
 地節元年四月戊午乙夜、始見于此、又
周禮司寤氏、掌夜時、鄭玄注、夜時謂三夜、晚
 早、若今甲乙至戊、其言今者古所無也、又
 杜陽雜編云、文宗視朝後、即閱羣書、謂左
 右曰、若不甲夜視事、乙夜觀書、何以爲人

に見はる、暗人傳に載する所、十内が内に響する手、東凡そ七通、藏
 に見はる、暗人傳に載する所、十内が内に響する手、東凡そ七通、藏
 して一身田の小野寺氏に在り、其先秀益十内の兄たり、
 當時京師に住す、故に收めて之を藏す、又、大石良雄の書一通、大石
 良金、吉田兼亮、原元辰の手書、歌各一首有り、皆十内の内人に遺り
 し所なり、内人の德義見るべし、又伊藤梅字の見閑談、終に十内將に
 東行せん、古義堂に來り、東屋と別を惜む事、載す、又十内の
 計至るに及び、東屋性きて之を甲慰す、母氏其の主に報じ義を全く
 して死するを悦び、深く仁齋先生教育の恩を謝す、信に是の母にし
 て是の子有るなり、

元人陳孚の詩に、「幸に逢ふ乙夜明王の問、更に喜ぶ丁年奉使し
 て還る」は、寔に妙對なり、人、乙夜の故實を質す、按するに、段
 文昌の淮西碑に、大禹の櫛風の志に遵ひ、光武の乙夜の勤あ
 り、是れ其出なり、然れども光武紀に云ふ、經理を講論し夜
 分乃ち寐ぬ、乙夜の字無し、漢魏已來甲乙丙丁戊を以て夜を
 紀し、之を五夜と謂ふ、亦五更と曰ふ、乙夜は即ち二更なり、
漢書天文志に、永始元年四月壬戌甲夜、地節元年四月戊午乙夜、始
 めて此に見ゆ、又、周禮に司寤氏、夜時を掌る、鄭玄の注に、夜時は
 夜の晩早を謂ふ、今の甲乙より戊に至るが、又杜陽雜編に云、文宗
若し、其今言ふ者は、古の無き所なり、朝を視、後即ち羣書を閱す、左右に謂ふて曰、若し甲夜に事を
 視、乙夜に書を觀すんば、何を以て人君と爲らんや、此れも亦

君耶、此亦因光武故事、淮西碑語而言爾、或引此爲出誤矣、

七言古詩、一韻到底、卻非本色、韻不轉詩不活、蓋波瀾變化、頓挫開闔、韻亦隨而轉、斯見其妙矣、或至事之劇、每二句轉韻、語勢隨事勢、所以迫促也、

黃花本稱菊、亦謂菜花、司空表聖詩、綠樹連村暗、黃花入麥稀、是也、晉張翰詩、黃花若散金、通首皆言春景、此其所本也、紅樹謂霜葉、亦稱花木、歐陽永叔遊春詩、紅樹青山日欲斜、長郊草色綠無涯、唐詩亦有之、今舉所譜記耳、白樂天有「三五夜中新月色之句、則新月亦不必初弦也、

何如何似、與孰若同、言相比而不及也、聞

光武の故事、淮西碑の語に因りて言ふのみ、或は此を引きて出さざるは誤れり。

七言古詩、一韻到底、卻て木色に非ず、韻轉せずんば詩活きず、蓋、波瀾變化、頓挫開闔、韻も亦隨つて轉ず、斯に其妙を見る、或は事の劇に至りては、二句毎に韻を轉ず、語勢は事勢に隨ふ、迫促する所なり。

黃花は本菊を稱す、亦菜花を謂ふ、司空表聖の詩に、「綠樹村に連つて暗く、黃花麥に入つて稀なり」と、是れなり、晉の張翰の詩に、「黃花は金を散ずるが若し」と、通首皆春景を言ふ、此れ其本づく所なり、紅樹は霜葉を謂ふ、亦花木を稱す、歐陽永叔の遊春の詩に、「紅樹青山日斜ならん」と欲す、長郊草色綠無し」と、唐詩にも亦之あり、今譜記する所を舉ぐるのみ、白樂天に「三五夜中新月の色」の句あり、則ち新月も亦必ずしも初弦ならず。

何如、何似は孰若と同じ、相比して及ばざるを言ふなり、「説く

「說梅花早、何如此地春、何似兒童歲、風涼
出舞雲、竝嘆其不及也、但在韻脚、則與如
何同、學者須知之、

兼訓與、然本義併也、故不可指相反者而
言也、須照本義用之、少陵、露瀟兼雨打、開
拆漸離披、日兼春有暮、愁與醉無醒、桃花
細逐楊花落、黃鳥時兼白鳥飛、白居易、古
墳何世人、不識姓名、土控吳兼越、州連
歙與池、身兼妻子、郡三口、鶴與琴書共、一
船、劉禹錫、唯有詩兼酒、朝朝雨不同、借問
風前兼月下、不知何客對胡牀、羅隱、珍重
雲兼鶴、從來不定居、千崖兼萬壑、只向望
中看、可憐戶外桃兼李、仲蔚蓬蒿奈爾何、
張喬、落花兼柳絮、無處不紛紛、安知千里

を聞く、梅花早し、此の地の春に何如、「何似ぞ兒童の歳、風涼
舞雲を出す」、竝に其及ばざるを嘆ずるなり、但、韻脚に在つ
ては則ち如何と同じ、學者須らく之を知るべし。

兼は與ミ訓ず、然れども本義は併なり、故に相反する者を指し
て言ふ可からざるなり、須らく本義に照して之を用ふべし、少
陵の「露瀟兼雨打」、開拆漸離披、「日兼春暮有暮、愁
兼醉は醒むる無し」、「桃花細に楊花を逐ふて落ち、黃鳥時に
白鳥兼飛」、白居易の「古墳何の世の人ぞ、識らず姓名を
を」、「土は控く吳兼越」、州は連る歙兼池、「身は妻子兼郡
て三口、鶴は琴書共一船」、「劉禹錫の「唯詩酒兼有、朝
朝雨ながら同じからず」、「借問す風前兼月下」、知らず何れ
の客か胡牀に對す」、「羅隱の「珍重す雲兼鶴」、從來居を定め
ず」、「千崖兼萬壑」、只、望中に向つて看る、「憐む可し戶外桃
兼李、仲蔚蓬蒿奈爾何」、張喬の「落花兼柳絮」、處として
紛々ならざるは無し、「安ぞ知らん千里の外、雨兼風有らざる

外、不有雨兼風、杜牧、十載名兼利、人皆與
 命爭、荷花兼柳葉、彼此不勝秋、元稹、防戍
 兄兼弟、收田婦與姑、鄭谷、酷愛山兼水、唯
 應我與師、其義可見已、韋莊、莫問榮兼辱、
 寧論古與今、此雖相反、以榮辱相因而言、
 元稹、乍見悲兼喜、猶驚是與非、羅隱、爛棧
 作袍名復利、鏐金爲講愛兼憎、亦是也、但
 趙嘏、胡沙兼漢苑、相望幾迢迢、殆不成義、
 恐偶誤耳、

將訓與、凡相對相反、皆可言也、世說支道
 林在、白馬寺中、將馮太常共談、搜神記將
 三四人至岑村、飲酒小醉、暮還、北史鄭頤
 宋欽道二人、權將楊僧相埒、龍城錄、寧王
 畫馬化去、信知將造化俱也、此皆相對而

るを」と、杜牧の「十載名と利と、人は皆命と争ふ」、荷花と柳
 葉と、彼此秋に勝へず」と、元稹の「戍を防ぐ兄と弟と、田を收む
 婦と姑と」、鄭谷の「酷だ愛す山と川と、唯、應に我と師となる
 べし」と、其の義見る可きのみ、韋莊の「問ふ莫れ榮と辱と、寧ぞ
 論せん古と今と」と、此れ相反すと雖、榮辱相因るを以て言ふ、
 元稹の「乍ち見る悲と喜と、猶ほ驚く是と非と」と、羅隱の「爛棧
 袍を作る名復た利、鏐金講を爲す愛と憎と」と、亦是れなり、但
 だ趙嘏の胡沙と漢苑と、相望み幾んど迢々」と、殆んど義を成さ
 ず、恐らくは偶々誤るのみ。

將は與と訓ず、凡そ相對し相反す、皆言ふ可し、世説に、支道林、
 白馬寺の中に在り、馮太常と共に談ず、搜神記に、三四人と岑村
 に至り、酒を飲み、小酔して暮に還る、北史に、鄭頤、宋欽道の二
 人、權、楊僧と相埒し、龍城錄に、寧王の畫馬化して去る、信に
 知る造化と俱にするなりと、此れ皆相對して言ふ、詩句は則ち

言、詩句則不暇枚舉、盧照鄰不辨秦將漢、寧知春與秋、王勃、歸驛將別棹、俱是倦遊人、亦皆言反對之物、餘可華知已、和亦訓與、本義同也、合也、杜甫、台州地瀾海冥冥、雲水長和島嶼青、羅隱、嘉陵路惡石和泥、行到長亭日已西、杜荀鶴、酒旗和柳動、僧屋與雲齊、司空曙、靜與嬾相偶、年和衰共催、李咸用、鳥隔寒烟語、泉和夕照流、姚鵠、殘星螢共失、落葉鳥和飛、韓偓、烟和魂共遠、春與人同老、丘爲、鳥共孤帆遠、烟和獨樹低、其義可見已、劉克莊、幸然不識桃和柳、范成大、可憐世上金和寶、楊萬里、要知春事深和淺、仕和不仕得相關、此全同與、蓋奇法也、

夜航詩話卷之三

枚舉に暇あらず、盧照鄰の「辨せず秦と漢と、寧ぞ知らん春と秋と」も、王勃の「歸驛、別棹と、俱に是れ倦遊の人」とも、亦皆反對の物を言ふ、餘は準じて知る可きのみ。

和も亦た與と訓ず、本義は同なり合なり、杜甫の「台州は地瀾く海冥冥、雲水長く島嶼を青し」と、羅隱の「嘉陵は路悪しく石と泥と、行きて長亭に到れば日已に西す」と、杜荀鶴の「酒旗柳と動き、僧屋雪と齊し」と、司空曙の「静と嬾と相偶し、年と衰と共に催はず」と、李咸用の「鳥は寒烟を隔てて語り、泉は夕照と流る」と、姚鵠の「殘星螢と共に失し、落葉鳥と飛ぶ」と、韓偓の「烟は魂と共に遠く、春は人と同じく老ゆ」と、丘爲の「鳥は孤帆と共に遠く、烟は獨樹と低る」と、其義見る可きのみ、劉克莊の「幸然桃と柳とを識らず」と、范成大の「憐む可し世上金と寶と」と、楊萬里の「春事の深と浅とを知らん」と要す、「仕と仕へざる」と相關するを得、此れ全く與と同じ、蓋、奇法なり。

或嘗示予曰、爲調被平聲、張九齡嘗著名山意、茲爲世網牽、孟浩然、豈嘗昏墊苦、亦爲權勢沈、杜甫、每欲孤飛去、徒爲百慮牽、白居易、豈獨年相迫、兼爲病所侵、韓愈、清爲公論重、寬得士心降、劉禹錫、欲向醉鄉去、猶爲色界牽、盧綸、久爲名所誤、春盡始歸山、李頎、文字爲人棄、田園被債收、皆是平聲、此方詩人胡用失黏、雖老匠猶或繆、諸故歷舉以證之、十八史略爲楚所滅、爲秦所滅、皆注去聲、誤矣、然以余所見、亦未必拘泥、唐李中、信步騰騰野岸邊、離家都爲利名牽、宋蘇舜欽、明河篇、幾爲浮雲亂、都宜小雨晴、歐陽脩、世味唯存詩淡泊、生涯半爲病侵、陵明王越、轉爲邊笳吹作雪、

或ひ嘗て予に示して曰、爲被調すれば平聲なり、張九齡の「嘗て著ふ名山の意、茲に世網に牽かる」と、孟浩然の「豈嘗に昏墊の苦のみならん、亦權勢に沈めらる」と、杜甫の「毎に孤り飛び去らんを欲す、徒に百慮に牽かる」と、白居易の「豈に獨り年相迫るのみならんや、兼ぬて病に侵さる」と、韓愈の「清は公論に重んぜらる、寬は士心の降るを得」と、劉禹錫の「醉郷に向つて去らんを欲するも、猶ほ色界に牽かる」と、盧綸の「久しく名に誤まられ、春盡始めて山に歸る」と、李頎の「文字人に棄てられ、田園債に收めらる」と、皆是れ平聲なり、此方の詩人、胡用失黏、老匠に雖、猶ほ或は諸を繆る、故に歷舉して以て之を證す、十八史略に、楚に滅さる、秦に滅さる、皆去聲を注す、誤れり、然れども余の見る所を以てするに、亦た未だ必ずしも拘泥せず、唐李中の「歩に信かせ騰々野岸の邊、家を離れ都て利名の爲に牽かる、宋の蘇舜欽の明河篇に、「幾たびか浮雲の爲に亂たる、都て小雨の晴に宜し」と、歐陽脩の「世味唯存す詩の淡泊、生涯半は病の爲に侵さる」と、陵明王越の「髣は邊笳の爲めに吹いて雪を作り、心は烽火に因りて煉りて丹を成る」と、此れ乃ち

心因烽火煉成丹、此乃作仄聲用蓋借以叶也、左氏僖二十二年傳、楚子入鬻于鄭、杜注、爲鄭所鬻、陸氏釋文、爲于僞反、二十五年傳、呂卻畏僂、注、畏爲文公所僂害、釋文同、上由是而言、陳般史略注、亦未必無據也、要之詩中平去通用可也、

等頭猶平頭也、元稹、流年等頭過、等頭成長、叢生涯、白居易、請君莫道等頭空、甲子等頭憐其老、皆言彼此平等也、唐詩金粉以爲、猶等間誤甚、又遮渠與從渠、正相反、金粉以爲同義、尤謬、

聞道、聞人道其事也、聞說、聽說竝同、見說言親見其說之非、傳聞、風聲也、梅莊詩語解、道說竝助語謬矣、杜子美詩題、見王監

仄聲、作して用ふ、蓋借りて以て叶するなり、左氏僖二十二年の傳に、楚子入りて鄭に鬻せらる、杜注に鄭の爲めに鬻せらる、陸氏釋文に、爲は、于僞反、二十五年傳に、呂卻僂を畏る、注に、文公の爲めに僂害せらるるを畏る、釋文、上と同じ、是に由て言へば、陳般史略の注、亦未必必ずしも據無きにあらざるなり、之を要するに、詩中の平去は、通用するも可なり、

等頭は、猶ほ平頭のごとし、元稹の「流年等頭に過く」、等頭に成長して生涯を盡す、白居易の「請ふ君道も莫れ等頭空し」、甲子等頭共に老いるを憐む、皆な彼此平等なるを言ふなり、唐詩金粉に、以て猶ほ等間のごとし、爲すは誤る甚し、又遮渠は從渠と正に相反す、金粉以て同義と爲す、尤も謬れり、

道ふを聞くは、人の其事を道ふを聞くなり、説くを聞く、説くを聴く、竝に同じ、説くを見るは、親しく其之を説くを見る、風聲を傳聞するに非ざるを言ふなり、梅莊の詩語解に、道説は竝に

兵馬使說、近山有白黑二鷹、韓文黃家賊事宜狀、見說江南所發四百人、石鼎聯句序述、軒轅道士事、曰、劉往見衡湘間人說、云、年九十餘矣、段成式酉陽雜俎多記人話稱、見某說、皆言的聞也、韋莊詩、見爾此言、堪慟哭、王建宮詞、近見蘭臺諸吏說、御詩新集未、教傳、張籍贈隱者常見鄰家說、時聞使鬼神、僧貫休思賈匡、近見禪僧說、生涯勝往時、僧齊己、瘴國頻聞說、邊鴻亦不遊、此類不可勝舉、知道解道、亦皆訓言、學者多誤、故詳焉。

到頭言窮到盡頭、猶云至竟也、古樂府那阿灘曲、聞歡下揚州、相送江津灣、願得篙機折、交郎到頭還、蓋欲其不行之切、冀篙

助語を、讓れり、杜子美の詩題に、王監兵馬使の説くを見る、近山に白黒の二鷹有り、韓文、黃家賊事宜狀に、説くを見る、江南發する所四百人、石鼎聯句の序に、軒轅道士の事を述べて曰、劉往きて衡湘間の人の説くを見るに云ふ、年九十餘なり、段成式の酉陽雜俎に多く人の話を記し、某の説くを見るに稱す、皆的聞を言ふなり、韋莊の詩に、爾の此言を見て慟哭に堪へたり、王建の宮詞に、近く蘭臺諸吏の説くを見る、御詩新に集めて未だ傳へしめず、張籍の隱者に贈るに、常に鄰家の説くを見、時に鬼神を使ふを聞く、僧貫休の賈匡を思ふに、近く禪僧の説くを見る、生涯往時に勝る、僧齊己の瘴國頻りに説くを聞く、邊鴻亦遊はず、此類舉ぐるに勝ゆ可からず、知道・解道も、亦皆言を訓す、學者多く誤る、故に焉を詳にす。

到頭は、盡頭に窮到するを言ふ、猶ほ至竟云ふが、古樂府の那阿灘曲に、歡が揚州に下ると聞き、相送る江津の灣、願くば篙機の折るを得て、郎が到頭還るを交ん、蓋、其の行

樽皆折而不能行。果遂我所願而還。不怨
 人而怨物。寫惜別癡情也。陸龜蒙詩。淵明
 不待公田熟。乘興先秋解印歸。我爲餘糧
 春未去。到頭誰是復誰非。張碧農夫詩。運
 鋤耕斷侵星起。隴畝豐盈滿家喜。到頭禾
 黍屬他人。不知何處拋妻子。賈島。掘井須
 到底。結交須到頭。劉得仁。道貴行無我。禪
 難說到頭。盧仝。便爲諫議問蒼生。到頭還
 得蘇息否。白居易。無奈攀緣隨手長。亦知
 恩愛到頭空。老過占他藍尾酒。病餘收得
 到頭身。羅隱。浮世到頭須適性。男兒何必
 盡成功。六國英雄漫多少。到頭徐福是男
 兒。李元甫。南朝天子愛風流。盡守江山不
 到頭。吳融。到頭一切皆身外。只覺關身是

かざらんことを欲するの切なる、樽皆折れて行く能はず、果
 して我が願ふ所を遂げて還らんを冀ふなり、人を怨まずして物
 を怨む、別を惜むの痴情を寫すなり、陸龜蒙の詩に、「淵明は公
 田の熟するを待たず、興に乗じ秋に先ちて印を解きて歸る、我、
 餘糧の爲に春未だ去らず、到頭誰れか復た誰れか非」と、張碧
 の農夫の詩に、「鋤を運び耕斷し星を侵して起き、隴畝豐盈し滿
 家喜ぶ、到頭禾黍他人に屬す、知らず何の處にか妻子を抛たん」
 と、賈島の「井を掘るは須く到底なるべし、交を結ぶは須く到頭
 なるべし」と、劉得仁の「道の貴きは行、我無く、禪の難きは説き
 て頭に到る」と、盧仝の「便ら諫議を爲り蒼生を問ひ、到頭還た
 蘇息を得るや否や」と、白居易の「奈もする無し攀緣手に随つ
 て長ず、亦知る恩愛到頭空し」と、老過他の藍尾酒を占め、病餘收
 め得たり到頭の身」と、羅隱の「浮世到頭須く性に適すべし、男
 兒何ぞ必ずしも盡く功を成さん」と、六國の英雄漫に多少、到頭
 徐福は是れ男兒」と、李元甫の「南朝の天子風流を愛し、盡く江
 山を守りて到頭ならず」と、吳融の「到頭一切皆身外、只覺ゆ身

醉郷李咸用、到頭積善成何事、天地茫茫
 秋又春、徐夔休說雄才間代生、到頭難與
 運相爭、官達到頭思野逸、才多未必笑清
 貧、南唐李後主、萬古到頭歸一死、醉鄉葬
 地有高原、東坡詞、萬事到頭都是夢、休休
 明日黃花蝶也愁、四時占候諺語、朝立秋
 暮颺颺、夜立秋、熱到頭、五雜俎、論遊山事
 云、到頭而無所得、母中道而生厭怠、皆言
 其極也、又東坡、暫著南冠不到頭、卻隨北
 雁與歸休、言未終、任而去、翻用柳州一
 生判却歸休、謂著南冠到頭也、陳仲山、開
 口盡言投老易、到頭只是挂冠難、言至老
 而未果也、陳龜峰、可憐玉帳幾韓劉、收拾
 關山不到頭、言功垂成而廢、蓋嘆宋室南

に關する是れ醉郷に、李咸用の「到頭積善何事を成す、天地茫茫たり秋又春」に、徐夔の「説くを休めよ雄才間代に生ず、到頭運に相争ひ難し」、「官達して到頭野逸を思ふ、才多くして未だ必ずしも清貧を笑はず」、南唐の李後主の「萬古到頭一死に歸し、醉郷の葬地高原有り」、東坡の詞に、「萬事到頭都て是れ夢、休々、明日黃花蝶また愁ふ」、四時の占候に、諺語に、朝立秋暮颺々、夜、立秋熱到頭に、五雜俎に、山に遊ぶ事を論じて云ふ、到頭にして得る所無きも、中道にして厭怠を生ずる母れに、皆其極を言ふなり、又東坡の「暫く南冠を著けて到頭ならず、卻て北雁に隨つて與に歸休す」、未だ任を終へずして去るを言ふ、柳々州の「一生、歸休を判卻し、南冠を著けて到頭す」、謂ふを翻用するなり、陳仲山の「口を開けば盡く言ふ老に投ずるは易し」、到頭只是れ冠を挂くる難しに、老に至りて未だ果さざるを言ふなり、陳龜峰の「憐む可し玉帳幾韓劉、關山を收拾して到頭ならず」、功の成るに垂なんとして廢するを言ふ、蓋、宋室南渡の後、張韓劉岳諸將恢復の謀遂げざるを嘆するなり、方

渡之後、張韓劉岳諸將恢復之謀不遂也、方正學題賈臣妻墓、丁寧囑付人間婦、自古精糴合到頭言不可半途而棄也、或認作到處用故詳辯之、

不分、六朝以來語、分忿通、加豈字看、訓豈不忿、言不勝忿也、古世説、于法蘭與支公爭名、後精漸歸支、意甚不分、顔之推還魂記、陶繼之枉殺一妓、夜夢妓來云、昔枉見殺、實所不分、訴之得理、故今取君、傳燈錄、闍夜多傳、不忿作色、皆甚憤意、唐詩多用之、老杜、不分桃花紅勝錦、生憎柳絮白於綿、仇注言不能分辨也、東厓乘燭談、謂不自知己分也、俱未之深考耳、蓋罵其惱人、猶諺謂可愛者反曰可憎也、崔湜健好怨、

正學、賈臣の妻の墓に題して、丁寧囑付す人間の婦、古より精糴は合あはに到頭なるべしと、半途にして棄つ可からざるを言ふなり、或は認りて到處に作りて用ふ、故に詳に之を辯す。

不分は、六朝以來の語、分忿通ず、豈の字を加へて看る、豈忿らざらんやと訓ず、忿に勝へざるなるなり、古世説に、于法蘭、支公と名を争ふ、後ち精漸く支に歸し、意甚だ不分と、顔之推の還魂記に、陶繼之一妓を枉殺す、夜夢に妓來りて云ふ、昔枉けて殺さる、實に不分なる所、之を訴へて理を得たり、故に今君を取らる、傳燈錄、闍夜多傳に、不忿、色を作す、皆甚だ憤るの意なり、唐詩に多く之を用ゆ、老杜の「不分桃花紅・錦に勝る、生憎柳絮綿より白し」と、仇注に、分辨する能はざるを言ふなりと、東厓の乘燭談に、自ら己れの分を知らざるを謂ふなりと、俱に未だ之を深く考へざるのみ、蓋、其の人を惱すを罵る、猶諺に愛す可き者を謂ひ、反つて憎む可しと曰ふがごとし、崔湜の健好

不分君恩斷、新妝視鏡中、李端披衣更向門前望、不分朝來喜鵲聲、柳公權、不分前時忤主恩、已甘寂寞守長門、王建、不分君家新酒熟、好詩收得被回將、鄭谷蜀中春暮、不忿黃鸝驚曉夢、唯應杜宇信春愁、或通作憤、趙嘏賦、倦寐聽晨雞、不憤連年別、那堪長夜啼、牛驕楊柳枝詞、不憤錢塘蘇小小、引郎松下結同心、是也、東坡雜纂、有旁不忿部、曰村漢有錢、曰俗夫有好妻、又夢溪筆談、鞠真卿守潤州、民有鬪毆者、本罪之外、別令先毆者出錢、以與後應者、小人斬財、兼不憤輸錢於敵人、終日紛爭、相視無敢先下手者、此亦可見已、

無賴、本謂無所聊賴也、史記高祖本紀、大

怨に、「不分君恩斷え、新妝鏡中に視る」云、李端の「衣を披き更に門前に向つて望めば、不分朝來喜鵲の聲」云、柳公權の「不分前時主恩に忤ひ、已に甘んず寂寞長門を守る」云、王建の「不分君家の新酒熟す、好詩收め得て回將せらる」云、鄭谷の蜀中春暮に、「不忿黃鸝曉夢を驚かす、唯、應に杜宇の春愁に信すべし」云、或は通じて憤に作る、趙嘏の賦に、「倦寐晨雞を聽き、不憤連年の別、那ぞ堪へん長夜の啼」云、牛驕の楊柳枝の詞に、「不憤錢塘の蘇小々、郎を松下に引きて同心を結ぶ、是れなり、東坡雜纂に、旁不忿部有り、曰く村漢錢有り、曰く俗夫好妻有り云、又、夢溪筆談に、鞠真卿潤州に守たり、民に鬪毆する者あり、本罪の外、別に先づ毆つ者に錢を出し、以て後に應ずる者に與へしむ、小人は財を斬み、兼ねて憤り錢を敵人に輸さず、終日紛爭し、相視て敢て先づ手を下す者無し云、此亦見る可きのみ。

無賴は、本に聊賴する所無きを謂ふなり、史記高祖本紀に、大人

人常以臣無賴不能治產業陳徐陵烏棲曲唯憎無賴汝南雞天河未落猶爭啼此爲罵辭後世因轉爲難爲懷之辭亦以可愛爲可憎之意老杜韋曲花無賴家家惱殺人劍南春色還無賴觸忤愁人到酒邊段成式楊柳詞長恨早梅無賴極先將春色出前林是也徐凝憶揚州天下三分明月夜二分無賴是揚州聯珠詩格云愛鍾于揚州此解人多不曉蓋憶煙花舊遊憎其豪奪天下風流也又唐詩貫珠評溫庭筠聽間桃葉宿禰在雨後牡丹春睡濃云原是極無賴語因雨與花草相通遂成蘊藉評崔鉉心迷曉夢聽猶暗粉落香肌汗未乾云二句無賴之極猶在側邊可恕此

夜航詩話卷之三

常に臣を無賴にして産業を治むる能はずと云、陳の徐陵の烏棲曲に、「唯憎む無賴汝南の雞、天河未だ落ちず猶ほ争ひ啼く」此れ罵辭と爲す、後世因て轉じて懷を爲し難きの辭と爲す、亦愛す可きを以て憎む可きの意と爲す、老杜の「韋曲花無賴、家人人を惱殺す」と、「劍南の春色還て無賴、愁人に觸忤して酒邊に到る」と、段成式の楊柳詞に、「長く恨む早梅無賴の極、先づ春色を將て前林に出ず」と、是れなり、徐凝の揚州を憶ふに、「天下三分明月の夜、二分の無賴は是れ揚州」と、聯珠詩格に云ふ、愛、揚州に鍾る、此の解、人多く曉らず、蓋、煙花の舊遊を憶ひ其天下の風流を襲奪するを憎むなり、又唐詩貫珠に、溫庭筠の「聽間の桃葉宿禰在り、雨後の牡丹春睡濃かなり」を評して云、原は是れ極めて無賴の語、雨と草花と相通するに因りて、遂に蘊藉を成す、崔鉉の「心は迷ふ曉夢聽猶ほ暗く、粉落ちて香肌汗未だ乾かず」を評して云ふ、二句無賴の極、猶ほ側邊に在らば恕

則謂猥褻也。

野客叢書云、唐時揚州爲盛、通州爲惡、當時有揚一益二之語、十里珠簾、二十四橋風月、其氣象可知、張祐詩曰、十里長街市井連、月明橋上看神仙、人生只合揚州死、禪智山光好墓田、王建詩曰、夜市千燈照碧雲、高樓舞袖客紛紛、如今不是承平日、猶自笙歌徹曉聞、其盛如此、通州反之、白樂天詩曰、通州海內恹惶地、司馬人間冗長官、元微之詩曰、折君災難是通州、又曰黃泉便是通州郡、其不美如此、一謂神仙、一謂黃泉、相去霄壤、余因按唐小說所謂腰纏十萬貫、騎鶴上揚州、亦以其爲海內第一、特舉而言之、所以稱二分無賴觀此

すべしと、此は則ち猥褻を謂ふなり。

一一八

野客叢書に云ふ、唐の時揚州を盛む爲し、通州を惡む爲す、當時揚一益二の語有り、十里珠簾、二十四橋風月、其氣象知る可し、張祐の詩に曰、「十里長街市井連り、月明橋上に神仙を看る、人生只、合に揚州に死すべし、禪智山光好墓田」云、王建的詩に曰、「夜市千燈碧雲を照し、高樓の舞袖客紛々、如今是れ承平の日ならず、猶ほ自ら笙歌曉に徹して聞ゆ」と、其の盛んなること此の如し、通州は之に反す、白樂天の詩に曰、「通州は海内恹惶の地、司馬は人間冗長の官」と、元微之の詩に曰、「君を折く災難是れ通州」と、又曰、「黃泉は便ち是れ通州郡」と、其美ならざる此の如し、一は神仙と謂ひ、一は黃泉と謂ふ、相去る霄壤なり、余因りて按するに、唐の小説に謂はゆる、腰に十萬貫を纏ひ、鶴に騎りて揚州に上ることは、亦其海内第一たるを以て、特に舉げて之を言ふ、二分の無賴と稱する所以は、此を觀て見る可し、唐末の亂に、蕩して丘墟と爲る、宋の時に復た盛にして、稍壯藩

可見矣。唐末之亂，蕩爲丘墟。宋時復盛，稍成壯藩，尙不能及唐之什一。今則蘇州杭州爲最盛，燕京乃其次也。揚州應居第四五等耳。但美姝於今爲盛，五雜俎云：維揚居天地之中，川澤秀媚，故女子多美麗，而性情溫柔，舉止婉慧，亦其靈淑之氣所鍾。諸方不能敵也。蓋如我平安城水土清淑，爲殊麗之鄉也。

疆場出左傳，場音易，言疆土至此而易也。明人詩中皆作場字，余嘗笑其不識字。後見陳後主詩：「馬草報疆場，叶陽韻。」唐人遂作平聲，用駱賓王「膂力風塵倦，疆場歲月窮」，高適「許國從來徹廟堂，連年不得在疆場」，武元衡「漢庭從事五人來，回首疆場獨

藩。成すも、尙ほ唐の什一に及ぶ能はず、今は則ち蘇州杭州を最盛と爲し、燕京は乃ち其次なり、揚州は應に第四五等に居るべきのみ、但、美姝は今に於て盛と爲す、五雜俎に云ふ、維揚は天地の中に居り、川澤秀媚なり、故に女子多く美麗にして、性情溫柔、舉止婉慧、亦其靈淑の氣の鍾まる所、諸方敵する能はざるなり、蓋我が平安城の水土清淑にして、殊麗の郷たるが如し。

疆場は左傳に出づ、場は音易、疆土此に至りて易るを言ふなり、明人の詩中に、皆場の字に作る、余嘗て其字を識らざるを笑へり、後ち陳の後主の詩を見るに、「馬草疆場に報す」と、陽韻に叶ふ、唐人遂に平聲と作して用ふ、駱賓王の「膂力風塵倦、疆場歲月窮る」、高適の「國に許す從來廟堂に徹し、連年得ず疆場に在り」、武元衡の「漢庭の從事五人來り、首を疆場に回らせば獨

未回沈亞之勢君輟雅語聽說事疆場是
明人所本蓋亦臥閣訛作臥閣之類乃詩
家一語耳。

老杜慣看賓客兒童喜得食階除鳥雀馴
雍陶初歸山犬翻驚主久別江鷗卻避人
吳融見多鄰犬遙相認來慣幽禽近不驚
句法相襲而反其義所謂換骨脫胎之法
也。

指物稱公詩家雅譴杜牧假塞松公老森
嚴竹陣齊劉禹錫海雲懸鷗母山果屬猿
公盧仝井公莫怪驚說我成愁癡僧皎然
吾知世代相看盡誰悟浮生似影公敬去
文愛此飄飄六出公謂雪也東坡苦厭黃
公聒醉眠謂爲也與晉人呼竹爲君同意

り未だ回らず」云、沈亞之の「君を勢す雅語を輟め、疆場を事
するを説くに聽す」云、是れ明人の本づく所、蓋亦臥閣訛して臥
閣を作すの類、乃ち詩家の一語のみ。

老杜の「看るに慣る賓客兒童喜び、食を得て階除に鳥雀馴る」
云、雍陶の「初めて歸れば山犬翻つて主を驚し、久しく別るれば
江鷗却つて人を避く」云、吳融の「見るこゝ多ければ鄰犬遙に相
認め、來り慣るれば幽禽近づいて驚かず」云、句法相襲ひ、而し
て其義を反す、謂はゆる換骨脫胎の法なり。

物を指して公を稱するは詩家の雅譴なり、杜牧の「假塞松公老
い、森嚴竹陣齊ふ」云、劉禹錫の「海雲鷗母に懸り、山果猿公に屬
す」云、盧仝の「井公怪み驚く莫れ、我が愁癡を成すを説くを」
云、僧皎然の「吾は知る世代相看て盡き、誰か憐る浮生の影公に
似たるを」云、敬去文の「愛す此の飄々六出公」云、雪を謂ふな
り、東坡の「苦厭す黃公の醉眠を聒するを」云、驚を謂ふなり、

全唐詩禹錫詩注、越絕書有猿公、張衡賦、南都、有猿公長嘯之句、繇是而言、謂猿爲公舊矣。

自稱曰公、史記陸賈傳、無久恩公爲也、李賀有惱公詩賦、佳人事、杜牧、十載青春不負公、陸游、竹外梅花欲惱公、皆本於陸賈語。

古樂府獨漉篇、我欲射雁、念子孤散、子卽指雁說、施肩吾詩、茶爲滌煩子、酒爲忘憂君、又管城子、毛錐子、皆以子稱。

太白峨眉山月歌、思君不見下渝州、指月稱君也、羅隱黃河詩、三千年後知誰在、何必勞君報太平、言水爲君也、王建對酒、從來事事關身少、主領春風只在君、稱酒爲

晉人の竹を呼んで君を爲す同意なり、全唐詩、禹錫詩注に、越絶書に猿公有り、張衡の南都を賦するに、「猿公長嘯の句あり、是に縁りて言へば、猿を謂て公を爲す舊し。

自ら稱して公を曰ふ、史記陸賈傳に、久しく公を恩すを爲す無し、李賀に公を惱ます詩あり、佳人の事を賦す、杜牧の「十載青春公に負かず」、陸游の「竹外の梅花公を惱ますん欲す」、皆陸賈の語に本づく。

古樂府の獨漉篇に、我、雁を射んを欲して、子の孤散を念ふ、子は卽ち雁を指して説く、施肩吾の詩に、茶を滌煩子を爲し、酒を忘憂君を爲す、又、管城子、毛錐子、皆子を以て稱す。

太白の峨眉山月歌に「君を思ふて見へず渝州に下る」、月を指して君を稱するなり、羅隱の黃河の詩に、「三千年後知る誰れか、在る、何ぞ必しも君を勞して太平に報いん」、水を言ひて君を爲すなり、王建の酒に對するに、「從來事々身に關する少く、春風を主領する只君に在り」、酒を稱して君を爲すなり、羅隱

君也、羅隱籠中鷓鴣勸君不用分明語、語得分明出轉難、韓偓咏翠鳥、狹彈小兒多害物、勸君莫近市朝飛、呼鳥爲君也、翁承贊題槐、憶昔當年隨計吏、馬蹄終日爲君忙、僧慕幽咏柳、今古憑君一贈行、幾回折盡復重生、謂樹爲君也、然語氣自有輕重也。

賈浪仙鍊推敲字、舉手作勢、不覺衝京尹節、其用力苦心、何止吟安一箇字、燃斷數莖鬚耶、蓋詩一字之用係全句死活、畫龍點睛手段、其妙在於穩、故學者每作一篇、須與人商榷以求無片言不穩、不可等閑放過也、僧齊己喜吟鄭谷在袁州、齊己投詩詣之、有自封修藥院、別下著僧牀之句、

の籠中の鷓鴣に、「君に勸む分明に語るを用ひされ、語り得て分明ならば出る」と轉離し、「韓偓の翠鳥を咏するに、「狹を狹む小兒多くは物を害す、勸む君市朝に近づいて飛ぶ莫れ」と、鳥を呼んで君と爲すなり、翁承贊の槐に題するに、「憶ふ昔當年計吏に隨ひ、馬蹄終日君の爲めに忙し」と、僧慕幽の柳を咏するに、「今古君に憑り一に行を贈り、幾回か折り盡し復た重ねて生ず」と、樹を讀ふて君と爲すなり、然れども語氣自ら輕重あるなり。

賈浪仙、推敲の字を鍊り、手を舉げて勢を作し、覺えず京尹の節を衝く、其の力を用ひ心を苦む、何ぞ止に「一箇の字を吟安し、數莖の鬚を燃斷する」のみならんや、蓋詩の一字の用は全句の死活に係る、畫龍に睛を點するの手段、其の妙は穩に在り、故に學者一篇を作る毎に、須らく人に商榷し、以て片言も穩ならざる無きを求むべし、等閑に放過す可からず、僧齊己吟を喜ぶ鄭谷、袁州に在り、齊己詩を投じ之に詣る、「自ら封す藥を修むる院、別に下だす僧を著くる牀」の句有り、谷之を覽て曰、善は則

谷覽之曰、善則善矣、一字未安、經數日、再
 謁曰、改下爲掃如何、谷大嘉賞、結爲詩友、
 後又有早梅詩云、前村深雪裏、昨夜數枝
 開、谷曰、數枝非早、未若一枝齊己不覺叩
 地膜拜、自是士林以谷爲齊己一字之師、
 張迥寄遠詩曰、蟬鬢凋將盡、虬髯白也無、
 攜謁齊己、已點頭吟諷、爲改虬髯黑在無、
 迥拜爲一字師、李頻題四皓廟中二聯云、
 天下已歸漢、山中猶避秦、龍樓曾作客、鶴
 斃不爲臣、以示方干、干曰、善則善矣、內作
 字太粗難換、爲字甚不當、率土之濱、莫非
 王臣、能不爲臣耶、當改稱字、頻慙而服、任
 翻遊天台巾子峰題寺壁曰、絕頂新秋生
 夜涼、鶴翻松露滴、衣裳前峰月照一江水、

善なり、一字未だ安からず、數日を経て再び謁して曰、下を改
 めて掃爲す、如何、谷大に嘉賞し、結びて詩友爲す、後、又
 早梅の詩あり云ふ、「前村深雪の裏、昨夜數枝開く」、谷曰く、
 數枝は早に非ず、未だ一枝に若かず、齊己覺えず地を叩きて
 膜拜す、是れより士林、谷を以て齊己の一字の師爲す、張迥の
 遠に寄する詩に曰、「蟬鬢凋みて將に盡きん」と、虬髯白也た無
 し、「攜へて齊己に謁す、已、點頭吟諷し、爲めに「虬髯黒在り
 や無きや」と改む、迥拜して一字の師爲す、李頻、四皓の廟中
 に題する二聯に云、「天下已に漢に歸し、山中猶ほ秦を避く、龍
 樓曾て客作り、鶴斃臣爲らず」と、以て方干に示す、干曰、善
 は則ち善なり、内、作の字太だ粗なれども換へ難し、爲の字甚だ
 當らず、率土之濱、王臣に非ざるは莫し、能く臣たらざらんや、
 當に稱の字に改むべしと、頻慙ちて服す、任翻、天台巾子峰に遊
 び、寺壁に題して曰、「絶頂新秋夜涼を生じ、鶴は松露を翻へし
 て衣裳に滴る、前峰の月は照す一江の水、僧は翠微に在りて竹

僧在翠微開竹房、既去觀者取筆改一字爲半字、翻行數十里、乃得半字、亟回欲易之、及到題處、則已改矣、因嘆曰、台州有人、王貞白作御溝詩、前聯云、此波涵帝澤、無處濯塵纓、示僧貫休、休曰、甚善、只是剩一字、貞白揚袂而去、休曰、此公思敏、當即來、乃取筆書字於掌心、以待、貞白果回、忻然曰、已得一字、云、此中涵帝澤、休展手示之、無異所改、遂訂深契、唐人於詩、極力體認、一字不苟如此、所以深臻其妙也、宋乖崖張公詠嘗有一詩云、獨恨太平無一事、江南間殺老尙書、蕭楚材就几案見之、改恨爲幸字、張出視稿曰、誰改吾詩、蕭曰、爲公全身、公功高位重、奸人側目之秋、今天下

房を開く、既に去る、觀る者筆を取り、一の字を改めて半爲す、翻行くこと數十里にして、乃ち半の字を得たり、亟に回之を易へんことを欲す、題處に到るに及び、則ち已に改まれり、因て嘆して曰、台州に人あり、王貞白、御溝の詩を作る前聯に云ふ、「此波帝澤に涵し、塵纓を濯ふに處無し」、僧貫休に示す、休曰、甚だ善し、只是れ一字を剩す、貞白袂を揚げて去る、休の曰、此公思敏なり、當に即ち來るべし、乃ち筆を取り字を掌心に書し、以て待つ、貞白果して回り、忻然として曰、已に一字を得たり、云ふ、「此の中帝澤に涵す」、休、手を展べて之を示す、改むる所を異にする無し、遂に深契を訂す、唐人の詩に於ける、力を極めて體認し、一字苟くもせざるこそ此の如し、深く其妙に臻る所以なり、宋の乖崖張公詠嘗て一詩あり云、「獨り恨む太平一事無く、江南間殺す老尙書」、蕭楚材、几案に就て之を見て、恨を改めて幸の字爲す、張出でて稿を觀て曰、誰か吾詩を改む、蕭の曰、公の爲めに身を全うす、公は功高く位重

一統、公獨恨。太平耶。張喜謝曰：楚材吾一字之師，此則匪直詩之巧拙也。元薩都刺送澗天淵入朝云：地濕厭聞天竺雨，月明來聽景陽鐘。聞者無不膾炙。唯山東有一叟鄙之，薩以素愜意，特步訪問其故。叟曰：此聯措詞固善，但聞字與聽字一合耳。薩曰：當以何字易之。叟曰：宜改作厭看。薩詰其看字。叟曰：唐人有林下老僧來看雨。薩俯首拜謝。明楊慎登眺山寺，見雨霽虹霓，下飲澗水，日射其旁，如盼睐，得句云：渴虹下飲玉池水，斜日橫分蒼嶺霞。自謂切景。張愈光曰：斜字猶未稱渴字。後閱莊子：日方睨，衍義云：日斜如人睨目，遂改作睨。日愈光曰：渴虹睨日，古今奇句也。清袁枚送

く、奸人目を備つもの秋なり、今天下一統す、公獨り太平を恨むか。張喜び謝して曰、楚材は吾一字の師なり。此れ則ち直、詩の巧拙のみに匪ざるなり、元の薩都刺の澗天淵の入朝を送るに云ふ、「地濕ふて聞を厭ふ天竺の雨、月明にして來り聽く景陽の鐘」。聞く者膾炙せざるは無し、唯山東に一叟あり、之を鄙む。薩、素より意に愜するを以て、特に歩して其故を訪問す。叟の曰、此の聯、詞を措く固より善し、但た聞の字と、聽の字と一合のみと、薩曰、當に何の字を以て之に易ふべき。叟曰、宜しく改めて厭ひ看るに作るべしと、薩、其の看の字を詰る、叟曰、唐人に「林下の老僧來り雨を看る」有り、薩、首を俯して拜謝す、明の楊慎、眺山寺に登り、雨霽れ虹霓澗水を下り飲み、日、其旁を射て盼睐の如きを見て、句を得たり、云ふ、「渴虹下り飲む玉池の水、斜日横に分る蒼嶺の霞」と、自ら謂ふ景に切なりと、張愈光曰、斜の字猶ほ未だ渴の字に稱はずと、後ち莊子を閱するに、日方に睨すと、衍義に云ふ、日斜は人の目を睨するが如しと、遂に改めて睨日に作る、愈光曰、渴虹睨日古今の奇句な

人巡邊云、秋色玉門涼、蔣心餘曰、門字不
 饗、應改關字、又贈張某云、我慙靈運稱山
 賊、劉霞裳曰、稱字不亮、應改呼字、袁從諫
 如流、不待其詞之畢、自言詩得一字之師、
 如紅爐點雪、樂不可言、此亦皆可鑒觀矣、
 余嘗謂學者曰、作詩須被人罵過幾年、方
 得上達工夫、不然而師心自任、徒悅人之
 謾譽、雖多亦奚以爲、蓋文字自看、終有不
 覺處、須賴他人拈出、故必就師友而質焉、
 深求其疵而去之、曹子建之才、猶喜人譏
 彈、所以稱繡虎也。

四溟詩話曰、意巧則淺、若劉禹錫遙望洞
 庭湖水面、白銀盤裏一青螺、是也、句巧則
 卑、若許用晦魚下碧潭當鏡躍、鳥過青嶂

り、清袁枚人の邊を巡るを送りて云ふ、「秋色玉門涼し」と、蔣心
 餘曰、門の字響ならず、應に關の字に改むべしと、又張某に贈り
 て云ふ、「我は慙つ靈運山賊を稱せらるるを」と、霞裳曰、稱の字亮
 ならず、應に呼の字に改むべしと、袁、諫に従ふこと流る、如く
 にして、其詞の畢るを待たず、自ら言ふ詩に一字の師を得るは、
 紅爐の雪を點するが如し、樂、言ふ可からずと、此れも亦皆鑒觀
 すべし、余嘗て學者に謂つて曰、詩を作る須く人に罵過せらる
 ること幾年なるべし、方の上達の工夫を得、然らずして心を師
 とし自ら任じ、徒に人の謾譽を悦ばむ、多しと雖亦奚を以てせ
 ん、蓋、文字、自ら看て、終に覺らざる處あり、須らく他人の拈
 出に頼るべし、故に必ず師友に就いて、質し、深く其疵を求めて
 之を去る、曹子建の才にして、猶ほ人の譏彈を喜ぶ、繡虎と稱せ
 らるる、所以なり。

四溟詩話に曰、意巧なれば則ち淺し、劉禹錫、遙に望む洞庭湖水
 の面、白銀盤裏一青螺の若き、是れなり、句巧なれば則ち卑し、
 許用晦の「魚は碧潭に下り鏡に當りて躍り、鳥は青嶂を過きて
 舞を拂つて飛ぶ」の若き是れなり、又曰、李頎の「星は劍關に臨

拂屏飛是也。又曰、李頻、星臨劍閣、動花落錦江、流聲諸佳人、掌而對壯士、拳也。若曰、月落錦江寒、便相敵矣。此爲逐時好、耽宋詩者、尤中其膏肓矣。

詩韻貴穩、韻不穩、則不成句、故作詩必選韻強闢、險徒費力耳。李杜大家不用僻韻、非不能用、乃不屑用也。四溟詩話云、詩用難韻起自六朝、若庾開府、長代、手中、冷、沈、東陽、願言反魚、篠從、此流於艱澁、陸龜蒙、織作中流百尺筵、韋莊、汧水悠悠去似絳、二字近體不宜用、譬若王右軍、借諸賢於蘭亭、修禊、適高麗使者至、遂延之席末、流觴賦詩、文雅雖同、加此眼生者、便非諸賢氣象。韓昌黎、柳子厚、長篇聯句、字難韻險、

んで動き、花は錦江に落ちて流るる、諸を佳人の拳もて壯士の拳に對するに譬ふるなり、若し月落ち錦江寒しと曰はば、便ち相敵す、此れ時好を逐ひ宋詩に耽る者の爲めに、尤も其膏肓に中る。

詩韻は穩を貴ぶ、韻穩かならずんば、則ち句を成さず、故に詩を作るには、必ず韻を選ぶ、強ひて險を圖はすは、徒に力を費すのみ、李杜は大家、僻韻を用ひず、用ふる能はざるに非ず、乃ち用ふるを屑させざるなり、四溟詩話に云ふ、詩に難韻を用ふるは、六朝より起る、庾開府の長代、手中に流す、沈東陽の願くば言に魚篠を反さん」の若き、此れより艱澁に流る、陸龜蒙の「織りて中流百尺筵」作す、韋莊の「汧水悠悠去て絳に似たり」、二字近體には宜く用ふべからず、譬へば王右軍の諸賢と借に蘭亭に於て、修禊す、適高麗の使者至る、遂に之を席末に延ぎ、觴を流して詩を賦するが若し、文雅同じと雖、此の眼生者を加ふ、便ち諸賢の氣象に非ず、韓昌黎・柳子厚の長篇聯句は、字難に韻險に、多を誇り驕を圖はし、或は解す可からず、險韻に拘る、乃ち

詩多闕麗、或不可解、拘於險韻、無乃庾沈啓之邪、此誠寔宜鑒觀、凡其香涉、啞滯者、晦僻生澁者、一切宜棄捨耳、或其韻皆平穩、唯一句奇險、如油盞點水、尤可厭之甚也。

詩之韻脚、如室之基址、室焉而基址不牢、則結構雖壯、而傾欹不安、不得其爲家也、倉山居士云、忘足履之適也、忘韻詩之適也、旨哉言乎。

吳可有藏海詩話曰、和平常韻、要奇特押之、則不與衆人同、如險韻、當要穩順押之、方妙、此亦押韻要訣也。

滄浪詩話曰、不必太著題、不必多使事、下字貴響、造語貴圓、意貴透徹、不可隔靴搔

庚沈之を啓く無からんか、此の誠、寔に宜く鑒觀すべし、凡そ其香啞滯に涉る者、晦僻生澁の者は、一切宜く棄捨すべきのみ、或は其韻皆平穩にして、唯一句奇險ならば、油盞に水を點するが如し、尤厭ふべきの甚しきなり。

詩の韻脚は室の基址の如し、室にして基址もとからずんば、則ち結構壯なり、雖、傾欹して安からず、其家たるを得ざるなり、倉山居士云ふ、足を忘るゝは履の適なり、韻を忘るゝは詩の適なり、旨いかな言や。

吳可有の藏海詩話に曰、和平の常韻は、奇特に之を押すを要す、則ち衆人と同じからず、險韻の如きは、當に穩順に之を押すを要すべし、方に妙なり、此れも亦押韻の要訣なり。

滄浪詩話に曰、必しも太だ題を著けず、必しも多く事を使はず、字を下すは響を貴び、語を造るは圓を貴び、意は透徹を貴び、靴を隔て、搔を搔く可からず、語は脱洒を貴び、泥を拖き水を帶

痒、語貴脫酒、不可拖泥帶水、最忌骨董、最忌趁貼、僅四十六字、說盡要訣、詩法雖多、其大要不外此爾、貴響貴圓、最是金針。

李贊皇與白樂天惡、每屏其詩不觀、劉夢得以爲言、贊皇曰、吾於斯人、不足久矣、覽之恐回吾心、何其執拗也、然君子於小人、不可不如是、巧言令色之蠱惑也、不覺自陷術中矣、如樂天、雖有怨、不以人而廢言、可也、若回吾心、不亦幸乎。

詠繪事用綵筆、人或咎之、殊不知自有典故、李總大唐奇事載、魯人廉廣因採藥於泰山、遇一異人、謂廉曰、我能畫、可奉君法、但密藏焉、因懷中取五色筆、以授之、爲中都縣李令、於壁上畫鬼兵、夜出戰、李不敢

ぶ可からず、最も骨董を忌み、最も趁貼を忌む、僅に四十六字にして要訣を説き盡す、詩法多し、其大要は此に外ならざるのみ、響を貴び圓を貴ぶ、最も是れ金針なり。

李贊皇と白樂天と惡しく、毎に其詩を屏けて觀ず、劉夢得以、言を爲す、贊皇曰、吾斯人に於て足らずとす、こゝ久し、之を覽ば恐らくば吾心を回さん、何ぞ其れ執拗なるや、然れども君子の小人に於ける、是の如くならざる可からず、巧言令色の蠱惑や、覺えず自ら術中に陥いらん、樂天の如き、怨あり、雖、人を以て言を廢せずして可なり、若し吾心を回せば、亦幸ならずや。

繪事を詠するに綵筆を用ふ、人或は之を咎む、殊に知らず自ら典故あるを、李總の大唐奇事に載す、魯人廉廣、藥を泰山に採るに因り、一異人に遇ふ、廉に謂ふて曰、我畫を能くす、君に法を奉ず可し、但密藏せよ、因て懷中より五色の筆を取り、以て之を授く、中都縣李令の爲に、壁上に於て鬼兵を畫く、夜出て戰ふ、李敢て留めず、遂に畫く所を毀る、是れなり、又李白の粉

留遂毀所畫是也。又李白粉圖山川歌、名工釋思揮綵筆、驅山走海置眼前、裴楷觀脩處士桃花圖歌、可憐彩筆似東風、一朵一枝隨手發、羅隱畫牡丹、葉隨綵筆參差長、花逐輕風次第生、徐鉉送寫真成處士、傳神蹤跡本來高、澤畔形容婉彩毫、即無廉廣事亦用之無妨也。

物長曳地曰窳、蓋形容之語、唐玄宗詩灞岸垂楊窳地新、岑參赤驃馬歌尾長窳地如紅絲、和凝停穩春衫窳地長、金史肅窳地山雲不世情、元郭鈺高閣朱簾窳地垂、竝譯比企須臾言其拂地之貌如窳窳有聲也、其詳載諸書瓊錄、蕉中詩語解爲剗地忽地之類、謬矣、如杜荀鶴垂露竹黏蟬

圖山川歌に、「名工釋思綵筆を揮ひ、山を驅り海を走らし眼前に置く」と、裴楷の脩處士の桃花圖を觀る歌に、「憐む可し彩筆東風に似たり、一朵一枝手に隨つて發す」と、羅隱の畫牡丹に、「葉は綵筆に隨つて參差して長く、花は輕風を逐ふて次第に生ず」と、徐鉉の寫真成處士を送るに、「傳神蹤跡本來高し、澤畔形容彩毫を婉つ」と、即ち廉廣の事無きも、之を用ひて妨無きなり。

物長く地を曳くを窳と曰ふ蓋、形容の語なり、唐の玄宗の詩に、「灞岸垂楊地に窳て新なり」と、岑參の赤の驃馬の歌に、「尾は長く地に窳て紅絲の如し」と、和凝の停穩春衫地に窳て長し」と、金史肅の地に窳く山雲世情ならず」と、元の郭鈺の「高閣朱簾地に窳て垂る」と、竝に比企須臾と譯す、其地を拂ふの貌、窳々として聲有るが如きを言ふなり、其詳は諸書を瓊錄に載す、蕉中の詩語解に、剗地忽地の類と爲すは謬れり、杜荀鶴の「露を垂る、竹は蟬の殻を落すに黏し、雲を牽く松は鶴の巢に棲む

蓂殼、窠雲、松載、鶴棲、巢、李從善、蓄薇詩、嫩刺牽衣細、新條窠草垂、作何解耶。

李詩、松濤五月寒、杜詩、陂塘五月秋、或疑其不係六月、蓋彼方氣候早、五月已苦熱也、如二月花、九月霜、皆先我一月、亦可以見矣。

純訓專、不雜他物也、杜工部、半陂已南、純浸山、岑嘉州、庭樹純栽橘、又杜陵樹邊、純是花、四時、純作青黛色、寒山子掘得一寶藏、純是水精珠、詩家不多用、僅見此爾。

健壯也、彊也、兼有爽快之意、因謂氣王爲健、故多言秋事、白居易、禦熱蕉衣健、扶羸竹杖輕、朝衣薄且健、晚簾清仍滑、翩翩穩鞍馬、楚楚健衣裳、韋莊、墻頭山色健、林外

載す、李從善の蓄薇の詩に、「嫩刺衣を牽いて細く、新條草を窠て垂る」の如き、何の解を作すや。

李詩の「松濤五月寒し」、杜詩の「陂塘五月秋」、或ひも其六月に係りざるを疑ふ、蓋彼方の氣候は早く、五月已に熱に苦む、二月花、九月霜の如き、皆我先だつこゝ一月、亦以て見る可し。

純は專に訓す、他物を雜へざるなり、杜工部の「半陂已南、純ら山に浸す」、岑嘉州の「庭樹純ら橘を栽う」と、又た「杜陵樹邊、純らは花」、四時純ら青黛の色を作す、寒山子の「掘り得たり一寶藏、純らはれ水精珠」、詩家多く用ひず、僅に此を見るのみ。

健は壯なり、強なり、兼ねて爽快の意あり、因て氣王を謂て健と爲す、故に多く秋事を言ふ、白居易の「熱を禦く蕉衣健に、羸を扶く竹杖輕し」、朝衣薄くして且つ健、晚簾清くして仍ほ滑、

翩翩鞍馬穩に、楚楚衣裳健なり、韋莊の「墻頭山色健に、林外爲

鳥聲歡、韓偓天涼氛、綬消暑退松篁健、杜
荀鶴雪峽猿聲健、風樺鶴立危、司空圖、坡
暖多生、笋松涼夏健、人薛能榆莢奔、風健
蘭芽負、土肥李咸用、漸喜秋弓健、鴉翻白
草齊、僧齊己、驛樹秋聲健、行裝雨點斑、范
成大、帆重腹愈飽、榜潤鳴更健、楊萬里、幾
絲微雨噴前山、半點輕寒健、牡丹、皆言氣
力旺也。

慳音慳、吝惜也、詩家所用轉爲數義、僧貫
休、宅成天下借圖看、自笑平生眼力慳、訓
小、言不能廣見也、姚孝錫、歡來聊破酒腸
慳、杜本、飲量素慳難、止酒陸游、狂恨酒樽
慳、竝言乏少也、折彥質、峭峯斷續天容缺、
高壘縈紆地勢慳、言其境迫窄也、朱淑真

壁歡す、韓偓の「天涼しくして氛綬消暑退きて松篁健なり」、杜荀鶴の「雪峽猿聲健に、風樺鶴立危し」、司空圖の「坡暖にして冬、笋を生じ、松涼しくして夏、人に健なり」、薛能の「榆莢風に奔りて健、蘭芽土を負ふて肥ゆ」、李咸用の「漸く喜ぶ秋弓の健、鴉翻つて白草齊し」、僧齊己の「驛樹秋聲健に、行裝雨點斑なり」、范成大的「帆重く腹愈、飽き、榜潤ひ鳴る更に健なり」、楊萬里の「幾絲の微雨前山に噴き、半點の輕寒牡丹健なり」も、皆氣力の旺なるを言ふなり。

慳は音慳、吝惜なり、詩家の用ふる所は、轉して數義を爲る、僧貫休の「宅成りて天下圖を借りて看る、自ら笑ふ平生眼力の慳なるを」、小訓す、廣く見る能はざるを言ふなり、姚孝錫の「歡來り聊か破る酒腸の慳を」、杜本の「飲量素より慳なるも酒を止め難し」、陸游の「狂恨す酒樽の慳なるを」、竝に乏少を言ふなり、折彥質の「峭峯斷續して天容缺け、高壘縈紆して地勢慳」、其境の迫窄なるを言ふなり、朱淑真の「東風雨を吹

東風吹雨苦生寒慳溢春光不放寬言奮
而滯之也楊萬里上巳巧當寒食後春風
慳放牡丹枝又咏海棠開時慳爲渠儂醉
卻恨飄零可若何訓僅蓋慳溢而僅及也
朱熹只有詩情老更慳又下走才慳難屬
和陸游疾病臨觴懶塵埃得句慳竝言才
乏而吟溢也袁桷三江潮來日初晚九堰
雨慳河未盈言雨乏也韓琦近臘猶慳六
出繁忽驚盈尺及民寬范成大臘淺得春
全未暖雪慳和雨最難晴險游澤國氣候
晚仲冬雪猶慳木落風初勁雲低雨尙慳
竝言溢而不雨也蘇軾祈雪贈舒堯文願
君發豪句嘲詠破天慳本李白披豁露天
慳言天奮而不降雪也陸游東風吹雨破

夜航詩話卷之三

いて苦に寒を生じ、春光を慳溢して放寬せず、奮にして之を
滯るを言ふなり、楊萬里の「上巳巧當寒食の後、春風慳放す牡
丹の枝」又、海棠を咏じて「開時慳に渠儂の爲めに酔ふ、卻て恨
む飄零若何す可き」云、僅に訓す、蓋、慳溢して僅に及ぶなり、朱
熹の「只詩情の老いて更に慳なる有り」、又「下走才慳にして屬
和し難し」、陸游の「疾病觴に臨む懶、塵埃句を得る慳」云、竝
に才乏しくして吟溢るを言ふなり、袁桷の「三江潮來り日初め
て晚れ、九堰雨慳にして河未だ盈たす」云、雨の乏しきを言ふ
なり、韓琦の「臘に近くして猶ほ慳にして六出繁く、忽ち驚く
盈尺民に及ぶ寬なり」、范成大の「臘淺春を得て全く未だ暖なら
ず、雪慳にして雨に和し最も晴れ難し」、陸游の「澤國氣候晚
く、仲冬雪猶ほ慳なり」、木落ち風初めて勁く、雲低く雨尙ほ慳
なり」云、竝に溢りて雨ふらざるを言ふなり、蘇軾の雪を祈り、
舒堯文に贈るに「願くは君豪句を發し、嘲詠天慳を破れ」云、李
白の「披豁天慳を露はすに本づく」、天奮にして雪を降らざる
るを言ふなり、陸游の「東風、雨を吹いて天慳を破る」、陸游の
「晴れん」云、欲して晴れず天氣慳」云、溢りて晴れざるを言ふな

天慳、薩都刺欲晴不晴天氣慳、言澁而不晴也、高啓時當嚴冬、雪初霽、古木寒瘦、流泉慳、言水乏流澁也、王貞白、石響鈴聲遠、天寒弓力慳、言弓勁而難挽也、方孝孺、問俗鄉音異、消愁酒價慳、楊載、不喜爲文富、長憂得酒慳、言不能容易沽也、又韓愈、巨靈高其捧、保此一掬慳、楊萬里、蠶簡三更寂、寒燈半點慳、楊基、美人別後綠、詩瘦、白玉腰圍一尺慳、猶弱也、言不足其數也、又惡錢曰慳錢、見鶴林玉露。

唐荆川云、青雲士出伯夷傳、謂聖賢立言傳世者、非謂登仕路也、自宋人用青雲字於登科詩中、遂誤至今不改耳、按青雲本謂晴天、因謂人之顯著、有以德言者、有以

り、高啓の「時は嚴冬に當り雪初めて霽れ、古木寒瘦、流泉慳なり」ミ、水乏しく流澁るを言ふなり、王貞白の「石響鈴聲遠く、天寒く弓力慳なり」弓勁くして挽き難きを言なり、方孝孺の「俗に問ふ郷音の異を、愁を消す酒價慳なり」ミ、楊載の「喜ばず文を爲る富むを、長く憂ふ酒を得る慳なるを」ミ、容易に沽ふ能はざるを言ふなり、又韓愈の「巨靈高く其れ捧ぐ、此一掬慳を保つ」、楊萬里の「蠶簡三更寂、寒燈半點慳なり」、楊基の「美人別後詩に緣りて瘦せ、白玉腰圍一尺慳なり」ミ、猶ほ病のごとし、其數に足らざるを言ふなり、又惡錢を慳錢ミ曰ふ、鶴林玉露に見ゆ。

唐荆川云ふ、青雲の士は伯夷傳に出で、聖賢の言を立て世に傳ふる者を謂ふ、仕路に登るを謂ふに非ざるなり、宋人青雲の字を登科詩中に用ひしより、遂に誤りて今に至るまで改めざるのみを、按ずるに青雲は本々晴天をいふ、因て人の顯著なるを謂

位言者、又有言世外高志、伯夷傳所稱者、言其德可仰如天之高也、范雎傳不意君能致於青雲之上、班固答賓戲抗之在青雲之上、揚雄解嘲當途者升青雲、顏延年五君詠、仲容青雲器實稟生民秀、此謂官位之高顯也、續逸民傳孔稚珪隱居衡陽、王鈞過之、珪曰、殿下處朱門、遊紫闥、詎得與山人交耶、王曰、身處朱門、而情遊滄海、形入紫闥、而意在青雲、世說沙門道研求講蘇瓊、意在理、瓊每見則談問玄理、研無由啓口、曰、每見府君、徑將我入青雲間、何由得論地上事、遂焚其券、北山移文、于青雲而直上、阮籍詩抗身青雲中、網羅孰能施、王康琚反招隱、放神青雲外、絕跡窮

徳ふ、を以て言者ふあり、位を以て言ふ者あり、又世外高志を言ふあり、伯夷傳に稱する所は其徳の仰ぐ可き、天の高きが如きを言ふなり、范雎傳に意はさりき、君の能く青雲の上に致さんとは、班固の答賓戲に、之を抗けて青雲の上に在り、揚雄の解嘲に、途に當る者は青雲に升る、顏延年の五君詠に、「仲容は青雲の器、實に生民の秀を稟く」と、此れ官位の高顯を謂ふなり、續逸民傳に、孔稚珪、衡陽に隱居す、王鈞、之に過ぎる、珪曰く、殿下朱門に處り紫闥に遊ぶ、詎ぞ山人と交るを得んや、王曰く、身は朱門に處り、而して情は滄海に遊ぶ、形は紫闥に入り、意は青雲に在り、世説に、沙門道研、講を蘇瓊に求む、意、瓊を理するに在り、瓊見る毎に則ち玄理を談問す、研、口を啓くに由し無し、曰く、府君を見る毎に、徑に我を將て青雲の間に入る、何に由て地上の事を論ずるを得ん、遂に其券を焚く、北山移文に、青雲を干して直に上る、阮籍の詩に、「身を抗く青雲の中、網羅孰か能く施さん」と、王康琚の反招隱に、「神を放つ青

山中、此則謂遁世之高遠也、事理之無窮、不可執一而論已、

青雲志亦有二義、續逸民傳、嵇康早有青雲之志、謂高尚其事也、王勃滕王閣序、窮當益堅、不墜青雲之志、張九齡詩、宿昔青雲志、蹉跎白髮年、竝謂顯功德也、俗人謂貪進官、非也、

風塵亦有數義、漢書終軍傳、邊境時有風塵之警、後漢祭彤傳、胡夷皆來內附、野無風塵、班固答賓戲、躡風塵之會、履顛沛之勢、晉書陶璜傳、風塵之變、出於非常、吳邁袁詩、人馬風塵色、知從河塞還、杜甫昭陵詩、風塵三尺劍、社稷一戎衣、竝言兵亂也、晉書王戎傳、王衍神姿高徹、自然是風塵

雲の外、跡を絶つ窮山の中、此れ則ち世を遁るの高遠を謂ふなり、事理の窮り無き、一を以て論ず可からざるのみ。

青雲の志も亦二義有り、續逸民傳に、嵇康早く青雲の志有り、其事を高尚にするを謂ふなり、王勃の滕王閣の序に、窮しては當さに益、堅かるべし、青雲の志を墜さず、張九齡の詩に、「宿昔青雲の志、蹉跎たり白髮の年」、竝に功を顯はし徳を建つるを謂ふなり、俗人官を進むを貪るを謂ふは、非なり。

風塵も亦數義有り、漢書終軍傳に、邊境時に風塵の警有り、後漢祭彤傳に、胡夷皆來り内附す、野に風塵無し、班固の答賓戲に、風塵の會を躡み、顛沛の勢を履む、晉書陶璜傳に、風塵の變、非常に出づ、吳邁袁の詩に、「人馬風塵の色、知る河塞より還る」、杜甫の昭陵の詩に「風塵三尺の劍、社稷一戎衣」、竝に兵亂を言ふなり、晉書王戎傳に、王衍は神姿高徹、自然是れ風塵表の物、郭璞の遊仙の詩に、「高踏す風塵の外、長揖して

表物、郭璞遊仙詩、高踏風塵、外長揖謝夷齊、此對物外而謂人寰也、世說注、竺法深居止京邑、以不耐風塵、考室剡東、岬山、又引王丞相別傳云、導家世貧約、恬暢樂道、未嘗以風塵經懷、北夢瑣言、夏侯孜相國未遇、伶傳風塵、所跨蹇驢、無故墜井、陸機詩、京洛多風塵、素衣化爲緇、竝謂俗累已、晉書虞喜傳、處靜味道、無風塵之志、戴若思傳、安窮樂志、無風塵之慕、方干詩、風塵辭帝里、舟楫到家林、泛指宦途而言、李白鳴皋歌、若使巢由桎梏於軒冕、冷亦奚異乎、夔龍躡躡於風塵、謂俗吏之職也、杜甫悲君隨燕雀、薄宦走風塵、高適一臥東山三十春、豈知書劍老風塵、元稹朝陪香案

夷齊に謝す」ミ、此れ物外に對して人寰を謂ふなり、世說の注に、竺法深、京邑に居止し、風塵に耐へざるを以て、室を剡東の岬山に考すミ、又た王丞相別傳を引きて云ふ、導の家は世々貧約にして、恬暢道を樂み、未だ嘗て風塵を以て懷に經せずミ、北夢瑣言に、夏侯孜相國未だ遇はざりしミ、風塵に伶傳す、跨る所の蹇驢故無して井に墜つミ、陸機の詩に、「京洛風塵多く、素衣化して緇を爲る」ミ、竝に俗累を謂ふのみ、晉書虞喜傳に、靜に處り道を味ひ、風塵の志無しミ、戴若思傳に、窮に安んじ志を樂み、風塵の慕無しミ、方干の詩に、「風塵帝里を辭し、舟楫家林に到る」ミ、泛く宦途を指して言ふ、李白の鳴皋歌に、「若し巢由をして軒冕に桎梏せしめば、亦奚を夔龍の風塵に躡躡たるに異ならんや、俗吏の職を謂ふなり、杜甫の「悲む君が燕雀に隨ひ、薄宦風塵に走る」、高適の「一臥東山三十春、豈知らんや書劍風塵に老ゆるを」、元稹の「朝に香案の下に陪し、暮に風塵

下暮作風塵尉此乃對京官而謂郡縣也、又宋人王明清摭青雜說謂妓坊爲風塵、曰妾失身風塵曰我在風塵中蓋亦謂其汚亂也、

李攀龍詩明朝何處風塵吏回首青雲是舊遊時李出守順德蓋朝官清高故以青雲稱郡職諠濁故謂之風塵唐人蔣吉次青雲驛云行人幾在青雲裏底事風塵猶滿衣亦以風塵反襯青雲其義可見已世或作詩而不識字有位在青雲而言稱風塵者其失體何如哉、

余平生爲詩不喜疊韻爲人次韻尤忌數疊恐傷風雅之道蓋疊和相競是誇能鬪技小人之爭不翅汚翰墨也僧義堂空華

の尉と作る、此れ乃ち京官に對して郡縣を謂ふなり、又、宋人王明清の摭青雜說に、妓坊を謂ひて風塵と爲す、曰、妾は身を風塵に失ふ曰、我は風塵の中に在り、蓋、亦其汚亂を謂ふなり。

一四八

李攀龍の詩に、「明朝何の處か風塵の吏、首を回せば青雲走れ舊遊」云、時に李出で、順德に守たり、蓋、朝官は清高なり、故に青雲を以て稱し、郡職は諠濁なり、故に之を風塵と謂ふ、唐人蔣吉の青雲驛に次するに云ふ、「行人幾たびか青雲の裏に在り、底事ぞ風塵猶は衣に滿つ」云、亦風塵を以て青雲に反襯す、其義見る可きのみ、世或は詩を作りて字を識らず、位、青雲に在りて、言、風塵と稱する者有り、其體を失する何如ぞや。

余平生詩を爲るに、疊韻を喜ばず、人の爲めに次韻するに、尤も數疊を忌む、風雅の道を傷はんことを恐る、蓋、疊和相競ふは、是れ能を誇り技を鬪はす小人の争にして、翅に翰墨を汚すの

集有五言律至三十和、七言律至四十和者、何其不憚煩之甚。

伊洛淵源錄載胡文定公家至貧然貧之一字於親故間非唯口不道、手亦不書、嘗戒子弟曰、對人言貧者、其意將何求、汝曹志之、予拙於生事、一貧徹骨、然未嘗俛眉爲可伶之色、庶幾不改其樂、但於詩詞間動輒告飢號寒、及讀斯語、惕然慚悔、寧寒飢而死、終不作寒乞聲、向人、自是翹窮之語、絕筆不復言矣、楊誠齋夜寒獨覺詩、尙有布衾寒似鐵、無衾似鐵始言貧、亦有見乎此也、陳后山能忍貧、平生閉口不肯少陳、達官名士有袖白金餽之、見其容色無窮態、竟不敢出、此尤可欽也、或曰、如淵明

みならざるなり、僧義堂の空華集に、五言律、三十和に至り、七言律、四十和に至る者有り、何ぞ其れ煩を憚らざるの甚しき。

伊洛淵源錄に載す、胡文定公家至りて貧し、然れども貧の一字は親故間に於ても、唯に口に道はざるのみに非ず、手も亦書せず、嘗て子弟を戒めて曰、人に對して貧を言ふは、其意將に何をか求めんことす、汝が曹之を志せ、予生事に拙に、一貧骨に徹す、然れども未だ嘗て眉を俛し、恰も可きの色を爲さず、庶幾くば其樂を改めず、但、詩詞の間に於て、動もすれば輒ち飢を告げ寒を號ぶ、斯の語を讀むに及び、惕然として慚悔す、寧ろ寒飢にして死するも、終に寒乞の聲を作して人に向はず、是より窮を懲ふるの語は筆を絶ちて復言はず、楊誠齋の夜寒獨り覺むる詩に、尙ほ布衾の寒、鐵に似たる有り、衾の鐵に似たる無くして始めて貧を言はんこと、亦此に見る有るなり、陳后山能く貧を忍び、平生口を閉ちて肯て少しも陳へず、達官名士、白金を袖にして之に餽る有り、其容色の窮態無きを見て、竟に敢て出さず、此尤も欽す可きなり、或ひて曰、淵明の如きは如何こと、余曰、淵

何如余曰淵明固可吾則不可身分乃爾
該所謂鳥學鷺鷥多見其不知量也

陸儼山曰登山涉水之間專事賦詩則反
礙真樂大抵江山既勝風日又佳從以良
明韻士便當極躋攀眺望之興罷從燈下
或日夕追懷所遇歷歷在目然後發之詩
文庶幾各極其愜而無累矣此言大好可
謂遊山妙典曲江春宴錄曰握月擔風且
留後日吞花臥酒不可過時最是活脫
宋喻汝礪謁諸葛廟詩有天心固難亮之
句謁廟犯諱非禮莫甚焉凡題墓贊像苟
不用心或有此失不可不慎也

韓退之詩泥盆淺水詎成池夜半青蛙墜
得知元劉善因斗水那容掉尾鯨青蛙昨

明は固より可なり、吾は則ち不可なり、身分乃ち爾り、諺に謂はゆる、鳥、鷺鷥を學べば、多く其の量を知らざるを見るなり。

陸儼山曰、山に登り水を渉るの間、專ら詩を賦するを事せば、則ち反て眞樂を礙く、大抵江山既に勝、風日又佳、從ふに良朋韻士を以てす、便ち當に躋攀眺望の興を極むべし、罷めて燈下に從ひ、或は日夕過ふ所を追懷すれば、歷々として目に在り、然る後之を詩文に發す、庶幾くは各其愜を極めて累なからん、此の言大に好し、遊山の妙典と謂ふ可し、曲江春宴錄に曰、月を握り風を擔ふは、且らく後日に留め、花に吞み酒に臥すは、時を過す可からず、最も是れ活脫なり。

宋の喻汝礪、諸葛廟に謁する詩に、「天心固に亮し難し」の句あり、廟に謁して諱を犯す、非禮焉より甚しきは莫し、凡そ墓に題し像に贊する、苟も心を用ひずんば、或は此の失あらん、慎まざる可からず。

韓退之の詩に、「泥盆淺水詎ぞ池を成さん、夜半青蛙墜、知るを得たり」、元の劉善因、「斗水那ぞ容れん尾を掉ふ鯨を、青蛙昨

夜聖來鳴、亦盆池詩、全剽襲韓詩也、按聖字爲虛活用、譯索禿窟蓋其所未可知、而早已得知之、故曰聖、僧某郊行作、白衫裝作野人樣、早被村翁聖得知、既曰早又曰聖、何耶、信哉作詩不可不識字也、

詩用星字、猶云點也、一點微火曰星火、物碎點點、瑣細曰星碎、細貨雜陳者曰星貨舖、故謝康樂詩、星星白髮垂、歐陽公秋聲賦、駉然黑者爲星星、言白髮始生、髣華點點也、因爲些少之義、楊誠齋、風蟬幸自無星事、強爲閑人、報夕陽、言無一點細事也、張谷山、冬來未覺有星寒、山未全墮儘耐看、言未有一點微寒也、

藍尾酒、謂最後飲之杯也、莊綽雞肋編云、

夜聖來鳴ヨシキ、亦盆池の詩にして、全く韓詩を剽襲するなり、按ずるに、聖の字虛を爲して活用す、索禿窟を譯す、蓋、其知る可からざる所にして、早く已に之を知るを得、故に聖と曰ふ、僧某の郊行の作に、「白衫の裝野人の樣を作し、早く村翁に聖得知せ被る」と、既に早と曰ひ、又聖と曰ふ、何ぞや、信なるかな、詩を作るには、字を識らざる可からざるなり。

詩に星の字を用ふ、猶點と云ふがごとし、一點の微火を星火と曰ひ、物碎けて點々瑣細むるを星碎と曰ひ、細貨雜陳する者を星貨舖と曰ふ、故に謝康樂の詩に、「星星白髮垂る」、歐陽公の秋聲賦に、「駉然さいとして黒き者は星星を爲る」と、白髮始めて生じ髣華點々たるを言ふなり、因て些少の義を爲す、楊誠齋の「風蟬幸に自ら星事無し、強いて閑人の爲に夕陽を報ず」と、一點の細事無きを言ふなり、張谷山の「冬來り未だ覺えず星寒有るを、山未だ全く墮せず儘、看るに耐へたり」と、未だ一點の微寒有らざるを言ふなり。

藍尾酒は、最後に飲む杯を謂ふなり、莊綽の雞肋編に云ふ、白樂

白樂天詩歲盡後推藍尾酒、春盤先勸膠牙餠、藍與婪通、食也、嘗見唐小說、載有翁姥共食一餅、忽有客至云、使秀才婪泥於、是二人所啖甚微、末乃授客、其得獨多、故用貪婪之字、如歲盡屠蘇酒是飲至、老大最後所得多、則有貪婪之意、黃朝英細素雜記云、婪本作擘、擘者貪也、謂處於座末得酒最晚、腹癢于酒、既得酒巡匝、更貪婪之、故擘字從口、足明貪婪之意、又楊伯岳臆乘、後世酒器有伯雅叔雅季雅、大曰婪尾觴、此謂壓尾大盃也、

唐末人謂芍藥爲婪尾春、以其殿群芳也、楊萬里詩、破除婪尾暑、領略打頭清、程松園詩、紗帽鬢絲婪尾席、玉簫金管兩頭船、

天の詩に、「歲盡後に推す藍尾酒、春盤先つ勸む膠牙餠」と、藍は婪と通ず、食なり、嘗て唐の小説を見るに、翁姥あり共に一餅を食す、忽、客の至るあり云ふ、秀才をして婪泥せしめよと、是に於て二人啖ふ所、甚だ微なり、末に乃ち客に授く、其得獨り多しと載す、故に貪婪の字を用ふ、歲盡屠蘇酒の如き、是れ飲んで老だに至り、最後に得る所、多ければ則ち貪婪の意有り、黃朝英の細素雜記に云ふ、婪、本と擘に作る、擘は貪なり、座末に處り酒を得る最晚く、腹、酒に癢く、既に酒の巡匝を得て、更に之を貪婪するを謂ふ、故に擘の字口に從ふ、貪婪の意を明にするに足る、又楊伯岳の臆乘に、後世の酒器に、伯雅叔雅季雅あり、大を婪尾觴と曰ふ、此れ壓尾の大盃を謂ふなり、

唐末の人、芍藥を謂ふて婪尾春と爲す、其群芳に殿するを以てなり、楊萬里の詩に、「破除す婪尾の暑、領略す打頭の清」と、程松園の詩に、「紗帽鬢絲婪尾の席、玉簫金管兩頭の船」と、藍、婪

蓋因婪尾酒通用、凡居最後者、皆謂之婪尾也。

張潮江南行、芙蓉葉爛別西灣、蓮子花開猶未還、范成大詩、荻牙抽、筍河、鮪上、棟子花、開石首來、明蔣山卿詩、春風細雨柴門閉、一樹鶯啼杏子花、朱多炆詩、峭風欲闌遊人屢、吹盡墻頭奈子花、楊慎詩、菜子花如黃金色、子俗語助辭、猶金子扇子之類、蓋單名以其難呼、故添子字耳、月子亭子人率知之、又有雨子、雪子、樓子、寺子等、竝見宋人詩。

勒韻、部勒之意、謂定其所押、不容移易也、唐詩紀有、王灣麗生殿、賜宴同勒、天前煙、年四韻、應制五言律詩、馬鑣銜曰勒、蓋比

尾酒に因りて通用す、凡最後に居る者は、皆之を婪尾と謂ふなり。

張潮の江南行に、「芙蓉葉爛れて西灣に別れ、蓮子花開きて猶未だ還らず」、范成大の詩に、「荻牙筍を抽く河鮪の上、棟子花は開きて石首來る」、明の蔣山卿の詩に、「春風細雨柴門閉ち、一樹鶯は啼く杏子の花」、朱多炆の詩に、「峭風闌せんぞ欲す遊人の屢、吹き盡す墻頭奈子の花」、楊慎の詩に、「菜子花は黄金の色の如し」、子は俗語の助辭にして、猶は金子扇子の類のこし、蓋、單名は其呼び難きを以て、故に子の字を添ふるのみ、月子亭子は、人率ね之を知る、又雨子、雪子、樓子、寺子等あり、竝に宋人の詩に見ゆ。

韻を勒すこは、部勒の意にして、其押す所を定め移易すべからざるを謂ふなり、唐詩紀に、王灣、麗生殿に、宴を賜ひ、同じく天前煙年の四韻を勒して制に應ずる五言律詩有り、馬の鑣銜を勒こ曰ふ、蓋、之を馬を制するに勒を以てせば、敢て肆まこに奔

之制馬以勒不敢肆奔軼也若但限字者
不必定其處後先自在也劉得仁春雨詩
氣蒙楊柳重寒勒牡丹遲李山甫牡丹詩
邀勒春風不蚤開衆芳飄後上樓臺范成
大詩司花好事相邀勒不著笙歌不肯春
又隔年寒力凍芳塵勒住東風寂寞濱竝
言鉗勒而駐住之也逼致人死曰逼勒令
死絞殺曰勒死亦此義也

詩用春風有富盛之意秋雨秋風有衰頹
之意宋寶慶初錢塘詩人陳起有作曰秋
雨梧桐皇子府春風楊柳相公橋以其哀
濟邸而諱史彌遠逮下獄流竄劈其所著
江湖集版詔禁士大夫作詩彌遠死詩禁
解蓋詩意所寓在春風秋雨四字也俗謂

軼せざるに比するなり、若し但た字を限るは、必しも其處を定
めず、後先自在なり、劉得仁春雨の詩に、「氣は楊柳に蒙つて重
く、寒は牡丹を勒して遲し」云、李山甫の牡丹の詩に、「春風に
邀勒せられて蚤く開かず、衆芳飄る後に樓臺に上る」云、范成
大の詩に、「司花好事相邀勒し、笙歌を著けず肯て春ならず」云、
又「年を隔てて寒力芳塵を凍らし、勒住す東風寂寞の濱」云、竝
に鉗勒して之を駐住するを言ふなり、逼りて人を死に致すを逼
勒して死せしむ云曰ふ、絞殺を勒死云曰ふも、亦此の義なり。

詩に春風を用ふるは、富盛の意あり、秋雨秋風は、衰頹の意あ
り、宋の寶慶の初、錢塘の詩人陳起、作有り、曰、「秋雨梧桐皇子
府、春風楊柳相公の橋」云、其濟邸を哀みて史彌遠を諱るを以
て、逮へて獄に下して流竄し、其著す所の江湖集の版を劈き、詔
して士大夫の詩を作るを禁ず、彌遠死し、詩禁解く、蓋、詩意の
寓する所は、春風秋雨の四字に在り、俗に財貨を借るを請ふを

請借財貨曰打秋風、倡家謂遊惰貧者曰秋風客、又老妓曰秋娘、見白香山詩、其義可見已。

字書水旁曰沙譯白末、沙田沙村沙戶沙店、皆謂依江海之汀者、杜詩野船明細火宿雁聚圓沙、言平沙中一團高起者、張籍詩送客沙頭宿、僧竹裏、言宿水邊村家、劉克莊有十五里沙詩、蓋如我鎌倉七里濱、安房九十九里濱者也。

平衍田野謂之川、杜預左傳注、平川廣澤可井者、井之原阜隄防不可井者、町之蓋井田溝洫之制、自遂達於溝、自溝達於洫、自洫達於澮、自澮達於川、周禮遂人、凡治野、夫間有遂、十夫有溝、百夫有洫、千夫有

謂ふて、打秋風ミ曰ふ、倡家に遊惰の貧者を謂ふて、秋風客ミ曰ふ、又老妓を秋娘ミ曰ふミ、白香山の詩に見ゆ、其義見る可きのみ。

字書に、水旁を沙ミ曰ふ、白末ミ譯す、沙田、沙村、沙戶、沙店は、皆江海の汀に依る者を謂ふ、杜詩に「野船細火明に、宿雁圓沙に聚る」ミ、平沙中の一團高起する者を言ふ、張籍の詩に「客を送る沙頭の宿、僧を招く竹裏の碁」ミ、水邊の村家に宿するを言ふ、劉克莊、十五里沙の詩あり、蓋、我鎌倉の七里が濱、安房の九十九里の濱の如き者なり。

平衍の田野、之れを川ミ謂ふ、杜預左傳の注に、平川、廣澤、井ミす可き者は之を井ミし、原阜隄防の井ミす可からざる者は之を町ミすミ、蓋、井田溝洫の制は、遂より溝に達し、溝より洫に達し、洫より澮に達し、澮より川に達す、周禮遂人、凡を野を治むる、夫間に遂あり、十夫に溝あり、百夫に洫あり、千夫に澮あり、

澮萬夫有川、則一川之地三十二里有半、所以稱平川也。冊府元龜、唐明皇賜同州刺史姜師度詔書、今原田彌望、吠澮連屬、由來榛棘之所、逼爲秔稻之川、謂平田大關也。杜甫移居東屯作、平地一川穩、高山四面同、戴叔倫詩、一川紅樹迎霜老、數曲清溪繞寺寒、郭雲寒食、蘭陵士女滿平川、郊外紛紛拜古埏、王安石、梅殘半林雪、麥漲一川雲、蘇軾、目盡孤鴻落照邊、遙知風雨不同川、楊萬里、霜紅半臉金罍子、雪白一川蕎麥花、朱熹、九曲將窮眼豁然、桑麻雨露見平川、楊慎、遊點蒼山記、滿川烈日、農人刈麥、皆謂平田廣衍之境也、玉堂閑話云、興元斗山觀、自平川聳起一山、四面

萬夫に川あり、則ち一川の地は、三十二里有半にして、平川と稱する所以なり、冊府元龜に、唐の明皇同州刺史姜師度に賜ふ詔書に、今原田彌望、吠澮連屬す、由來榛棘の逼き所、秔稻の川と爲す、平田大關を謂ふなり、杜甫の東屯に移居する作に、「平地一川穩に、高山四面同じ」、戴叔倫の詩に、「一川の紅樹霜を迎へて老い、數曲の清溪寺を繞つて寒し」、郭雲の寒食に、「蘭陵の士女平川に滿ち、郊外粉々として古埏を拜す」、王安石の「梅は殘す半林の雪、麥は漲る一川の雲」、蘇軾の「目は盡く孤鴻落照の邊、遙に知る風雨川を同くせず」、楊萬里の「霜は紅なり半臉金罍子、雪は白し一川蕎麥の花」、朱熹の「九曲將に窮らん」として眼豁然、桑麻雨露平川を見る」、楊慎の點蒼山に遊ぶ記に、滿川の烈日、農人麥を刈るを、皆な平田廣衍の境を謂ふなり、玉堂閑話に云、興元斗山觀は、平川より一山を聳起し、四面懸絶、其上斗名底に方る、故に之を號す、此れ猶ほ平野と云ふがごと

懸絶其上方於斗底故號之此猶言平野也蜀中曰川亦謂其入峽數百里始得平野豁然廣衍范成大詩從此蜀川平似掌更無高處望東吳是也謂取岷江沱江黑水白水四大川以爲名者蓋後世之說已說文欺詐欺也詩人所用有數義丘爲梨花冷豔全欺雪餘香乍入衣徐鉉咏泉潤滋苔蘚欺茵席聲入杉松當管絃杜牧詆筆和鉛欺買馬讚道論功鄙蕭曹此常用字面言不可辨別也盧延讓莫欺零落殘牙齒曾吃紅綾餅餠來盧肇老猿嘯狄還欺客來撼窓前百尺藤孫魴咏柳顛狂絮落還堪恨分外欺凌寂寞人姚合天公與貧病時輩腹輕欺竝謂輕侮也李九齡寒

きなり蜀中に川と曰ふも亦其の峽に入る數百里始めて平野を得豁然として廣衍なるを謂ふ范成大の詩に「此れ従り蜀川は平にして掌に似たり、更に高處の東吳を望む無し」と是なり、岷江沱江・黑水・白水の四大川を取り、以て名を爲すを謂ふは、蓋後世の説のみ。

說文に、欺は、詐欺なり。詩人の用ふる所は數義あり、丘爲の梨花に「冷豔全く雪を欺き、餘香乍ち衣に入る」、徐鉉の泉を咏するに、「潤は苔蘚を滋くして茵席を欺き、聲は杉松に入り管絃に當る」、杜牧の「筆を砥め鉛に和し買馬を欺き、道を讚し功を論し蕭曹を鄙しむ」と、此れ常用の字面にして辨別す可からざるを言ふなり、盧延讓の「欺く莫れ零落の殘牙齒、曾て紅綾餅餠を吃して來る」、盧肇の「老猿嘯狄還た客を欺き、來り撼かす窓前百尺の藤」、孫魴の柳を詠するに、「顛狂せる絮落つ還た恨むに堪へたり、分外欺凌す寂寞の人」、姚合の「天公貧病を與へ、時輩復輕欺す」と、竝に輕侮を謂ふなり、李九齡の寒梅に「留め得

梅留得和羹滋味在、任他風雪苦相欺、秦
觀風霜欺獨宿、燈火伴冥搜、謝靈運、皎皎
明發心、不爲歲寒欺、姚合、遠鐘驚漏壓、微
月被燈欺、白居易、酬思黯戲贈、妬他心似
火、欺我鬢如霜、竝侵謂侵凌也、

紆訓、屈唐詩多用之、如張九齡道在紆宸
眷、風行動容篇、李適之、鳳樓紆容幸、龍舸
暢宸襟、崔泰之、饒送紆天什、恩榮賜御衣、
宋之間、何日紆眞果、復來入帝京、是也、獨
少陵、三分割據紆籌策、本當用運字、爲聲
律替代耳、虞注云、鼎立之計、屈曲而費、心
思可笑、焦氏筆乘調未伸、其說尤迂、

端訓、正、端的之意、猶言眞而輕、故譯保庇
尼漢書許皇后傳、奈何妾薄命、端遇竟寧

て羹を和せば滋味在り、任他風雪の苦に相欺くを、秦觀の「風
霜獨宿を欺き、燈火冥搜に伴ふ」、謝靈運の「皎々たる明發の
心、歳寒の爲めに欺かれず」、姚合の「遠鐘は漏の壓するに驚き、
微月は燈に欺かる」、白居易の思黯の戲贈に酬ゆるに、「他を妬
む心は火に似たり、我を欺く鬢は霜の如し」、竝に侵凌を謂ふ
なり。

紆は屈ミ訓ず、唐詩に多く之を用ふ、張九齡の「道は在りて宸眷
を紆し、風は行きて容顏を動かす」、李適之の「鳳樓容幸を紆し、
龍舸宸襟を暢む」、崔泰之の「饒送天什を紆し、恩榮御衣を賜
ふ」、宋之間の「何の日か眞果を紆し、復た來りて帝京に入ら
ん」、是れなり、獨り少陵の「三分割據籌策を紆す」、本に當に
運の字を用ふべし、聲律の爲めに替代するのみ、虞注に云ふ、鼎
立の計、屈曲して心思を費すミ、笑ふ可し、焦氏筆乘に、未だ伸
びずミ訓ず、其說尤も迂なり、

端は正ミ訓ず、端的の意、猶ほ眞ミ言ふがごとくにして、而して
輕し、故に保庇尼ミ譯す、漢書許皇后傳に、奈何せん妾は薄命に

前、顔注、端正也、鮑昭詩、容華坐消歇、端爲誰苦辛、張籍、共賀春司能鑒識、今年端合得、公卿、陸龜蒙、素藹多蒙、別黠欺、此花端合在、瑤池、黃庭堅、玉堂端要眞學士、須得儋州禿髻翁、楊萬里、未惜詩脾苦、端令鬼膽寒、陸游、新買一蓑苔綠、此生端欲伴漁翁、王十朋、聲名毀譽常相隨、死生窮達端有命、陳與義、此間兼吏隱、端不減遊嵩、沈與求、千萬買鄰眞左計、一邱端約老相過、右併玩竝味、可以會其旨矣、

的明也實也、猶言定而重、譯達失加備、王建、千萬求方好將息、杏花寒食的同、行、麥收上場、絹在軸的、知輸得官家足、杜牧、此信的應中路見亂山、何處拆書看、白居易、

して、端に竟寧の前に遇ふ、顔注に端は正なり、鮑昭の詩に、「容華坐モトに消歇す、端に誰が爲めに苦辛す」、張籍の「共に賀す春司能く鑒識す、今年端に合に公卿を得べし」、陸龜蒙の「素藹多くは別黠に欺かる、此の花端に合に瑤池に在るべし」、黃庭堅の「玉堂端に眞學士を要す、須らく儋州の禿髻翁を得べし」、楊萬里の「未だ詩脾の苦しきを惜まず、端に鬼膽をして寒からしむ」、陸游の「新買の一蓑苔緑なり、此の生端に漁翁に伴はんを欲す」、王十朋の「聲名毀譽常に相隨ふ、死生窮達端に命あり」、陳與義の此の間吏隱を兼ね、端に遊嵩に減せず」、沈與求の「千萬鄰を買ふ眞に左計、一邱端に約す老相過ぐ」、右併せ玩び竝び味ひ、以て其旨を會す可し。

的は、明なり、實なり、猶ほ定言はんが、こくして重し、達失加備かに譯す、王建の「千萬方を求む好將息、杏花寒食的同行せん」、麥は收めて場に上し絹は軸に在り、的に知る官家に輸し得て足る、杜牧の「此の信的に應に中路に見るべし」、亂山河の處にか書を拆いて看ん、白居易の「明之が一棧を攜ふを

除卻朗之攜一棧的應不是別人來皮日
休、開時的定含雲液、刷後還應帶石花、羅
隱到彼的知宣室語、幾時徵拜黑頭公、僧
齊己、來年的有荆南信、回札應緘十樣、隨
皆料度之辭也。

剛亦端的之意、猶言正而重、譯的烏奴、孟
郊、剛有下水船、白日留不得、皮日休終然
合委頓、剛亦慕寥廓、剛戀水雲、歸不得、前
身應是大湖公、又剛爲浮名事事牽、陸龜
蒙、賴得伍員騷思少、夫差剛免似荆懷、又
纔成好夢、剛驚破、溫庭筠世間剛有東流
水、一送恩波更不回、方干、可憐妍豔正當
時、剛被狂風一夜吹、許渾、朱門大有長吟
處、剛傍愁人又送愁、吳融、猶嫌未遠、函關

除卻し、的に應に是れ別人の來らざるなるべし、皮日休の「開
く時的に定めて雲液を含まん、刷りて後ち還た應に石花を帶ぶ
べし」、羅隱の「彼に到りの知る宣室の語を、幾時か徵拜す黑
頭公」、僧齊己の「來年の荆南の信有り、回札應に緘すべし十
様の隨」、皆料度の辭なり。

剛も亦端的の意なり、猶ほ正言はんが、こゝくにして重し、的
烏奴と譯す、孟郊の「剛まごに下水の船有り、白日留め得ず」、皮日
休の、「終然合に委頓すべし、剛に亦た寥廓を慕ふ」、剛に水
雲を戀ひて歸り得ず、前身は應に是れ大湖公なるべし、又、剛
に浮名の爲めに事々牽かる、陸龜蒙の「賴に伍員が騷思の少き
を得、夫差剛に荆懷に似たるを免る、又た、纔に好夢を成して
剛に驚破す」、溫庭筠の「世間剛に東流の水有り、一たび恩波を
送り更に回らず」、方干の「憐む可し妍豔正に時に當り、剛に狂
風に一夜に吹かる」、許渾の「朱門大に長吟の處有り、剛に愁人
に傍ふて又愁を送る」、吳融の「猶嫌ふ未だ遠からず函關の道、

道、正睡剛聞報曉雞、又董毅碧里離雜存論尺云、兩臂引長、剛得八尺、謂之一尋、文語不多見、俗語曰、剛剛、如剛剛是未牌時分、剛剛一千兩足數、是也。

五雜俎云、世多以陽春白雪爲寡和、蓋自唐人詩已誤用之矣、宋玉本文陽春白雪國中屬而和之者數十人、引商刻羽、雜以流徵、屬而和者不過數人、其曲彌高、和者彌寡、則陽春白雪未爲寡和、引商刻羽、乃爲和寡也、此本出於宋人朱昱猗覺寮雜記、在杭錯襲其說也、按後漢書周舉傳引古語曰、陽春之曲、和者必寡、盛名之下、其實難副、此稱古舉之、則非當時創語也、魏陳琳答東阿王牋、夫聽白雪之音、觀綠水

正に睡り剛に聞く曉を報する雞、又董毅の碧里離存に尺を論じて云ふ、兩臂引長すれば剛に八尺を得、之を一尋と謂ふと、文語は多く見ず、俗語に剛々と言ふ、剛々はれ未牌の時分、剛々一千兩の如き、是れなり。

五雜俎に云ふ、世多く陽春白雪を以て和寡しと爲す、蓋唐人の詩より已に之を誤用せり、宋玉の本文に、陽春白雪、國中屬して之を和する者數十人、詠を引き羽を刻み、雜ふるに流徵を以てすれば、屬して和する者數人に過ぎず、其曲彌高ければ、和する者彌寡しと、則ち陽春白雪は未だ和寡しと爲さず、商を引き羽を刻み、乃ち和寡しと爲すなりと、此れ本も宋人朱昱の猗覺寮雜記に出づ、在杭錯りて其說を襲ふなり、按ずるに後漢書周舉傳に、古語を引きて曰、陽春の曲、和する者必ず寡し、盛名の下、其實副ひ難しと、此れ古を稱して之を擧ぐ、則ち當時の創語に非ざるなり、魏の陳琳の東阿王に答ふる牋に、夫れ白雪の音を聽き、綠水の節を觀、然る後東野巴人童謡益著ると、晉の張協

之節然後東野巴人輩鄙益著、晉張協雜詩不見郢中歌、能否居然別、陽春無和者、巴人皆下節、則古詞已然矣、可見唐人有所据也、蓋賦詩擇好字面、故使事不太泥、還將錯就錯、以爲故實、爾若稱高曲必用流徵、便隨理屈而不雅矣、錢希言戲瑕云、高唐賦中、且爲行雲、而詩詞皆作朝雲、莫有稱且雲者、看來古人下字鍊語、皆須韻致、不專以理勝也、此與余所見事異而意同、

天寶遺事係好事僞作、不可爲典要、楊用脩辯之甚詳、溫公通鑑採之過矣、然在詩家不必穿鑿、妄言妄聽、作點綴詞章用可也、

の雜詩に「見すや郢中の歌、能否居然」として別る、陽春和する者無し、巴人は皆下節に、則ち古詞已に然り、見る可し唐人据る所あるなり、蓋詩を賦するには好字面を擇ぶ、故に事を使ふに太だ泥まず、還つて錯を將りて錯に就き、以て故實を爲すのみ、若し高曲を稱して必ず流徵を用ひんせば、便ち理窟に墮ちて雅ならず、錢希言の戲瑕に云ふ、高唐の賦中に、且には行雲を爲るに、而して詩詞は皆朝雲に作る、且雲を稱する者ある莫し、看來れば古人字を下し語を鍊る、皆韻致を須ひ、専ら理を以て勝たざるなり、此れ余の見る所も、事異にして意同じ。

天寶遺事は好事の僞作に係り、典要を爲す可からず、楊用脩之を辯するに甚詳なり、溫公の通鑑之を採るは過れり、然れども詩家に在りては、必しも穿鑿せず、妄言妄聽、詞章を點綴するの用を作して可なり。

簡文雁門太守行云、日逐康居與月氏、蕭子暉隴頭水云、北注徂黃龍、東流會白馬、皆非題中所有之地、吳均答柳惲云、清晨發隴西、日暮飛狐谷、兩地相去三四千里、自非鉗且大丙之御、孰能晨發暮至也、岑參送顏真卿使河隴詩中、樓蘭蕭關與天山崑崙、皆地方懸絕、不相干涉、李白明妃曲、一上玉關道、天涯去不歸、玉關與西域相通、自是公主嫁烏孫所經、非與匈奴往來之道、蓋邊塞之詠、總因非身歷其境、懸擬之詞、故不的當、抑又所以見其曠莫無際、不翅如出襄城之野、故使讀者亦復茫然、此尙有可諉者也、蘇武詩有俯看江漢流之句、其時武在長安、安得有江漢、白居易

簡文の雁門太守行に云、「日逐・康居・月氏」と、蕭子暉の隴頭水に云、「北に注ぎて黃龍に徂ぎ、東に流れて白馬に會す」、皆題中有所の地に非ず、吳均、柳惲に答へて云、清晨隴西を發し、日暮狐谷に飛ぶ、兩地相去る三四千里、鉗且大丙の御に非ざるよりは、孰か能く晨に發し暮に至らんや、岑參の顏真卿の河隴に使するを送る詩の中に、樓蘭・蕭關・天山・崑崙・皆地方懸絶し、相干涉せず、李白の明妃曲に、「一たび玉關の道に上り、天涯去て歸らず」と、玉關は西域と相通し、自らはれ公主の烏孫に嫁すまきに經し所、匈奴と往來するの道に非ず、蓋、邊塞の詠、總べて身其境を歷しに非ざるに因り、懸擬の詞、故に的當ならず、抑、又た其の曠莫にして際無く、翅に襄城の野に出づるが如くならざるを見はず所以なり、故に讀者をして亦復茫然たらしむ、此れ尙ほ諉す可き者あるなり、蘇武の詩に、「俯して看る江漢の流の句あり、其時、武は長安に在り、安ぞ江漢あるを得ん、白居易の長恨歌に、「峨眉山下行人少れなり」と、峨眉は蜀の

易長恨歌、蛾眉山、山下少行人、蛾眉在蜀西極、與幸蜀路、全無交涉、詩家使事、雖不太泥、其亂本國地理、何孟浪之甚、

古韻通押向來諸韻、本皆依宋吳棫韻補、往往不免訛謬、獨清邵長蘅古今韻略、則取鄭庠古韻辨、其例言所論鑿鑿可徵也、惜當時但行吳說、而不行鄭說、致韻學大晦、斷從邵本可也、但謂陽韻古獨用、不與他韻通者、蓋未深考耳、古陽庚二韻、原自相通、觀鹿鳴采芑之詩、可見楊子賦、甘泉中段相通、司馬賦、長門、終篇全通、張籍祭韓文公、凡百六十六句、亦通篇雜用、其餘查古詩唐詩、二韻通押、不遑枚舉、唐人韻法甚嚴、何濫通乃爾、至宋諸大家、尤不可

西極に在り、蜀に幸する路、全く交渉無し、詩家の事を使ふ、太だ泥ます、雖、其本國の地理を亂す、何ぞ孟浪の甚しきや。

古韻は向來の諸韻を通押す、本は皆宋の吳棫の韻補に依る、往々訛謬を免れず、獨、清の邵長蘅の古今韻略は、則ち鄭庠の古韻辨を取る、其例言に論ずる所鑿々として徵す可し、惜むらくは當時但だ吳說を行ひて鄭說を行はず、韻學の大晦を致す、斷して邵本に従ふて、可なり、但、陽韻は古獨用し、他韻は通ぜずと謂ふは、蓋、未だ深く考へざるのみ、古陽庚の二韻、原は自ら相通す、鹿鳴・采芑の詩を觀て、見る可し、楊子の甘泉を賦する、中段に相通じ、司馬の長門を賦する、終篇全く通す、張籍の韓文公を祭る、凡そ百六十六句も、亦通篇雜用す、其餘古詩唐詩を査するに、二韻の通押、枚舉に遑あらず、唐人は韻法甚だ嚴なり、何ぞ濫通乃ち爾らん、宋の諸大家に至りては、尤も指數す可からず、隨園詩話に之を論じ、援據詳明、證據的確なり、以て拘羈を

指數、隨園詩話論之、援據詳明、證驗的確、
可以破拘攣矣。

韓文公雜詩、此日足可惜、凡百四十句、通押東冬江陽庚青蒸七韻、天厨禁樹、示古韻法、舉以爲證、蓋七韻原爲一部、似非叶音、顧寧人譏文公不識古韻、蓋謂此篇及元和聖德之類、李光地辯之詳矣、邵本真文六韻從鄭庠、而東冬江陽七韻一部獨有異同、亦未詳其故也。

佩文詩韻舉古韻通轉、全襲吳棫繆說、可歎也、詩韻含英韻府約編等書、蓋明知其非、然不敢置議、但別附邵本通韻、意欲令學者據依焉、非爲竝行而不相悖也、余照詩韻珠璣、則斷從邵本、斥時本弗取焉。

破る可し。

韓文公の雜詩、此日惜む可きに足る、凡七百四十句、東冬江陽庚青蒸の七韻を通押す、天厨禁樹に、古韻の法を示し、舉げて以て證を爲す、蓋、七韻原さ一部を爲す、叶音に非ざるに似たり、顧寧人、文公の古韻を識らざるを譏るは、蓋、此の篇及び元和聖徳の類を謂ふ、李光地之を辯する詳なり、邵本、真文六韻は庠に從ひ、而して東冬江陽の七韻一部、獨り異同あり、亦未だ其故を詳にせざるなり。

佩文詩韻に、古韻の通轉を擧ぐる、全く吳棫の繆説を襲ふ、歎す可きなり、詩韻含英、韻府約編等の書は、蓋、明に其非を知る、然れども敢て議を置かず、但別に邵本の通韻を附す、意は學者をして、據依せしめんを欲す、竝び行はれて相悖らすを爲すに非ず、余照の詩韻珠璣は、則ち斷じて、邵本に從ひ、時本を斥けて取らず。

東坡與姪書云、凡文字少小時須令氣象
 嶙嶙、文彩絢爛、漸老漸熟、乃造平淡、其實
 不是平淡、乃絢爛之極也、朱子云、文字奇
 而穩、方好、不奇而穩、只是闌輟、曰平淡、曰
 穩、言漸近自然也、然語焉未詳、近見隨園
 詩話曰、詩宜朴不宜巧、然必須大巧之朴、
 詩宜淡不宜濃、然必須濃後之淡、譬如大
 貴人功成、官就、散髮解簪、便是名士風流、
 若少年執袴、遽爲此態、便當笞責、富家彫
 金琢玉、別有規模、然後竹几藤牀、非村夫
 貧相、此能近取譬、垂教切矣、
 詠物猥瑣淫褻者、不肯污筆墨、余恆戒人
 慎之、隨園詩話曰、有某以詩見示、題皆雁
 字夾竹桃之類、余謂之曰、尊作體物、非不

東坡、姪に與ふる書に云ふ、凡そ文字は少小時は須らく氣象
 嶙嶙、文彩絢爛ならしむべし、漸く老い漸く熟して、乃ち平淡に
 造る、其實は是れ平淡ならず、乃ち絢爛の極なり、朱子云ふ、文
 字は奇にして穩なる方に好し、奇ならずして穩なるは、只是れ
 闌輟なり、曰く平淡、曰く穩、漸く自然に近づくを言ふなり、然
 れども語りて未だ、詳ならず、近ごろ隨園詩話を見るに、曰、詩
 は宜しく朴なるべく、宜しく巧なるべからず、然れども必ず須
 く大巧の朴なるべし、詩は宜しく淡なるべく、宜しく濃なるべ
 からず、然れども必ず須く濃後の淡なるべし、譬へば大貴人の
 功成り官就り、散髮解簪するが如し、便ち是れ名士の風流なり、
 若し少年執袴、遽に此態を爲さば、便ち、當に笞責すべし、富家
 の彫金琢玉、別に規模有りて、然る後ち竹几藤牀も、村夫貧相に
 非ざらば、此れ能く近く取り譬へ、教を垂るゝこと切なり。

詠物の猥瑣淫褻なる者は、肯て筆墨を汚さず、余恆に人を戒め
 て之を慎ましむ、隨園詩話に曰、某あり詩を以て示さる、題は皆
 雁字、夾竹桃の類なり、余之に謂つて曰く、尊作、物を體する工

工然享宴者必先有三牲五鼎而後有葵菹醢之供造屋者必先有明堂大厦而後有曲室密廬之備如此種題大家集中非不可存終不可開卷便見韓昌黎與東野聯句古奧可喜李漢編集都置之卷尾此是文章局面不可不知又陝西屈復在京師以詩鳴好改削少陵嘗詆太白以自誇身分耳食者抵死奉若神明山左顏懋倫心不平獨往求見坐定即問曰足下詩有書中乾蝴蝶二十首此委巷小家子題目李杜集中可曾有否屈默然人以爲快此亦垂戒深矣

ならざるに非ず然れども享宴には必ず先づ三牲五鼎ありて而る後ち葵菹醢の供あり屋を造るには必ず先づ明堂大厦有りて而る後に曲室密廬の備あり此種の題の如き大家集中に存す可からざるに非ざるも終に開卷便ち見はる可からず韓昌黎と東野との聯句は古奥にして喜ぶべし李漢編集して都て之を卷尾に置けり此は是れ文章の局面知らざる可からず又た陝西の屈復京師に在り詩を以て鳴る好んで少陵を改削し太白を時詆し以て自ら身分を誇る耳食の者死に抵るまで奉ずること神明の若し山左の顏懋倫心に不平なり獨往きて見えんことを求む坐定つて即ち問ふて曰足下の詩に書中乾蝴蝶二十首あり此れ委巷小家子の題目にして李杜集中に曾てあるべきや否やと屈默然たり人以て快き爲す此れも亦戒を垂るること深し。

夜航詩話卷之三終

日本詩話叢書

大正九年四月廿八日印刷
大正九年五月一日發行

日本詩話叢書卷二

非賣品

編輯者 池田四郎次郎

東京市神田區小川町一番地

立田義元

東京市麹町區有樂町二丁目一番地

吉原良三

右同所

印刷所 報文社



發行所

東京市神田區
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
張替東京三五一三番